
お気に召しませ

あるこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お気に召しませ

【Zコード】

Z2825T

【作者名】

おるー

【あらすじ】

人間がこの世界を己たちだけの世界だと思っている世界、その片隅で彼等は息づく。片田舎でのんびりと過ごす彼女達の元に現れた子供、マルコとティーチ。彼等との出会いによつて未来は大きく変わることになる。

ワンピースのお話になりますが、独自設定、原作ブレイクです。ご注意を。

#カリ説明等（前書き）

ヒロトランに癖が強いのでもう説明をば。

キャラ説明等

名 サキ

元々は江戸中期～後期生まれの芸者

三味線、琴、書道、お茶、お華、舞なんでもござれの売れっ子芸者
生糀の江戸っ子で、気風の良さと色香で巷では人気があった。

権兵衛名（源氏名）は「梅吉」

堤防の工事で人柱として埋められる予定だった娘に、そつくりでありますたという理由から身代わりにさせられた経歴を持つ。

工事現場の近くにあつた小さな社も一緒に壊され、己と同様に殺される娘に同情をしたのか奉っていた狐に助けられる。
狐と融合し生きながらえ不老となつたらしいが記憶が曖昧な為はつきりせず。以降自分が人間なのか、妖狐なのか曖昧なままだつたが子供達との出会いで変化が。

頭の回転が良い為、身代わりに差し出した張本人を捕まえ財産を奪い取つたり平氣であるくらいには悪党。

ヒロインはいわゆる「深川芸者」をモデルとしています。

深川芸者とは文化年間（一八〇四～一八一八）、場所が江戸からみて、東南（辰巳）の方角にあることから、辰巳芸者ともいわれます。辰巳芸者は糀で人情に厚く、芸は売つても色は売らない心意気を自慢とし、

身なりは地味で薄化粧に、当時男のものだつた羽織を引っ掛け座敷に上がり、男っぽい喋り方をします。

また芸名も「鶴吉」「鶴八」「竹助」など男の名前（権兵衛名）を

名乗っています。

深川は吉原と違つて、公認の遊郭ではありません。

ゆえに、正式に遊女を雇い入れることができませんでした。

他の四宿（千住、板橋、品川、新宿）は、宿場町でしたので、飯盛り女として女性を雇い入れることが出来たのですが、深川は宿場でもないでの不可能でした。

そこで、策略を用いました。

契約の時に男性名義で雇用契約をするという大胆な策略を。ですから、辰巳芸者は「ぽん太」とか「米吉」とか男性名で通っているのです。

そういうふた男性名を「権兵衛名」といいます。

実は、この権兵衛名がついていない女性（雇い入れたばかり等）を「名無しの権兵衛」と言つのです。

更に、権兵衛名のついた辰巳芸者を内妻にしますと、「こんさい」権妻となります。

名 セイ

明治後期～大正初期生まれ

刀鍛冶の跡取り息子であったが、跡取りを狙う弟子達の裏切りにより絶命。

その後、同じ場所にて犬神を作り祭ろうとした愚か者の手違いにより、犬神の成り損ないと融合し復活。

悲しいかな、メス犬であつた為女として復活するも、姉となつたサキのおかげで何とか落ち着きを取り戻す。礼儀作法などに厳しい苦

労人。

生前が男であった為に、現在では恋愛に興味はなし。

名 キヌ

濡れ女。

名 任左衛門ニンザエモン

古狸、貉の旦那などと呼ばれる。あまり名前で呼ばれない。

名 タキ

古狸、任左衛門の家内。

クロウ・コスケ

鳥天狗の二人組み。

以上、情報社会と言われる現代日本の社会の歪を利用してつつ生きています。

2部以降の登場人物

与ヨイチ

琵琶の付喪神。梅吉の一番弟子。2代目く調停者>

小峰

櫛の付喪神
芸者見習い

舞台設定

グラントライン内の孤島（秋島）紅葉が多く温泉が沸いている

鳥の名前：イナリ

港町であるくま三ヒガマを中心にして、小さな集落が点在する。周囲には茶屋や商店等が展開されている。裏通りには住民の長屋が連立する。

所謂「娼館」というものは存在しない。

ゲイシャとコウジョの格付け

この島では地味なゲイシャが最高ランクとされている。こちらにランク付けされるのは付喪神や芸に秀でた妖精や精霊などが多い。

華美なユウジョは所謂サキュバス等の、人間の精気を糧としているものが従事するものであつてそれ以外の能力を使わない為下のランク付けとなる。

街の外観等

石畳の階段が多い町となつていて、建物はワノクーと洋風を足して2で割つたようなもの。

イメージ的には日本の伊香保温泉街のような感じ。

夜は彼方此方に灯籠や提灯が灯り、明るく照らします。

特産物

この島は所謂妖怪や妖精、精靈と呼ばれる者が移住してきた場所です。

その為他にはない、妖精の花蜜や幻獣のミルクや卵等の加工品が大変美味です。

しかし、表立つてヒトではないものたちの島とはなつておらず、極秘扱いになつています。

その為加工品のみの売買です。

農場や牧場などは厳重に警備され農も多く張り巡らされています。鉱物や珍しい動植物も豊富です。こちらも厳重に警備されています。また、地妖精等が鍛える武器や防具、細工物も高額で取引されます。

治安について

上記の特産品があるために、海賊からの襲撃が後を絶ちません。

通常の補給目的ならば問題ありませんが、襲撃の場合は、自警団と呼ばれる者が対処します。

島民のほとんどが、この自警団に所属しているので島全体の警備が可能です。

また襲撃者は肉食の島民の餌となり、それに該当しなくとも、島の秘密を暴こうとした場合は記憶を奪われる仕組みになっています。

島民同士のいざこざがあつた場合は、「調停者」と呼ばれる選抜されたものが対処します。

こちらは島のゲイシャの中でもランクの高いものがなるのが決まりです。

追加設定

サキ

「毒婦のウメキチ」懸賞金3億4千万

セイ

「魔狼セイ」懸賞金1億9千万

島の住人である小峰コノニシが天竜人に拉致られた為、追いかけ殲滅、及び天竜人を殺害。

名目では天竜人殺害による世界政府に敵対する反逆者（能力者）

結局のところ本性である獣の姿のみ見られている為、人間の姿では捕まる要素は一切ないという本末転倒な賞金首

一ツイカナイの住人達と子供

蜩の鳴き声が聞こえ始めた夕暮れ。町といえば聞こえは良いが、隣家との距離が200M以上というものが普通である地域。

起伏に富んだ地形と、海岸に隣接していることもあり、古くから漁業で栄えていたその町は現在では、併用して柑橘類などの果実でも栄えていた。

人の住む場所には少なからずとも「変わり者」と呼ばれる人間が現れるもので、その人物も近隣住民から「変わっている」と評されていた。

とはいって、敬遠される類ではなく、いふなれば「愛すべき変人」というべきか。

なんの仕事をしているのか、年齢はいくつなのか、何者なのかは全くもつて不明ではあるが、それでも人間性は悪ではない。

町の年配者とも関係は良好で、近所の悪餓鬼共も、そこでは悪さをしたりはしない。

困つていれば、手を差し伸べてもくれるし、町やご近所に不利益はないのだ。もともとのんびりまつたりとした町の特性故か「まあ、迷惑掛けられてもないんだし、多少（？）解らないことがあっても問題なくね？」といった具合で、友好関係も良好であった。

若者という割には言動が老成しているし、中年というわりには外見がそれを否定する。

不細工といつには整いすぎているし、美形かといえば、そうでもない。

印象に強く残るかと言えばそうでもないが、平凡といつにはかもしい。

出す雰囲気が否定する。

中途半端のようで中途半端でない人間。

其れが件の変人を称するに一番近い表現であった。

さて、その変人である人間、サキの容姿、性格を説明するならば。

日本人らしい黒に近い焦げ茶色の髪は無造作に伸ばされていて、それは腰に届くくらい。

とはいって、手入れを怠っているというわけでもなく、切るのが面倒なだけにも見える。

瞳も同じような色合いで、一重の切れ長な目はやや釣り目。唇はやや小さく薄い。肌は白く、常時日傘を使用するせいか、日焼けの痕跡もない。

とはいって病的でもなく日本人特有のやや黄色おびた健康な肌色だった。

着物が常服であるせいか体型はわかりにくいが、身長はやや高めの170センチほど。

無造作に髪を伸ばしていることから判るが、基本面倒くさがりで、己の興味の沸いたことにしか行動を起そうとしない。

そのくせ、世話好きというか、一旦自分の懐に入れた人間は可愛がる性分な為、それにかかる手間や労力は惜しまない。

現在では其れが己の妹と、飼い猫達に如何なく発揮されているのが。

全体的に見れば整った顔つきではあるが、気分屋にも似た性格とあいまつて美形とも言いがたい。ある意味残念な人間であった。

そんな彼女が今居住しているのは、海岸に面した古民家だった。築200年を越えた屋敷と600坪の土地、小さいながらもプライベートビーチ付きだったのでかなりの金額が予想された。

しかしこある事情により600万ほどで売りにだされていたというのだから、言わずもがな。誰もが買い渋る大人の事情というものがあつたようだ。

しかし、そんな複雑（？）な大人の事情など無視し購入したのが「愛すべき変人」たる彼女だったため、町の住民もどことなく納得してしまつたようだった。

そして、この話は、変わり者と称されるサキとその家族に起きた、奇妙な話の一つである。

—ライカナイの住人達と子供 2

敷地内にある家庭菜園の水撒きが終わってから、縁側に立てひざで座り込み煙草を飲む女。

縁側の下には水を張った盤たひいが置いてあり、トマトやキュウリなどの夏野菜と小振りのスイカが浮かんでいた。

彼女の妹は、飼い猫とともにプライベートビーチへ散歩をしに行ってしまい、今家には彼女一人であった。

手に持つた煙管の吸い口を咥え、美味そうに煙を吐き出すと、手馴れた仕草で掌に灰を転がしながら次の刻み煙草を火皿へと詰め込む。手馴れない人間がやろうものなら火傷を負うのだが、器用なものでそのまま掌の灰から、煙草に火をつけてから捨てる。

紙やフレーバーの味が嫌いな彼女は、純粹に煙草の味だけを楽しめる煙管を愛用していた。

ほつと何気なしに煙を輪状にして吐き出せばその瞬間聞こえるのは、手を叩く音だった。

「あん？」

首をめぐらせて、音の方を見てみれば、年のころは3～4歳だろうか。まだ幼稚園に通っているであるひくらいの子供が、こちらを見て嬉しそうに手を叩いていた。

「もつとーもつとやつて、よいー」

くじくじした目に金髪のふわふわした髪の毛から、おそらく日本人

ではないあるうつ容姿。この町に、外国人が引っ越してきたなど聞いたことがなかつた。

「やるのほこいナビねえ。坊や、どつから来たんだい？」

いくらこの町が鍵をかけなくとも良いくらい治安がいいからといって、こんな幼子を一人でふらふらと遊ばせるのはどうなのか。とい、思いつつ幼子を手招く。

少しは警戒心というものがいるのだろうか、と思つほど幼い足取りで近寄ってきたその子に、再度煙で輪を作つて見せてやる。

「す」い、よい！」

「やうかい。ありがとうね。で、坊やはどこから来たんだい？おばちゃんに教えてくれるかな？」

語尾に「よこ」とつけるのは、この年齢の間で流行つてゐるのだろうか…と思いつつ、実際子供といつのは、奇妙なものを流行らせるのが得意であり好むものであるうと納得して再度尋ねる。

その質問に幼子は困つたよう、「うーん、えーと、などを言いつつ拙い言葉ながら必死に説明をしようとする。

しかし、それもやはり幼子の表現では不明瞭すぎて、説明にならない。だんだん自分でも混乱してきたのか、たちまち涙ぐむその子に、ため息を一つ零して煙管を煙草盆へ置くと抱き上げた。

泣くのを堪えようとしているその背中を、あやす様に叩けば小さい両手で必死になつて抱きついてくる子供。抱き上げてから気が付いたのは、この子供の服装だった。幼いとはいえ、着ているのはTシャツのみで、ズボンはおろか下着もつけていなかつた。

新手の虐待だらうか。はて、これからどうじょうつか。などとのんきに考えていれば、なにやら玄関が騒がしい。おそらく散歩に出かけた妹なのだらうと思っていると、案の定妹であるセイが猫を従えて紙袋を抱えつつこちらへ顔をだした。

「ああ、無事姉さんのところこれたんだ。」

「あん？ この坊やは知り合いで？」

胸にしがみ付いている子供を見て、セイは首を振り否定してから話し出す。

一緒に来ていたメス猫の「若菜さん」（アメリカンショートヘアなのだが、肥満ではないのにどういうわけか巨大に育つてしまい13kgもある）が、サキのすぐ隣へ歩み寄り、子供の頬をざらついた舌で舐め始め、悲鳴を上げていたが無視だ。

「プライベートビーチで倒れてたんですよ。この荷物も一緒に」

そういうて紙袋の中身を見てみると、明らかにサイズが違つ服が入っていた。

「本当にこの坊やの物なのか怪しくないかい？ サイズ違つじゃないか」

話をしていると膝を押される感触。視線を投げかければ、飼い犬のグレートピレーニーズであるジャンが背中に何かを乗せてこちらを見ている。

それを見たサキは、子供を抱えたまま視線をまた妹へと向けた。

「一人じゃなかつたのか…」

「あいにぐー人じやあ、なかつたんですよ。」

ジャンの白い毛皮に埋もれた子供は黒髪で、天然パー・マのかくるくるとしている。サキからは旋毛しか見れないが、いつの間にか寝てしまつた抱き上げてる子供にしても、その体つきは華奢といつよりも肉付きが薄い。

子供というのは、もう少し体がふくふくしているものじゃなかつたか。と思いながらも、人種が変われば肉付きも変わるのもしれないと思い直す。

それにしても骨と皮だけといつてもいいほどの体型に、流石に彼女たちもその柳眉を潜める。

「いくら日本人じゃないとはいっても、子供ってのはもう少し肉が付いてもいいんじゃないかな。」「

どう思う?・と真顔で妹へ尋ねる姉。

「子供は嫌いなんで詳しきはないんですけど。一般論でならこれは痩せ過ぎでしょうね。」

これまた真顔で返答する妹。

「…………。」

無言で見つめあつ、姉妹と飼い猫、飼い犬達。

「新手の虐待かと思ったが…これはちいと訳アリ、つてやつかねえ。」

「私たちと同じで…と口に出さず胸中でつぶやく。どうせよ捨

つてしまつた以上放つて置くわけにもいかず、小さなため息を零して家中へと入るよう愛犬を玄関へ促した。

濡れた手ぬぐいで、ジャンと若菜さんの足を綺麗に拭うと、ジャンは理解しているのか背中に乗せた子供を揺らさないよう段差を歩く。

布団出してそこへ着替えさせた子供を2人寝かせれば、自分の心地よい体勢を探しているのが身じろぎをしながら、何事か不明瞭な言葉を漏らす子供たち。

その間に入り込むように若菜さんが入り込めば、金髪の子供が抱き枕のようにしがみ付く。

子供の力とはいえ、抱き付かれれば普通の猫ならば嫌がるだろうこと、気にした様子もなくされるがままでいる猫にサキは苦笑を漏らした。子供が嫌いだと公言したセイは、拾ってきた洋服を洗濯してしまおうと席をはずしている。

「おんや、随分と氣に入つておいでだね。若菜さん。まあいいや、その子らが眼を覚ましたら教えておくれな」

着物の袖を紐で軽くたすきがけにしてしまつと、土間へと降りていくサキを横目に、若菜さんはうるさくない程度に一声鳴いた。ジャンはといえば、自分が背負つてきた子供の隣で伏せをした状態でおとなしくしている。

そういうしてじるついで、居間に出来のにおいが漂つてくると子供たちにも変化が起つたようだった。

それを察した若菜さんは、器用に子供の腕から抜け出すと土間へと向かい一聲鳴く。それをきっかけに金髪の子供が眼を擦りながら眼を覚ました。

「起きたよつだね。坊やは泣きつかれて寝てたんだよ。判るかい？」

そこへ、小さな土鍋を載せた盆を片手にサキが居間へ入ってきた。
サキの顔を見て一瞬怯えた様な、警戒するよつな表情を出すが、先
ほど自分が抱きついていた人物だとわかると口クリ、ひとつ頷い
た。

一一イカナイの住人達と子供③

土鍋に入った程よい熱さの雑炊を小さな器に入れて子供の前に置いてやる。黒髪の子供はまだ眠っているのか身じろぎひとつしない。

「まだ熱いからね、少しずつお食べ。」

そう言えども、判ったのかレンゲを持つてちびちびと食べ始める。これだけ細いのだから、年齢と合わせて見ても食べれる量は少し。だとすると回数で補うしかないか、と思いつつ田の前の子供を眺める。

「あせんなくつたつて、誰もとつやしなこ。ゆっくりお食べ」

先ほど縁側においてあつた盤に、冷やしてあつた野菜とスイカを引き上げ振り返れば、黒髪の子供と視線がぶつかった。
どうやら寝ていたのではなく、警戒して狸寝入りをしていたようだ。

「お前さんも起きたのか。腹はすいてないかい?」

警戒した表情を前面に出した少年に、さして気にした様子もなくサキは問いかけた。

「もう一人の坊やは」「飯食てるがね。一緒にものでいいかね?」

「…」

それを聞いたとたん、黒髪の子供が勢い良く起き出して、雑炊を食べている子供へ振り返った。

「まるーー。」

金髪の子供の名前だらうそれに、呼ばれたことじびっくりしたのか、レンゲを落として黒髪の子供を凝視する金髪の子供。

「てーちー。」

今まで食べる」とに夢中で気が付かなかつたのか、黒髪の子供の名前らしきものを呼ぶと、また泣き出しそうになつたのか見る間にその双眸が潤みだした。

「だいじょうぶか？ なにもされてないか？！」

じつやらこの2人の子供は知り合つたようで、黒髪の「てーちー」と呼ばれた子供が金髪の「まる」「こばつよ」にしてこちらを見んだ。

その様子にサキはひとつ頷いてから口火を切つた。

「一人はどうやらお互いを知つてるんだね？ ならなんであんな海岸に一人して倒れてたか、覚えてるかい？」

そつ尋ねねれば、黒髪の子供が戸惑つたよつた表情で首をかしげた。

「あんたが、おれらをつかまえたんぢゃないのかよ。」

「私が？ つは！ 「冗談をお言いでないよ。海岸に倒れてたつて私の妹が拾つてきたのさ。」

黒髪の子供の言い分を、鼻であざ笑うかのように言つ返せば、逆に困惑したような表情を浮かべる子供たち。

金髪の子供より大きいのであらうその子は5～6歳といつたといふ

か。しつかりお兄ちやんのよつて背後に隠した子を守りつけている。

「昨日、このような「心構え」をもつた子供はどれだけいるだらう、と胸中に浮かんだ彼女は目の前にいる子供らに久しく家族以外に沸かなかつた愛しさを覚えた。

「そんな言い方をしたつて事あ、帰る場所もないんだらう。だつたらここに気が済むまで居ればいい。なんせここには私と妹、そして家族同様のペット位しかいやしない。」

どうせ、同じ訳有り者同士、仲良くしようじゃないか。そついつた彼女に、今まで隠れていた“まるこ”が出てきて、止める間もなく彼女に抱きついた。

ぎゅうぎゅうと額を押し付けて抱きつゝ幼子を片手で抱き上げてやれば、そのまま首に腕を回し抱きついてくる。その体温が仄かに高いなと思えば、この頃の子供は眠くなると体温が上がるのだったかと思い当たり、先ほど子供を寝かせていた布団へ寝かせようとするとむずがる。

「なんだい、眠いんじゃないのかい？」

腕を一向に離さない子供に、片眉を上げてあきれた口調で問い合わせるも、返事はない。

さすがに困つたと、黒髪の子供に視線をやれば、先ほど見せた警戒はなりを潜め、同じく呆れた様に彼女を見つめ返す。

「あきらめたほうがいいぜ。まるこは、いつかこそつなると、てをはなさないんだ。」

「おやまあ。雑炊も中途半端に食つてたが、やつぱり一度に食べれ

る量が少ないのかい。」「

満腹になり抱きついたまま眠ってしまった幼子を抱えたまま、食べかけの雑炊を片やうとするひと、黒髪の子供がそれを留めた。

「おれがたべる。もつたいないし。」

そうしてそのままレンゲを持つて残りをあつとこいつ間に食べきってしまう。まだ食べたりなさそうな子供にスイカでも切つてやるひつかと思つてこると子供がつぶやいた。

「おれは、”てーーち”。そいつは”あるじ”だ。おばさん、あんたは?」「

土鍋にこびりついた米粒ひとつ残さぬつに食べている子供、ていーちにサキはニンマリと微笑んで言つた。

「私の名前は”サキ”だ。てち坊や」「

「てちじやねえ! ていーち! だ! 」

「ライカナイの住人達と子供」4

「田をさましたんですか。それなら丁度良い。」

奇妙な渾名あだなを付けられて、ご立腹なティーチの真後ろから洗濯をしてきたのである。セイがのつそりと現れた。驚きの余り声にならない悲鳴をあげるティーチを綺麗に無視したセイは、姉へ声を掛けた。

「姉さん、引き取る事にしたんでしょう。子供の衣類はどうします？」
「こんなに細つこいからねえ、私がちょっと古着で身繕つてやるにしてもねえ。」

流石に現代で着物を着ている子供等珍しく、目立つ事の上ない事くらい彼女達にも判る。

「ああ、でも下帯だけは作つてやつた方がいいかね。男児とはいえ、必要だらうしねえ。」

「何を言い出すんですか、今時褲なんて締めませんよ。自分のいた頃じゃあるまじ。もっと着脱楽な下着があるでしょう。お金下さい、自分が買つてきますから。」

下着事情が大分昔から進歩していない姉に、セイは頭が痛くなる思いだつた。

流石に今から300年以上前に生を受けただけはあり、身に付ける物は自分で作ることが常識であるサキ。対して文明開化を過ぎ、モガ・モボ（モダンガール・モダンボーイ）なるものが流行した時代

を経たセイ。セイもかなり現代社会でも時代遅れな観があるので自覚しているが、彼女よりは大分マシである。

それはサキも解っているのか、大人しく財布の入った巾着をセイに手渡した。

「全く、なんでも買って済んじまうなんて……。時代も変わっちまつたもんだ。」

「目立つのを避けるなら、時代の波に上手く乗らないと。お願ひします、外見を裏切るような言動は避けてください。」

胃が痛くなる……と、渋面しつつ巾着を受け取り玄関へと急ぐ。現在の時間は18時、この辺りの店は19時半には閉まってしまうため、急がないと子供達の衣服が禪と女用の衣になってしまふ。流石に元とはいえ、男として可哀想になつたセイは、足早に店へと出掛けた。

蚊帳の外で会話に入れなかつたティーチだつたが、判らないなりに今のは会話に違和感を覚えた。

それはまるで、長い期間を生き続いている老人のような表現。しかし目の前にいる2人はそんな年には見えず、自分で「おばさん」と表現したが「お姉さん」といつてもおかしくない程度の外見。

目の前でマルコを抱えてあやしながら、土鍋を片付ける彼女を見てティーチは首を傾げた。しかし本人に尋ねることはしない。何となくだが、聞いてはいけないことのような気がしたのだ。

「さて、てち坊や。まだお前さん、腹が満たされてないだろう? シカカ何か切つてやろうね。」

やつと寝付いたのか、マルコを先ほどの布団に寝かしつけてから、盥を持ち上げて土間へと消えたサキ。

今まで自分がいた「家」という概念からしても奇妙なその家に興味

が沸いたティー・チは、彼女の後ろを付いて歩いた。

草を編みこんでいる床に、板張りの床。天井は高く、壁は薄い紙がガラスの変わりに貼り付けてある。見れば見るほど奇妙な家。

彼女が消えた方向へ行くと、家中だとうのに土が剥き出しになつていて、丸い暖炉のような、ものが備え付けてあった。

「竈を見るのは初めてかい？」

「かまど？」

「そう。これで火を熾して煮炊きするのさ。まあ、今じゃ珍しいかもしぬないねえ。私や、竈のほうがやり易いが。」

そう言いながらスイカを切り分けると、1切れを土間に降りる為の段差に座り込んだティー・チへ差し出す。

井戸水で程よく冷やされたそれを、もつ疑うこと止めたのか素直に受け取つて種を気にせず噛り付けば、果肉から甘い汁が口の中に広がる。

夢中で食べていると、サキが気が付いたように子供に振り返つて言った。

「食べるのにはいいけど、種は出しな。そんな形だ、胃腸だつて弱つてゐるだらうからね。腹壊すよ。」

小皿に種を出すようにと渡せば、今度はおとなしく種を出しながら食べ始める。

その様子に、子供は好きなだけ食べてたつぱり寝て遊ぶのが一番と、昨夜から砂抜きをしていた浅利の剥き身で味噌汁を作り始める。ふつふつと煮える其処に、粗く刻んだ葱を入れて溶き卵を回せば、深川飯の準備は完了。

本来なら卵は入れないのだが、栄養が足りていない子供がいるために卵を追加したようだつた。

「てち坊や、まだ食べられるかい？」

「くえる」

「腹いっぱいになつたら、風呂に入つて垢を落とさないとねえ。明日からはあんたらにも動いてもらひからね。子供つてえのはよく食べてよく寝てよく動くに限る。」

深めのどんぶりにじ」飯を敷き詰めて上から浅利を汁ごと掛けまわし、レンゲと一緒に渡してやる。

暫く味噌の香りが珍しいのか匂いを嗅いでいたが、一口食べだすと止まらない。あつという間に平らげてしまう。其処に先ほどより少ない量で同じように用意してやればそれもべろり。

ティーチの衰えることのない食欲に、サキは眼を細めて微笑んだ。

「一気に食つたら腹がびっくりしちまつよ、その辺でよしつきな。また腹が減つたら食べりやいいさ。食い物は逃げやしないんだから。」

「

カラカラと笑いながらどんぶりを片付けて、風呂に火を入れるべく風呂用の竈の前に腰を下ろす。この季節は水風呂が多いのだが、子供には良くはないだろうし、熱くしなくてもぬるま湯でなければ垢は落ちまい。

薪を中に入れて、竈から持つてきた火種を放り込めば火が爆ぜる音が聞こえる。

本当はまだ食べられるような気がしていたティーチも、それを眺めているうちに腹が満たされたせいか眠気が襲ってくる。

うとうとと幼い頭が船をこぎ始めた頃、またしてもティーチの後ろから白い何かが現れて、その首根っこを捕まえ引っ張ってきた。

「わあ？！」

「てーちーー！」

「おや、ジャン…と坊や。坊やは起きちゃったみたいだねえ？」

驚いたティーチが振り返れば其処には、先ほどの大きい犬。ふさふさとした尻尾がうれしげに揺れていて、その背中にはマルゴが乗っていた。

その顔はジャンの背中に乗つているせいか、とても楽しげで。足元には若菜さんも一緒にこちらを眺めていた。

一一ライカナイの住人達と子供5

ティーチもジャンにいつの間にか懐いてしまったのか、くわえられた襟首を正す。そしてジャンの首元に抱き付く、少々硬いながらも白く柔らかな毛並に顔を埋める。
超大型犬に分類される犬種故か、子供を一人ぶら下げたままで、その体躯が揺らぐ事はない。

そうして湯を沸かしながらじやれ合つ子供達を眺めていれば、そのままに向ひの側からセイが帰宅したのが見えた。

「お帰り。いい塩梅に買えたかい？」

「ええ。丁度入れ替え時だつたらしく、良い買い物が出来ましたよ。」

丁度湯も沸いた事だしと、子供達を風呂に入れようとした所でちょっとした騒動が起きた。

「いやだ！おばさんと、はいりたくねえつ！」

「おばさんとは何だ。この餓鬼。」

サキが纏めて子供達を風呂に入れようとするのを、ティーチが拒んだまでは良かつた。しかしサキに対する呼称がセイの爛に障つたようだつた。

それを聞いたセイがティーチに拳骨をお見舞いした拳句、自分が入ると引き摺つて行つたのだ。勿論マルコはサキにベッタリなので異論などない。

「いいか。姉さんをそんな風に呼ぶんじゃない。ちゃんと梅吉姐さんとよべ。」

「つめきちねえさん？」

「そうだ。例え血の繋がりが無くとも、自分の保護者たる相手へは、必ず敬意を持つて接しろ。暴言を吐くな。子供だろうと年寄りであろうと驕ることなく、礼節を持つて接しろ。それが此処で暮らす上での規律だ。」

「けーい……」

「守れないなら、自分がこいつやつて拳骨を落とすから、その心算でいる。自分は常識や礼儀のなっていない子供が何より嫌いだ。」

元々セイは刀鍛治など継ぐ心算もなく、近くの道場で寝泊まりをしていた。上下関係や礼節に重きを置く道場であつた為か、セイは殊更そういう事に厳しかった。現在では肉体の性別を違えてしまつたとはいえ、鍛練は変わらず続けていたし、鍛え上げられた体躯は現代でも珍しく180センチ近くもある。相貌も端正といえば聞こえは良いが、鋭い目付きのせいできれいでも霞んでしまう。

その為女性には見えないし、本来の性別である男性と認識される事が常であった。

勿論本人はどうちらであつても、「本質」は変わらないとして意に介さない。こんな言い方をされて、ティーチはすっかり「セイは男である」と認識してしまつたのが、それも風呂場で覆された。

「……………ひやん…え?」

「……………氣にするな。」

有るはずのものが無いと認識するなり、ティーチは驚いてしまつたのだが、セイは「氣にするな」の一言で終わらせた。

今まで理不尽な環境で生きてきたティーチも、なんとなく「これもきいちやいけないことなんだ」と無理矢理納得してしまつた。余談だが、セイの存在が、ティーチの中で女性というものは怖い生き物であるという、ある種のトラウマを植え付けていた。その為かその

その後の彼の言動からも女性を曝すような物はでなくなつた。

その後、サキがマルコを抱えて入浴したのだが、その時にマルコが言い放った問題発言に、遠い未来に彼女等が呆れながら爆笑することになる。

さて、ぬるま湯を使いながら丁寧に洗いこまれ、すっかり垢を落とした子供達は、縁側で水分補給にとスイカを食べていた。種をどちらが遠くまで飛ばせるか等と、遊んでいる辺り微笑まいに限りだ。

その横で、子供達を寝かせる為に蚊帳の準備をするサキ。初めて見る蚊帳に遊んでいた子供達も、興味深げに眺めていた。

「ねーちゃん！ こえなに？」

「あみなんかぶらさげて、なにするんだ？」

「姐さん」と、まだちゃんと発音できないマルコは「ねーちゃん」と呼ぶことにならしく、垂れ下がる蚊帳を触つては握つたり引つ張つてみたりしていた。

「これかい？ 坊や達が寝ている間に、虫が悪さしないようにしてんのさ。この中で寝てれば、悪さする虫は入ってこれやしないからねえ。」

現代社会において蚊帳を使う家など珍しい事この上ないのだが、古き良き時代のまま暮らす彼女達しか知らない彼等にわかる筈もない。

子供用甚平を着せられた一人を布団へ寝かせると、ペット達もその足元で丸くなり、寝る体勢に入る。

明かりを消せば、開け放たれた障子戸から入ってくる月明かりが寝室を柔らかく照らした。

隣で子守歌を聞きながら眠ってしまったマル口の体温は温かくて、時折部屋にそよぐ夜風は、寒くなくて丁度良い。

初めてが沢山あつた1日。見たこと無い場所で、怖いけど……

ぶら下げられた綱は「かや」って叫んで、マル口や自分を悪い虫から守ってくれる。

足元には大きな犬や猫も一緒にから、悪いやつが来てもきっと大丈夫。

あんなに大きいから、ジャンが頭からぱくつて食べちゃうんだ。

お腹につぱこになるまで、飯も食べられて、甘いスイカも貰えた。

マル口がぎゅうぎゅうに抱き付いて甘えて、呆れてたけど笑つて許してくれた。

温かいお湯で身体も洗つて貰つて気持ち良いし、パジャマも見たこと無いものだけど新しい物。

初めて布団を見たけど、ふかふかで日向の匂いがする。

拳骨は怖いけど、ちやんと怒る理由を言つてくれる兄ちやんみたいな姉ちゃんができた。

あの拳骨はすつじく痛いから、せつと自分達を拐おつとした奴らなんか一捻りだ。

ご飯を食べさせてくれて、子供はたくさん食べて遊んで寝るのがいいんだと、本当に女なのかとおもうくらいおどけたりなおばさん

あ……おばさんってこうと……ここあやみが……おひる、から……ひや

今旦起こつた事、思つた事を反芻しながら、ティーチは襲つてくる睡魔に抗えず、いつの間にか寝息を立てていた。

それでも、互いの手をしつかり握つて眠る子供達の姿に、サキは静かに微笑んでいた。

心地好い微睡みから意識を起こせば、うつすらと辺りは夜明け色に染まりつつあった。サキがまず感じたのは、腕と胸の辺りの違和感だった。

はて、いつから自分は布団を抱いて寝たものかと、瞳を開いて確認をしてみたならば、まず視界に入つたのは腹を出して気持ち良さそうに寝てる黒髪の子供ティーチ。

そういうえば昨日から住人が増えたのだったと思い当たり、視線をもつと下へずらせばいつの間にそうしたのか。サキの腕を枕にして、胸元にすがり付くように眠る金髪の子供マルコがいた。

サキの気配がわかつたのか、目を覚ました若菜さんがティーチの姿を確認すると、呆れたように欠伸をしてからのそりと歩み寄り上掛けを引つ張りはじめる。そして出しつぱなしの腹を隠すと、また先程のように丸くなつて一度寝を始める。

なんとも人間くさい行動ではあるが、ある意味らしいといえばらしい為なんとも微笑ましく見える。

「はて……どうしたもんか。」

己の胸にすがりつく幼子は、寝汗で髪が額にべたりとくつついて、寝苦しいだらうに顔は胸に埋めたまま。年齢から言って母親に甘えたい盛りなのだらうその様子に、眼を細めながら前髪を撫で付けてやる。

しかしそうする間は起きる時刻。体をすらして身代わりに布団を置いてやると、すよすよと気持ちよさそうに寝ている寝顔が見える。

蚊が入らぬよう素早く蚊帳から出ると、鏡台の前で寝乱れた髪を整

え、身支度を済ませれば土間へと行つて朝餉の準備を始める。

セイは別の部屋で眠っているのだが、土間で作業を始める頃には既に寝床を離れ、朝稽古を始めている。

卵の焼ける匂いが味噌汁の匂いに辺りに漂う頃には、口もたしゃぶり眠っていたジャンもあぐいをしながら行動を開始し始める。

一
ん
む
う

起き上がつたジャンが、眠つている子供達の顔を舐め始めれば、すぐつたさと揺れでさすがに眼が覚め始める。

が覚めたのはティーチだつた。

「いねこ... なんだよう...」

「じーじー」と畠田を擦りながら、あくび交じりに起き上がる。田の前に白い毛むくじゅうの顔。あまりの驚きに眼が覚めてしまい良くなれてみればジャンで。

「あー…おまえ、やのうの…そりか。それいらじんちすむんだ」

ジャンの吼え声に田が覚めたのかマルコもモゾモゾと起き出した。その両手には布団を抱えたままで、まだ寝ぼけているらしく頭がふらりふらっとおぼつかない。

らりふらりとおぼつかない。

しかし自分が抱きついているのが布団だと気が付くと、今にも泣き出しそうな顔できょろきょろと辺りを見回し始める。それを見たテイーチは、頭をぽりぽりと搔きながらマルロに話し掛けた。

「まぬけー。いつのせちねーさんちがしてんのか？」

「こっしゃねてたのに、こない…」

すると布団を放してティーチに抱きついてくるマルコ、ティーチは頭を撫でてやりながら言い聞かせるように話し出す。

「まるい、つめきちねーさんまきつと、あれはんつくつてんだよ。な?ほら、こっしゃにづめきちねーさんとこごくぞ。わつとおこしいじはんたくわべれるから。な?」

「ひー… ゅ」

抱きついたまま離れないマルコを宥めすかしてなんとか蚊帳から出ると、マルコを抱えたまま居間へと向かつ。すると、鼻腔をくすぐるイイ匂いに一人のお腹から同時に音が聞こえた。

「へーち、なかしゅいた」

「やうだな、おなかすいたから、じはんもむらこにこいつな

「つゅ」

ぎゅうぎゅうつと、相変わらず抱きついてくる弟分をしつかり抱えなおして居間へとたどり着けば、いつの間に先回りをしていたのか若菜さんが座布団の上に丸くなっていた。

「おや、起きたんだね。おはよう坊や達

「おはよ… つめきちねーさん」

「あよー」

居間の卓袱台に朝はんを並べ終わり、やれ、子供達を起こしに行こうかと思えば、自分達で起き出したらしい。挨拶をすれば、マルコがティーチから離れてサキへと覚束ない足取りで歩み寄る。

それを見たサキが首を傾げて云ふと、昨日と同じように顔を押し付けるようにして抱きついてくる。

「なんだい、坊や。まったく甘えん坊だねえ。」

好意を前面にだして抱きついてくる子供に、嫌な思いを抱くはずも無く笑いながら抱き留めれば、とたんにマルコは顔を上げてサキの顔をじいつと見る。

「ねーちや、やーみー。」

「え？」

「はなれちや、やー、よー。」

いつの間に其処まで懐かれたのか、離れようともしない幼子に驚いた彼女へ、ティーチが説明をする。

「あー、せつあおきたときいなかつたから、まゆのやつ、すねてんだ」「おやまあ。」

朝、じはん作つてたからねえ。と笑いながらマルコを抱き上げてその頭を撫でてやれば、唇をへの字にまげてその肩口に抱きついて顔を隠してしまう。そのいかにも拗ねている表情と仕草に、ティーチとサキが噴出したのはしかたあるまい。

「ライカナイの住人達と子供」

拗ねていたマルコもサキの膝の上でご飯を食べていたおかげか、機嫌も良くなりティーチと一緒に縁側に座つてオヤツを食べていた。やはり痩せ細つていた二人は一度にたくさんのが食べられない為、小分けにして食べさせるようにしたのだ。

昨日のおやつはスイカだったが、いま一人が食べているのは茹でた玉蜀黍だった。いわゆるハーネコーンと呼ばれるものでとても甘い。これには二人も喜んだ。

1本を一気に吃べるのは無理だとしても、簡単に割ることが出来るので、量を調整できるという利点もある。

「おいしかったー！」
「かつたー！」

オヤツを食べ終わった2人は、手をつないで、土間へと行く。

「食べ終わった食器は、運べるものは運ぶ事」

これは朝食時にセイから言われたことであった。子供が嫌いだと公言してはいるが、泣き喫きもせずつづいてくる子供達には閉口したらしい。

ティーチはからかうと打てば響く鐘のようにすぐさま反応を返すが、普段から騒ぐわけでもなくジャンとじゅれあうが、食べるかのどちらか。

対してマルコは少々泣き虫な点はあるものの、サキがいれば機嫌はいいし傍を離れよつともしない。離れていたとしてもティーチが傍にいて面倒を見ている。

つまり対して手がかからない為に容認したというわけだ。

「なあ、うめきちねーさん。このせり、じこでいいのか？」

「ああ、そこに置いておくれ。これから煙に行くからね。靴を履いて裏へ回つておいで。」

「わかつたーー！くわ、ある！」

「よいー。」

皿を台の上に置くと、ティーチはマルコの手を引いて玄関へと向かった。煙に行くといわれてテンションが上がってしまったのだろう、廊下を大きな音を立てて走っていた。すると…

「ひー、廊下を走るな。」

「あ、ここにいるやん。」

「……ひゅ」

廊下を走っているとセイに咎められて、慌てて走るのを止めればティーチの背中にぶつかって転がるマルコ。それを片手で救い上げるようにセイが抱えれば、マルコの目がくじくじくと広がった。

「よいー？」

首を傾げながらこつもと違う皿線。床が遠くなり天井が近くなる。そこでマルコは自分が抱えられているという事がわかつたらしく。

「ひーちや、はたけいく、よい？」

「自分は行かないぞ。いいか、廊下を走つたら転ぶだらつ。転んで

泣くのはチビ、お前だぞ。」

「ひゅ？！」

指先で額を突かれて床に降りてしまひ、マルコはセイを見上げた。

「「一ちゃん、」」ちやーい

「「めんなさい、な。」

「「めなしゃー」

額を片手で撫でながら謝るマル口に、セイは楽しげにティーチに視線を投げる。その視線にびくじと肩を震わせるティーチはまるで小動物のようだった。

「な…なんだよ。」」一ちゃん

「チビはちゃんと謝れたのに、兄であるお前は謝罪も出来ないのか。情けないな。大体、兄は弟を守つてやらねばならないのに、お前がチビを転ばせてどうする。」

「…～～～～～～～」」めんなさいー。」

もつと早く言えと髪をかき混ぜられれば、元々天然パーマでクルクルとしているティーチの髪の毛が鳥の巣のように乱れた。
必死に止めさせようとすると大人と子供では体格差があり、されるがまま。

「あんた達、何遊んでんだいー！お天道様が真上に来ちまつよ。せひさと準備しな！セイ！あんたもからかつて遊んでんじゃなによー！」
「すいません。面白くてつい…」

あまりに遅い子供達に涙れを切らしてサキが覗き込めば、廊下でじやれあつている妹と子供達。怒鳴れば慌てて玄関へ急ぐ子供達と人々とした妹にため息を零した。

子供達が裏へ回つてみると、其処は100坪ほどの菜園があった。季節が夏であるためか、トマトやきゅうり、玉蜀黍などが良く育っている。歓声を上げる子供達へサキは小さな籠を渡しながら言った。

「熟れてる野菜で気に入つたものがあれば食べていいよ。その代わりゴーヤを探つてきておくれ。緑色で大きこじりこじりとした瓜みたいなのがそつや。いいね？」

「わかつたー！みどりこじら、でゴシゴシしたやつだなー。」

返事をするや否や籠を片手にマル口の手を引いて、菜園の中へ消えてゆく子供達。それを可笑しそうに笑しながら、サキは水遣りをするべく隣接の井戸へと歩いていった。

所変わつて、ティーチは緑色でゴシゴシした野菜を探していた。瓜と言つていたから、蔓を伸ばす野菜なのだろうと思しながら。

「へーち、じーやつてなにー？」

「じりねえ。みどりいろで、おおきくて、じつじつしてんだつてよ。まるこ、おまえもみつけたら、じりせりよー。」

「よこー。」

「ライカナイの住人達と子供」8

セイが洋服と一緒に買つてきていた小さな麦わら帽子を被つた一人は、ジヤングルのように生い茂る菜園の中を歩いていた。見たことの無い野菜も多く、まるで冒険をしているかのようを感じられる光景に一人はワクワクするのを抑えきれないまま先を進んだ。

日の光を浴びてキラキラと輝く野菜は、ティーチやマルコには宝石のように綺麗なものに思えた。

しかも一人に気に入つたものがあれば、好きに食べて良いとまで言つていたのだ。この家に来てからまだ1日位だが、一人は既に今までの生活ならば一週間分位の食べ物を食べさせてもらつていた。まるで夢を見ているような幸福、もしかしたら今自分達は夢を見るのかも知れない。そう、夢現なふわふわした思考の中、ティーチはそんなことを思った。

実際夢であつたならセイの拳骨が痛いなどとわかるはずも無いのだが、そこは子供特有の「喉元過ぎればなんとやら」だ。怒られたことなどとつゝの昔に記憶の彼方へ投げやられてしまつていて。

不思議な場所にある不思議な家に住む、不思議でとつても優しいヒト。もしかしたら人間じゃないのかも知れない。前に聞いたことがある、妖精とか天使っていうものなのかも…

本人達が聞いたなら噴出して腹を抱えて、死にそうな程に笑い転げそうなものだが、ティーチとマルコは結構本気で信じていたりする。とくにマルコはサキにすっかり心を許してしまつていて、昨夜など「ねーちゃのおよめしょんになつてしまーわせーになゆのー」発言をしだした。なぜマルコが「およめしょん」になりたいのかは不明

である。

今起きてる事が本当のことだと信じられなくて、ティーチは自分の頬を思いきりつねつてみた。涙が出る程痛くて、思い切りやるんじやなかつたと本気で後悔したけれども、痛いだけじゃない涙もでた。泣いているティーチを心配して、マルコが必死に小さい手を伸ばして頬を撫でてくれる。

「なあ、まるこ。ゆめじゅ、ないんだなあ」

「てーち、こちゅー? いぢゅー? ねーちゅ、よぶ?」

「だいじゅうぶだ。いたいんじゅなくて、うれしいだけだつて」

嬉しい事があつても泣くんだぞ。と笑いながらマルコの頭を撫でて、溢れた涙を力任せに拭くと籠を持ち直して野菜探索へ意識を切り替えれば、マルコもそれ以上は何も言わずに黙つてついてくる。誤魔化すように途中真っ赤に実ったトマトをもいで、一人でかじれば酸っぱいはずのトマトが甘くて、ほんの少しだけし�ょっぱかった。

小さいマルコにはまだトマトの皮は固いけれども、ティーチが少しだけ剥いてやれば食べる事ができた。あっちでは野菜は美味しいなんかつたから食べてなかつたけど、姉さんの手にかかるばそんな事も気にならない。いくらでも食べられてしまう。だけどもうすぐ太陽が真上に来てしまつから、お昼ご飯になる。

美味しいご飯を食べ損ねたくはないから、ゴーヤを見つけられなかつたけれど、一度戻る事にした。

「てーち、こー や、ないねー」

「そうだなー。どこにあるんだろうなー。」

本当はティーチにも判っていた。たぶんあの人はゴーヤをちゃんと

持つてこれるとは思つていはないはずだ。ただ、退屈しないよつこ、ちよつとでも色々食べられるよつこと連れてきてくれている。

それでも宝探しのよつなゴーヤ探しを止めよつとは思わなかつた。

「じょんたべたら、またじょーやはすつて、いっしょにおねがいしよつな！」

「よーこー！」

二人で顔を見合させて楽しそうに約束をすると、空の籠を持つて大好きな人のところへ駆けていった。

「お皿にするよ。手を洗つておいで」

「きょうの、おひるはなに？」

「その様子だとゴーヤは見つけられなかつたようだね。また探すのかい？」

「さがすー！」

「まゆこもーー！」

井戸で手を洗つて縁側へ行けば、其処には冷汁と野菜の揚げ物が出してあつた。

魚と胡麻をたつぷりと入れた冷たい味噌汁をじょ飯に掛けて食べるもので、揚げ物は下味をつけてチーズを塗して揚げた物だった。

栄養を偏らせらず、かつカロリーを多くとらせる工夫をしている辺り、面倒を嫌う彼女がいかに子供を可愛がつてゐるかが伺える。

人参やパプリカ、牛蒡なども子供達は嫌がる事無く口へと詰め込む。もつとも小さいマルコは上手く食べられない為、サキに食べさせてもらつてご満悦だが、少しだけティーチは弟分の将来が心配になつた。

「なあ、ねーやん、いじってす」「こんだな。とまともみんなきれいなんだ。やわこはおこしれないからきらいだけど、いじのせおこしにかかりすぎだ」

「んぐ、むぐ」

「おや、嬉しいことを言つてくれるじゃないか。お、好き嫌いなんが、たせないが。好き嫌いしてるといつまでたつてもチビなままだからねえ。」

「すぐでかくなつてやるんだー」「一ちゃんにまけないくらー」

「おやおや、てち坊やが背を追い越すのは、一体何年かかることか

「まもーまもー」「まもーー」

「まもーーまもーー」

「ああ、やうだねえ、坊やも好き嫌いしないものねえ」

負けじと皿「主張するかの頭を偉い偉いと撫でられれば、とたんに『機嫌になるマル』。何となく面白くないティーチは、ふと脇にいる籠に入っている物に目が止まった。

「あれ? みどりいろでいじつ?... ねーやん、これが? いや?」

「ああ、そうだよ。午後からほれを頼りに探しておくれ。4本程頼むよ。」

「うふ、わかつた!」

確かに見たことの無い野菜で、ちょっと青臭くてゴツゴツとしていてはじめてみたら驚くかもしれない。がんばって力を入れれば、真ん中からパキリと折れる。

中には白い種がふわふわの綿のようなものに包まれていた。

「これが? いやかあ。はじめてみた

「? いや?..」

一人で手にした「ゴーヤ」をあちこち眺めたり匂いを嗅いでみたり。そしてサキが麦茶をグラスに注ごうと眼を離した隙にそれは起こった。振り返ったときには遅かった。

同時に、子供らが「ゴーヤに噛り付いたのだ。瞬間口を開けたまま悲鳴を上げるティーチ。マルコにいたつては大泣きし始めた。

「あんたら何やってんだい？！」

慌てて一人を井戸まで連れて行き、口の中のものを吐き出させて何度も口を洗わせる。それでも「ゴーヤ」特有のエグミと苦味が消えることは無い。

もはや苦味というよりも痺れにも似た衝撃だった。

「まふー…」

「つづつづづ…」

「ばかだねえ…」

呆れたように一人を連れて居間へ連れて行き、今日のオヤツにしようと思っていた大学芋をとりだした。

「ほら、甘いもん食べて口直ししな。」

泣きじゃくってしがみ付くマルコへ大学芋の蜜を舐めさせてやれば、スンスンと鼻を鳴らしつつ大人しくなる。ティーチは芋をとると口の中に甘みが行き渡るように、たっぷり蜜を絡ませてから口の中へと入れる。

暫く無言で大学芋を頬張る2人に、サキは声を掛けた。

「これからは生で食べられるもんか、ちゃんと確認してからにしな。『ゴーヤってのは別名苦瓜って言って、とてつもなく苦いんだよ？』

「うう

「わかつたよ。よーくわかつたよ、ねーさん」

苦瓜は生で食べるものじゃない。それが幼い一人の記憶の中で鮮明に記憶された瞬間だった。

因みに余談ではあるが、そう遠くない未来に悪魔の実を食べるマルコがそのときにこう語つた。

「確かに美味しいもんじゃないがねい、生で食つ」「ヤーマヤリマシだい。

」

一一ライカナイの住人達と子供⑨

いくつかの季節を過ぎし、沢山たべて、沢山遊んで時折怒られて。海の落とし物として拾われた子供達は次第に子供本来の肉付きを取り戻しつつ、太陽の下で元気に駆け回って遊んだり、ジャン相手に相撲をしたり、時折セイの雷から逃げ回ったり、鍛練に便乗してみたりと、着実に健康体へ近づいていた。

そんなある日の事、二人がいつものように煙でオヤツを選んでいると、いつの間にか客が来ていたらしく、何人かの男達が引き上げるのが見えた。

身形はよいのだが、どうにもティーチとマルコには嫌なものに見えて仕方ない。

「なんか……いやなかんじがする。まるこ、ねえさんといくぞ。」

裏の勝手口から家の中に入ると近所の住人も来歩いて、その年齢層はばらばら三十人ほどで皆同様に厳しい顔付きをしていた。

「まさか、こんなに卑まるとは思わなかつたけれども。案の定……と言つたところかね。」

「これだから人間つてやつあ……」

サキが些か苦々しい表情をしながら、食卓の上にある紙を見つめている。

この辺りの土地を所有していた地主が亡くなり、その息子が跡をついだが余り出来がよろしくないらしく、多額の借金を抱えてしまった。

あまり表立つて営業出来ない金融業から借りていたのか、首が回ら

なくなつたなら土地を寄越せとなつたらしい。

現在住んでいる土地は、借家ではなくサキ名義のものであるのだが、この辺りの土地を全て買い上げて何やらリゾートホテル等を建設したいらしく以前から立ち退きを請われていた。

何かを建設する際に、サキの土地を避けるには場所が悪すぎ、大き過ぎた。今この場に来ている住人達は、サキ達の大体の事情も知つていて、サキを頼つて引っ越し越してきて敷地内に住居を構える同じ訳有り の住人達だ。

よくマルコやティーチの面倒も見てくれて、一人もよく懐いていたが、どういったつながりなのかは聞けず仕舞いだった。

「梅吉師匠……」

サキと同じように着物を身にまとつた年若い女達が、心配そうな苦しそうな表情でサキを見つめる。その隣にいる白髪頭の女性…ティーチがたぬきばーさんと呼んでいる老婆が、お茶を飲みながらつぶやく。

「あたしらは、まあ…いわばあなたの棲家に勝手に転がり込んだようなものだからね。出て行けといわれたら出て行くぞ。」

だが、今回は違うだろ?…と。

縁側に座っていた坊主頭の初老の男性が、鋭い眼で男達が去つた方向を眺めている。

「なあ、梅吉さん。私等はいつでも準備は出来ているよ。こいつこ非はない。が…そもそも言えぬ己等の事情が口惜しいよ…」

「師匠の考えに、アタシ達は付いていきます。異論なんてあるわけないですよ。」

みな同じように日々に賛同を述べる。その様子に勝手口から眺めていた二人は、居間へ入る勇気も沸かずその場に座り込んでしまった。

「それに、あの子供達もそろそろ頃合だ……ちゃんと話をしてもやらないといけないだろ？ 人間は直ぐに成長しちまうから…」

「そうですねえ。怖がらないといいのだけど…」

心配そうに女達が勝手口の方向を眺めれば、場の空氣を変えるためか尻馬に乗るようにサキがキセルを咥えながら、からかい口調で言い出す。

「まあそつさね。そこの縁側の似非坊主の本性なんざ、厳つくって仕方ない。あんなんじやあの子等に泣かれっちまうよ。」

「梅吉さん？！ ちょっと酷いんじやかないかい？！ いくら私でも泣くよ？」

「よしなよ、みつともない。大の大人がビービーと泣いてちや、むさぐるしくて仕様が無いよ。」

他のものもわかつているのか、とたんに楽しげに笑い出した。

「丁度いいから、説明をしないとね… ま、それで出て行くつてなら、寂しいが仕方も無いだろうよ。」

懐に入れてある小さな膨らみに手を当てて、少しだけ寂しげに微笑む彼女をマルコには幼いながらも…

普段の威勢のよさとは異なり、道で揺らめく陽炎のよすに儂げに見えた。

大人们の話に入つていけるはずも無く、勝手口の所で蹲つている子供達に縁側にいた男が手招く。それを見て恐る恐る近寄っていく

子供達に、大人たちは困ったような笑みを浮かべた。

「さあて…まー坊、てち坊。」

「なに?…うめききちねえさん」

いつものように優しい声音で、最初の頃は気に入らなかつた渾名でも呼ばれれば嬉しくなる。初めてこの家に来た時は大人は怖くて、自分達を傷つけるものだと思い込んでいたけれどここはそうではなくて。

微温湯の様に暖かく包み込んでくれる、溶けた飴のように甘く蕩けるような天国のような場所。それがこの家だった。

例え彼女達が悪党であつても、ティーチたちはここを出でていこうだなんて思いもしないし、追い出されてもここにいたいと思つている。何を言われるのだろう…と不安げに揺れる子供達の眼差しに、サキとセイは田を呑わせ苦笑をもらした。

「坊や達、私たちがお前達を追いで出すとでも思つてるのかい?冗談じやないよ、ここを出たつて行くところなど無いだろ?安心おし、追い出したりはしないから。」

そう言われば安心したかのように、マルコがサキの元へと駆け寄り抱っこを強請る。それにいつものように抱え込んでやれば、着物を握つてニコニコと微笑む幼子。それを見て微笑まないものはこの場にはいなくて。

「以前に、同じく訳有りって言つたのは覚えているかい?」

「うん。」

「その理由を説明しようと思つてね…。聞いてくれるかい?」

「うん。」

ことの始まりは凡そ300年以前、世が平成ではなく江戸時代と総称されていた時代。芸者の娘として生を受けた砂生は、幼い頃から母親に芸事を仕込まれていた。

舞や歌、楽器はもちろんの事、洗練された会話や立ち振る舞い。芸者という「芸」に秀でた「者」として恥をかかぬように。目鼻立ちは決して麗しくは無くともそれを補う能力があれば生きてゆける。母親を囮つていたのはどこぞのお武家様で、お内儀がいないということですよく母親の元へ通つっていた。

本当に変わった御仁で、女であれば武芸が出来てこそ誠の芸者であるといふ、意味のわからないことを言つては、砂生へ弓や薙刀、果ては馬術まで教え込んだ。

元より巴御前に憧れていた節があつたため、彼女のような女傑に育てたかったのだろう。生まれ持つての才能ゆえか両親の期待通りに育つたのち彼女を置いて流行病であっけなく逝つてしまつた。

その後母の権兵衛名を受け継ぎ芸者として生計を立て、巷で人気芸者として売れ始めたのが災いしたか。

ある大店の店主の娘に似ているということで、洪水を防ぐ堤防の人柱へ身代わりとされることとなつた。その裏に何があつたのかなど彼女が知るわけも無い。

彼女を厭うものも少なからず存在していたし、その大店の主人の巣廻している芸者が彼女を厭うていたのは誰もが知るところであった。

堤防の工事をする場所の近くには毎日お参りをしている稻荷の社があり、其処も壊されると聞いて最後の願いとばかりに人柱になる日、あの日に参拝をしたのだ。

それは今でもよく覚えている、雨の降る肌寒い春の日の事、それは砂生が24になつたばかりの日。芸者であることを最後まで己の誇りと、黒の着物にお太鼓で、母の形見の簪を黒髪に、仕事道具の三味線を抱えて…。

己の後ろで急かすろくでなし共に腕をとられた時だった。

雨の中走る閃光

地響きとともに田の前に迫る濁流

掴まれた手が解けたと思えば、刺すよつた冷たさが己を包んで…

そう、一瞬だつたのだ。

確かに冷たい濁流に包まれたはずなのに、気が付けば蒼白い炎に取り囲まれていて優しく額を撫でる指に、昔に亡くした母親の面影を見た。

そのまま視線を移せば蒼白い毛並みの狐と己の胸が炎によつて繋がっていた。その狐は己で、己はある狐なのだと、まるで当然のよう納得してしまった。

気が付けば己を身代わりにしようとした大店の屋敷で、その主人が堤防の決壊で亡くなつたことを聞いた。

その辺りの記憶はあやふやで、気が付けば小田原で小さな商いをしていた。畳を捲れば小判の入つた壺が隠されていたから恐らく強請

つたか何かであの大店からせしめたのだらう。

罪悪感など沸くはずも無く、気が付けば10年が経過していた。そうすれば嫌でも気が付くのだ。

己が年を重ねずそのままであるところのこと

己が、もう人ではないものなのだとこうこと。

それから何十年、気が付けばもう300年も経過していく…同じような境遇の者達で肩を寄せ合つて生きてきた。

初老の男性とたぬきばーさんは本物の狸の変化で、環境の変化に付いて行けずここへと移り住んだ。

梅吉師匠と慕つてくれる女達も、元は古道具の付喪神でこの田まぐるしく変わつてゆく時代の流れについてゆけない。

この家に集うのは、誰しもが人間として馴染むことの出来ない者く化け物ばかりだ…。

そう語つた砂生の双眸は仄暗く、何処までも真つ直ぐ子供達を射抜いていた。

「ねえ、ま一坊、てち坊や…それでもお前さん達は、私達を優しい人間くヒトくだと思うかい…?」

人間ではない。やつ言われてもティーチにほこまひとつひんといなかつた。

元からヒトではないのかも知れないと想っていたのだ。もちろんそれは子供の想像でしかなく、妖精や天使じゃないかななどと想つ程度ではあつたけど。

最初の日の会話ですら、普通ではない会話だったといつのこと、それで気が付くなとこつほつが無理な話だった。

「ねえ、ねえわん。おれたちしつてたぜ?」

「あん?」

「ねえさんたちが、ふつーのヒトじやなことくらー、しつてたよ。そこしょから」

その言葉はサキやセイ、周りのものもあつたことうな表情をさせた。

「てち坊や……?」

「だつて、おれやまるこをきずつけのはいつだつて、おとのヒトだ。だけど、おれたちをきずつけないんだもん、ひとじやなくつたつて……」

そこまで言つと、ティーチは両目に涙を溢れさせてサキに抱きついた。思わず抱きとめれば必死に嗚咽をこらえようとするも、一度堰を切つたものを抑えるなど出来るはずも無く。その泣きじやぐるティーチを見て、マルコは必死に頭を撫でてやつていた。

「ヒーち、ヒーち……」

今こる世界がこままで自分たちのいたところから違つてくらー、こ

くら幼いとはいっても、ティーチだつてとつこの昔に気が付いていた。拾われたあの日…住んでいた島が海賊に襲われて島の女や子供はみんな連れ去られて、マルコやティーチも商品として船倉に閉じ込められていた。

船という閉鎖された厳しい環境で、ろくに食事も与えられない船倉に閉じ込められた島民が耐えきれるはずもなく…一人、また一人と動かなくなつてゆく光景は、まさに地獄だった。

それでも、明らかに逃げられない大人たちが子供に食事を分けていてくれたおかげで一人はなんとか生き長らえ、ひどい時代で船が座礁した際にマルコとティーチは損傷した船底の隙間から逃げ出したのだ。

もちろんすぐに一人は海に飲み込まれてしまつたけど、必死にお互いで互いを抱きしめていたおかげでの海岸へ流れ着いた。

「おれや、まるこじ」とつてねーさんたちが、いちばんなんだ。ほかのにんげんなんかしらない！やさしくて、おれらをたすけてくれたのは、ねえさんたちじゃないか！」

「てち坊…」

咽び泣きながら、必死に訴えるティーチの言葉に、付喪神の女衆も袖で目元を拭いながら肩を寄せ合つていた。

人間の姿形をとつていても己らでは、この子供をきちんと育てられぬのではと不安に思わなかつた事がなかつたわけもない。

人間の大人、特に男性に恐怖を感じているのがわかつていていた為、仲間内でも男衆はなるべく子供に近づかないように心掛けてもいたのだ。

それでも、この海からやつてきた幼子を、自分たちなりに大切にし

てきたのだ。その珠玉の宝が己らを厭うのではなく、大切だと黙ってくれた。それだけでどれだけ救われたことか、この幼子たちは理解していないに違いない。

そのままではサキの体勢が辛からうと、化け狸の夫婦がティーチを受け取つて抱きしめてやれば、ティーチはその膝に抱きついたまま泣き疲れてしまつたのかいつしか眠つてしまつていた。

マルコはサキにしがみ付いたまま、泣きもせず大人しくしている。しかしその目は今にも泣きそうで、その様子に気が付いて背中を撫であやしてやれば、サキの首筋に抱きついて、静かに涙をこぼした。

「思つたより、あの子らは周りをよく見ていたんだねえ…。私なんざ何百年生きてたって、判らないこともあるつてのに…」

古狸の夫婦に子供たちを預けて、いまこの場にいるのは妖怪だけ。人間なのか妖狐なのかいまだ曖昧なサキを除けば、だが。子供たちを守りたい…幸いにも己らは人間の法に縛られない存在。どのような手段を使おうとも、この子たちだけは守り抜くことが出来るだけの力や知識だけでなく、望まれればいくらでも財宝を手に入れてもこれる。

人間に排斥された己らが出来ることと言えば、己らのちからを、

知識を駆使し、この子供たちに伝えること。

近い未来この世界から弾き飛ばされる子供たちに、生き抜く術を教え込まなければ。無情で冷酷な世界の波に幼子が迷い倒れないように。

「なあ、みんな。思つてることあ一緒だと思つがね。どうする?」

煙管に新しい煙草を入れ火をつければ、独特の紫煙が一筋立ち上る。尋ねるその双眸は先ほどまでの暗い闇も、揶揄する色も見えない。しかしどこか人間としての温かみの欠けた、ガラス玉のような色を煌めかせていた。

今まで己の存在は人間であるのか、それとも妖狐であるのか曖昧なままで生きてきたが、サキは己の信条に反するものを排除するためならば、ヒトであることを捨てることも厭わないと考えるようになつていた。

己を救つてくれたのは小さいとはいえ、社に奉られていたお狐様。九尾の狐と言えばもともと守り神とされた靈獸で、裏を返せば革命

を促す凶獸でもある。（世間一般では凶獸のほうが有名ではあるが。）

その氣性も受け継いだのか、その信条次第では相手を傷つける事さえもをして氣にはならないようになっていた。

「そりゃなあ、今の人間ってのはどこでだれが生まれたかって、事細かに全部管理してるらしいじゃないか。ここに者じゃない、あの子らにはそんなもんなかうよ。」

「なんたってそんな面倒くさいことをしてんだろうねえ。いやらしい…。だったら、さつき来ていた人間にその辺りを付け込まれる可能性があるかもしねえねえ。」

「どうするへん？」

言葉に出でさずとも、視線のみが交わされればそれだけで互いの考えがある程度解かるといものだ。なぜなら、全員の意見など聞かなくとも結果など分り切っている。

「子供を守る」

「生き残るために知識をつけさせるへ

それに必要な時間を稼ぐことなど彼らには容易い事。

人間の都合など、アヤカシである「人で無し」の己等には関係の無い事。

「じゃあ、時間稼ぎに…ちいと物の怪らしいことをしようじやあないか。はて、科学だ、なんだと言つてる奴らがどこまで耐えられるか見ものだねえ…」

そう言い出した別の女の眼が濡れたように光る。楽しげに微笑むその口元は常人ではありえないほどに吊り上がり、その爪も鋭い。それを見た何人かも楽しそうに含み笑いをしだした。

「悪戯の好きな連中が多いからねえ。どうせなら知り合いに声を掛けおいてあげようよ。なあに、表立つて商売が出来ない連中さ、多少派手にやつたって、あちらさんには騒げるはずもない。」

猫のような瞳孔と鋭いきばを持つ女が囁いた。

「そりゃあそりゃね、いつの時代もあいつた連中は表に出る」とを嫌がる。」

サキは、表情を変える」となく煙管を吹かして煙を吐き出す。

「本当の裏の連中ってのは、私らを本能的に避けるはずなんだがねえ。可哀想に。」

湯呑みを持つ手に鱗を生やした男が、長い舌で湯呑みの中にある酒をつまそろに啜る。

「これも時代の流れさね。本当の悪党になり切れないなら、見せてやればいい。私は善人じゃあなんでね、自分の懐にいれた大事な宝物を壊そうとする奴には容赦しないよ。」

その時、彼女の背後で蒼い蒼い炎が彼女の笑みに呼応し、嘲笑うように揺らめき、隣に座る妹の口元も牙を剥き出し歪むように笑みを形造った。

翌日から早速マルコとティーチは遊びと称して、住人たちの手によ

りその体を「生き延びる」に適したように作り直される。以降、長い人生で一人の生きる指針になり、戦闘スタイルを形づくる原型となり、また不死鳥という異名で呼ばれるようになるマルコの礎となることになる。

「へえ……結構悪どい」としてんだねえ。まあ、後ろ楯はなにようだし、ちいと突けば直ぐ終わっちゃいそうだ。」

感心したように田の前にまとめられた書類を眺め、田の前に座る客に笑ってみせる。

「楽しかったよ。最近の活動写真でやつてた……ほら、あれだ、スパイになつた氣分だ。」

「近頃じゃ「映画」とか「むうびい」って言ひらしいですよ、猪の旦那」

「人間は面倒な名前付けんのが好きだねえ……舌かんじまつよ。」

労いを込めて冷酒を振舞うサキに、黒い上物の着物を身に着けた男とその連れであらうクリーム色のスーツを着た女が微笑みながら注がれた冷酒を立て続けに3杯一気にあおる。

「ああ、やつぱり暑いときや、これに限るねえ。梅吉さんや、そいつらなんだが、大きなコトはやつちゃいないが、そこそこ小金を貯めていそうだよ。ねえ、キヌさん」

「ええ、しかもあそここの取り締まりをやつてる男つてえのが色狂いなのか、ちょいと笑いかけてやつたくらいで面白いほど反応しやがるんですよ。まったく人間の男つてえのはいつまでたつても進歩いやしないんだねえ。」

「おキヌさんや、仕方ないだろう。それだから私だつて芸鼓として日々の飯のタネにきてたんだ。100年や200年で男のサガがなくなるならこっちの商売もあがつたりだい。」

「まったくだ。ああ、自由に生血をすすつてた頃が懐かしいねえ。」

最近じゃ食事をするのも一苦労だ。
「儂等だって似たようなもんさ。」

この会話をきいている限り、酒を振舞われての一人組も妖怪のようである。

「あの子等の仕込みはいかがなんですか？今鳥天狗の旦那方が教えていらっしゃるんでしょう？」

「ああ、何でも感覚を鍛えるとか言ってたねえ。なにせ、まー坊はまだ数えでも4つかそこらだ。無体はできないだろ？バランス感覚とかを養うとかなんとか…」

「ははあ、まー坊は確かに何も無いところで、よくすつ転んでますからねえ。ちょうどいいかもしませんぜ。」

まだ頭のほうが重いせいか、実際マル「は良く転んでいた。その度に大きな音を立てて転ぶので、常に若菜さんが傍に付き添つようになつたほどに。」

子供の教育が始まつてからは付き添つことはなくなつてはきているが、それでも前転しつつ転ぶといつ器用な転び方を時折披露してくれている。

そのたびに後頭部をぶつけているので、いつか後ろ髪が禿げるんじゃないかと心配されてもいるのだが、予想を裏切ることなく成長した姿は言わずもがな、…といつやつである。

「話は変わるがね、梅吉さん。」

「なんだい、改まって…」

酒の入った湯呑をおいて、猪の旦那がまっすぐ彼女を見据えた。その表情は先ほどまでの穏やかな会話がされていたことなど、忘れたかのように厳しいものだった。

その隣に座るキヌも、同様にその双眸に冷たい何かを宿らせてサキを見つめる。

「覚悟、ついにお決めなすつた、と受けとつていいのかい…？」

その言葉は短いながらも、重い意味を含んでいた。

「ああ、腹あ括つたさあ。ま、いい切欠になつたといえばなつたんだろうねえ。」

「そうかい。」

人間を貶める覚悟

子供たちを守り抜く覚悟

そんなものを尋ねているのではない、もつと根源のもの。

「人間」という「サガ」をサキが見切りを付け、「妖狐」として、「人あらざるモノ」として生きる覚悟がついたのかと尋ねているのだ。

サキの妹であるセイは姉であるサキに甘いから、覚悟がなくとも姉の傍を離れることはないだろつ。

しかし、妖怪は人間に良い感情を抱いているものだけとは限らないのだ。中には餌としてしか認識しないものもいるし、純粹に嫌悪や憎悪の対象としてでしか認識しないものも存在する。

そんな中で妖怪なのか人間なのか、曖昧なまでいるサキをよく思わないものも多い。それに終止符をうち、妖怪として人間の理を外れて生きると腹を括つたというのならば彼らは何も言わない。

10年20年の付き合いではない。それこそ200年程の付き合い

になる彼らだからこそ尋ね、受け止めた彼女の覚悟。

「女の感情つてえのはシチ面倒なもんでねえ。天女のように清純なモンでも、裏返せば鬼にも夜叉にもなる。ヒトつてえのは簡単に捨てられるモンさあ。だったら、この梅吉、意地に掛けたつてあの子供らのためとは言わないよ。手前えが手前えらしく生きるために、腹あ括つて妖あやかしだらうとなんだらうとなんつてやると、啖呵あく切つてやろうじやないか。」

そう、言い切った彼女は、清々しきまでの笑みを浮かべていた。

一一ライカナイの住人達と子供 1-3

久しぶりに出した裁縫箱を使って、何かを縫つているサキに今日の分の「遊び」を終えたのである。マルコが近寄ってきた。針仕事をしているとわかると邪魔をしないように近くに座り込んで、首をかしげてサキへ尋ねた。

「ねえちや、なにを、してるよ?」

住人たちが挙つて子供たちをかまい倒すせいが、マルコは、4歳ほどの年齢に反して話し方もしっかりしてきた。相変わらず語尾に「~い」「や」「よい」とつける癖は抜けていないが、サキ自身が江戸っ子で巻き舌氣味の口調な為をして気にするほどでもない。

それでもサキにべつたりと甘えることも治る様子もなく、マルコは「まだに「ねえちやのおよめさんになる」と言い続けている。しまいにはどうやつたらサキと同じになれるのだと聞かれる始末。

男は嫁になれない、また生まれもったものだから、同じにはなれないと説明しても、いまだに男女や人間と妖怪の区別がイマイチ分かっていないようで、最近ではティーチと猪の旦那の頭痛の種になりつつある。

「ん?これかい?」

一端針仕事をやめて、手に持つた何かをマルコに見せた。

「これはお前さん達へ渡す予定のお守りだぞ。」「おまもつ、ふくら?」

針仕事をやめたサキの膝に甘えかかって、その袋を眺める。だが、お守りといつもの自体がよく分かつていないのか、マルコは不思議そうな表情で首をひねっている。

「おやおや、まー坊、これじゃ針仕事ができやしないよ。どうしたんだい? ん?」

「よこよーこー!」

鳥天狗やみんなが構つてくれるこそマルコも嬉しいのだが、やはりサキに構つてもらえるほうが嬉しいと感じる。口では怒つていても結局甘やかしてくれるサキの膝に抱きつくなつにして、頭を乗せて楽しげに笑う。

いまだに妖怪であるサキと自分の違いが理解はできないけれど、マルコの世界の大部分を占めているのはサキヒトイーチなのだ。

「ねえちや、ずうつとずうーっとまる」と、つい一ひと、にこひや
とじやん、わかなしやん、みんな、みんないつしょ?」

「…………そうだねえ。まー坊が、もつと、今よりも大きくなつてお嫁さんもらうまでは一緒だねえ。」

妖怪と人間が同じ時間を生きることなど無理だと、幼子に説明しても判りはしないのだ。ならば…と、今だけは甘い夢の中、真綿のように優しく温かいこの箱庭の中で幼子の幸せを紡ぐつと。わいつあることは間違つているのかも知れない。

しかし人間の理から外れたこの身が、神の下す罰など受けるはずもない。

(まあ、お稲荷さんとはいえ、その神さんと融合せりまつた私に、どういひできるはずもないさね。)

「まるい、ねよめしやんになるのー。」

「まつたくこの子は、お嫁さんをもらえるのは男だけなんだよ？私は一応女なんだから嫁さんはもらえないんだよ。」

「ひーゅ……、じゃ、ねえちやねよめしやんになつてー。まるいのー。」

「おやおや、熱烈な求婚だ」と。ま一坊が、そうだねセイより背丈がでかくなつたら考えておいつか。」

「ぜつたいねーやくそくだよー。」

少なくともその頃にはこの箱庭から子供たちは出てこないが、己らもここにいるとは限らない。ここは束の間の夢なのだ。この子たちが人間として生きるためにまだのことは忘れてしまつたほうがいい。

幸い幼いこの記憶はすぐに薄れ行くもの、かつ考へてサキは微笑んでいた。

もつすでに色恋沙汰など、己はあつえぬと考へていたといつものもある。

いつたにどこの世界に、年を取らない化け物を伴侶にと選ぶ馬鹿がいるといつのか。この妖怪には住み辛い世界で、生抜くだけでも大変なのだ。命があつて仲間と共にいられるだけでも有難い。それ以上望んでどうじるといつのか。

「まるい、はやくおおきくなる、ねえちやんこつしょこつするよー。」

それでも、この優しい幼子の言葉に胸を詰まされるのは、己がまだ人間を捨てられていないといつのことなのだからつか。

そう考へながら、サキは優しくマル口を抱きしめてやりながら、束の間の夢を楽しむこととした。

「ありがとうね。やせこま一坊が私は白慢で、大好きだよ。」

無事お守りを作り終わったサキは簡単には開かないようにしつかりと縫い付けた後、ティーチとマルコを呼んだ。

「なに？ ねえさん。」

いつもと違う、眞面目な表情で正座をして二人が来るのを待つサキに、ティーチとマルコは些か緊張した面持ちでその前に座る。二人が座ったのを確認して、サキは徐に、懷に入れていたお守りを二人の前へ置いた。

正絹で作られたそれは小さな巾着のようなお守りで、紐が付いており、首からかけられるようになっていた。

「……」いつはね。お前を守らせるお守りだ。肌身離さず持つておいで。

「おまもり？ なかに、なにかはいつてるのか？」

「てち坊やのにはセイの爪と私の髪、まー坊のには私の爪とセイの髪の毛さ。お前さん達にはわからないだろうが、それを持っているだけで大抵の獣や妖怪は寄つてこないんだ。」

犬神崩れとなつたセイも、妖狐となつたサキも妖怪の中では一目置かれる存在である。強などではなくいろいろな要素もあるのだが、そんな一人の匂いをさせている子供を如何こひじよひ等考えられる妖怪はない。

たとえ世界が異なつていても、動物は異質な存在を恐れ近寄らないものだ。己の手の届かない場所にいたとしても、これで少しは守ることができるであろうという、せめてもの親心。

二人がしっかりと首に付けたことを確認すると、サキは一つ頷いて

から一人の頭をなでてやる。

「「」んなもんで守れるのかとか思つんじやないよ？昔つから伝わる方法なんだから。」

「へえ…ありがとう！ねえさん！」

実際はそんな伝え等はないのだが、妖怪の力関係など説明しても理解できないに違いない。そんな考えをよそに子友達は無邪気に喜んでいた。

「姉さん、あこつりが来たようですよ。」

「おや、ずいぶんと早いお着きなようで……おキヌさん、いるかい？」

「あいよ、ここにますとも。坊や達を連れて行くんだね？」

「ああ、頼んだよ。」

奥から小さな包みを持ったキヌと猪の口那が、ティーチやマルコを抱えて裏へと飛び出してゆく。

「なつ？！なにすんだよーおつかせんーはなしてくれよーなんで？どこにいくんだよ！」

「いい子だから黙つて行くよ。ここは危ないからね。」

「やー！ねえちや！ねえちやー！…」

「まー坊！梅吉姐さんのお願いなんだ、あたしらはあんたらを海の祠へ連れて行かなくちゃいけない！」

そんな声が遠くから聞こえてくる。その場にいつの間に集まつたものか、住人たちが普段の人間の姿ではなく本性を現したまま、玄関のほうを黙つたまま睨んでいた。

サキは、黙つたまま立ち上がり、表情を消したまま玄関へと歩みを

進める。

「梅吉さん…大丈夫かい…？今ならまだ引き返せるんだよ？」

「冗談はよしておくれよ。私は腹あ括つたつていいだらう？中途半端じゃなく、まつとうな妖怪になるつて決めたんだよ。その方があの子らを守るためにけつどいい。」

〈妖狐といつ本性で人間を殺す〉

それがサキに課せられた試験だった。本来ならばすでに彼女は妖怪なのだが、彼女を良しと思わない者らを黙らせるために用意されたのがこの試験であった。

刀など道具を使つことなく

その牙で

その爪で

その炎で

引き裂き、噛み砕き、燃やしつくす。

抵抗がないといえば嘘になる。

抵抗があるから」や、今まで中途半端な存在として生きてきたのだ。

老になつての体を恨み

「よつ先に朽ちてゆく物（者）を悲しみ

果ては「生きのよひな生き物へと変えた神さえも呪つた。

（でもね……）

人でなくとも、妖怪であろうとも、大切だと言つてくれた。

「ひの生きてきた時間からすれば瞬きよりも短い時間

そんなわずかな時間だといつのに得た幸福はそれをも凌駕するもの

（もひつたものさきうち返すのが、私の流儀だ。）

素足に下駄をつっかけて、サキは前を見据えて微笑む。

「あーとくと見てもらおうか。私が妖狐だと、あの堅物どもに認めさせてやる「じゃないか！」

まだ昼過ぎだとこゝの雨雲が空を覆い尽くし、あたりは暗く、生ぬるい潮風がティーチの鼻孔を撫つた。暴れつかれたティーチはサキから貰つたお守りを握りしめて、家の方向を見つめていた。マルコもお守りを握つて泣きじゃくり、ずっとサキの名前を呼び続けたままだった。

いつしか風が強くなり遠雷の音が聞こえる。

「なんでだよ…。」

「あんたらにやまだ分らないだろうけどね、梅吉さんは今危うい立場なのさ。人間を殺す能力のない妖怪はたくさんいるがね、能力を持つていて殺さないのは訳が違うんだよ。」

「ころさない？なにがちがうのさ」

ティーチだって、色々本を読んだり住人の話を聞いていて、妖怪には人間を殺したり食べたりするものがいることは知っていた。自分達を助けてくれたのは、姉さんがいたからなのだ。キヌだって、く濡れ女だから人間を殺したり生血を啜る妖怪で、たまにく食事>をしに出かけることも知っている。

「何処の世界にも、頭の固い耄碌爺はいるもんさ。妖怪の癖に人間を殺せない人間の心を持った、妖怪のなりそこないが九尾の狐など許せないと。」

「散々あの人のおかげで暮らしてこれたって言ひのこ、恩をあだで返しやがる、ビうじょうもないやつ等だよ。」

キヌと貉の旦那が吐き捨てるように言えば、マルコとティーチは何もいえない。その原因がもしかしたら自分達のかも知れないのだ。

すると田の前に岩があり、その影に洞窟が見えてくる。其処へ向かつているようだつた。

「こゝは、アタシの縄張りでね、奥にはお稻荷さんが奉つてあるのさ。つていつてもあの人生きながらえさせたお方の残骸を保管してるだけだがな。ここなら、めつたなことじやあいつ等も来ないからここに隠れてるんだよ。」

中は暗いかと思えば、先回りしていたのか鬼火達が中を照らしてくれている。奥に行けば天井は崩れ落ちてゐるのか吹き抜けになつてあり、かなり広い広場になつていて。その中央に大きめの社が建てられていて、そこに一人は下ろしてもらえた。

羽音が聞こえると思えば、真上から鳥天狗が風呂敷包みを持つて降りてきた。その背中には若菜さんも乗つてゐる。

「おお、童共、丁度よい。」

「からしゅのおっちゃん！」

マルコが降りてくる鳥天狗に飛びついで、それを器用に受け止める彼等は、少々緊張した面持ちだつた。

その鳥天狗をみた猪の田那が、訝しげに尋ねた。

「なんだい？上手く事が運んだんじゃないのかい？」

「いや、姐さんは上手くやつたさ、だが、あいつらがこゝちに向かつてきてやがる。姐さんがあつちに掛かりきりなのをいいことに、童共を始末しようとしてるようだ。」

「なんだつて？！話が違つじやないか！あいつら……！」

事情を聞いたキヌの髪がザワリと揺れる。すでに人型ではなく本性である下半身が大蛇の姿へと戻つていて、洞窟の出口を忌々しげに

にらみ付けていた。

同じように毛を逆立てた若菜さんの尾が一つに裂け、その身の丈も2倍に膨れ上がる。

ザリザリと舌を引っかくような音、その音が聞こえた瞬間に社の戸を開き、鳥天狗が一人を其処へと入れる。一緒に猫又となつた若菜さんが滑り込み、しつかりと戸を閉める。

既に子供達も事態を把握しているのか、悲鳴も上げず互いを抱きしめて震えながら戸を睨みながらお守りを握りしめていた。

「おいでなすったか……」

キヌの声に反応するように洞窟の中の闇がぬるりと動いた。風が辺りを揺らしながら天空へと昇る瞬間に現れたのは、鼠色に斑模様をした狼のような牛程の大きさの妖怪だった。

低く地を這うような唸り声を上げながら、いつでも飛びかかるるような体勢でこちらへにじり寄る姿は異様といえた。

「やつぱり、あんただつたんだね……。前々からセイさんを田の仇にしてたもんねえ。」

「黙れ！ あんな犬神崩れなど、認めぬ！ 断じて認めぬ！ あの成り損ないの女狐もだ！」

「黙るのはあんたさ！ 成り損ないだつてえ？ ふざけんじゃないよお、あんただつて散々あの人世話になつておいて、言つことがそれかい？！」

黒く長い髪を振り乱しながらキヌが斑模様の犬神を睨みつける。猪の旦那は相手が犬では勝ち目が無い為、サキへ伝えるべく別の隙間から外へ飛び出している。

身構えるキヌの周りで同じように鳥天狗達が羽を羽ばたかせながら、威嚇をする。

「盟約を違える事の重大さ、知らぬとは言わせぬぞ、犬神い！」

「知つたことか！其処にいる憎き人間を血祭りに上げれば、あの成り損ない共もわかるだろうよ！」

「おのれ…斑尾つ！抜かせえ！」

鳥天狗の羽が強く羽ばたかせられれば、辺りの風が渦巻き奔流となつて斑尾と呼ばれた犬神を襲う。しかしその真空の刃は身体に届く前に、斑尾の吼えた声に相殺されてしまう。

その隙を狙つかのように、濡れ女が蛇体をくねらせ斑尾に体当たりを仕掛ける。

それを見て斑尾は牙を剥き出しにして凶悪な笑みを浮かべた。

青味掛かつた白い毛並みが今は鮮やかな紅に彩られ、その足元には薄い赤色をした犬神が踏み潰されている。

9本の尾がざわざわとくねり、普段は硝子色の静かな色合いの瞳が憎悪に彩られている。

「よくも私を謀つておくれだね。そんなにこの縄張りが欲しかったか…私も舐められたもんだ」

そういうと、飛び掛ってきたほかの犬神の喉笛に喰らい付き、食いちぎる。

サキは今は人の姿ではなく、九尾の狐と呼ばれるものの姿をしていた。青白い毛皮は血塗れていてもなお淡い熒光を放ち、その民家2～3軒はあるうかという体躯は雄雄しくも美しい。

「倒した妖怪を食らえばその分力が増す、あんたらが知らないことじゃあ無いだろ?」「

こちらにきた人間を始末したとたん、周りで見張っていた犬神の集団が一気にサキに襲い掛かつてきた。しかし、元からの体格差に物

を言わせるサキに致命傷を与えることは出来ない。始末した人間と犬神を喰らつたサキは以前よりも妖怪として力が増していた。

そしてその後ろで身構える同じく白銀の狼も血塗れになりながら、襲い来る犬神の群れを迎えた。

「姉さん、こゝは自分が抑えます。姉さんは早くあのチビ共のところへ。」

「…頼んだよ。」

自分とほぼ同じような体躯の狼、犬神崩れのセイに声をかけると、追い縋る犬神を蹴散らしながら子供達のいる場所へと駆ける。それを見送ると、己の毛を逆立たせてセイが唸る。力強く地面を抉れば、軌跡を描くように炎が辺りを行き交う。

「あのチビ共を巻き込もうなど愚の骨頂だな。安心しろ、全員残らず喰らつてやる。」

滅多に自身の感情で動くことをしないセイではあるが、それでも一緒に住んでいた子供達のことは彼女なりに気にかけていたし可愛がつてもいた。

ティーチは何回言い聞かせても、廊下を走り回るしオネショも治らない。それでもセイを「にいちゃん」といつて懷いてくる。

マルコは泣き虫で、良く転んで頭をぶつけてはそこらへんで大声で泣いている。あの泣き声は耳に痛いが、それでもたしなめれば直ぐに泣き止むし、舌足らずな口調で「にいちゃん」といわれれば悪い気もしない。

サキに言わせれば溺愛しているらしいが、それでもこと二人の躰は

きつちりとこなしている辺り、飴と鞭を使い分けて可愛がっているのは明白で自覚もある。

所変わつて祠の中で、斑尾がキヌを踏みつけ一タリと笑みを浮かべていた。

「人間を守つて何が楽しい？我らは人間に仇なす存在だろう？貴様とて、人間を殺しその生血を啜る妖ではないか！人間を襲うことをやめれば力が弱まる、それは摂理…これくらいで倒れ付す貴様は人間に墮落されたのだ！」

「お黙り…！アンタたちに何がわかるつてんだい！」

斑尾に言われたことは真実だ。確かに生血を啜つていないキヌの力は弱まる一方。しかしそれでもサキが作ってくれた楽園で、慎ましやかなれど幸福の中生活が出来ていたのだ。

それを壊されそうになつたキヌの慟哭すら、斑尾には届かない。

「わかるはずもない、脆弱な人間などにウツツを抜かす女狐や貴様の事などわかりたくも無いわ！安心するがいい、貴様も喰らつて我の一部にしてやる。」

胸を踏み抑えられたキヌに抵抗が出来るはずもなく、その喉笛に喰らいつかれそうになつた瞬間白い何かが斑尾の腹を抉るようにぶつかつていつた。

「梅吉さん！」

慌てて起き上がれば、斑尾と組合ひ互いの喉笛を狙いあう九尾がいた。血みどろになりながらもその瞳は静かな怒りで光り輝き、対し

て斑尾は先程の体当たりの時に一緒に狐火で焼かれたのか片目が潰れていた。

「おのれええええ！女狐えええーーーーー！」

「私を謀つて無事で済まされると思つてゐるまつが甘いんだよーーこの犬つころがー！」

尾を全開に広げ燐光を発しながら威嚇をするサキ、こうしてみているだけでも彼女の力が斑尾を圧倒していることが判る。

サキの声を聞いてティーチとマルコは、社の戸の隙間から外を覗き見れば、其處には青い炎と光を纏わせた大きな狐。その尾が9本もあり鼠色の犬に向かつて何事か吼えている。

「私の田の黒い内は、あの子等に手出しませやしないよー。」

そう叫ぶ狐が一いちらを守るかのように社に背を向けていて、マルコはその狐が血に染まっていることに気が付いた。

「ねーちやー？ あのきつねしゃんは、ねえちやー？ けがしてる？ー。」

幼いマルコの田には、返り血で塗れたサキが怪我をしているよう見えてしまったのだ。

慌てて社を飛び出そうとするマルコをティーチと若菜さんが飛び掛つて取り押さえる。

「まるーーーおちつけ！ キヌさんもいつてたろ？ー。ここにいなきゃだめだ！ おれたちじや、たすけられないんだ！ よわいからー。」

泣きながら必死にマルコを抑えるティーチ。自分達がまだ子供で妖怪のような強い爪も、牙も何も持っていない人間の子供だから。この社に隠され守られている。

今ここから出てしまえば、皆の苦労が水の泡だ。これ以上自分達を慈しんでくれている優しいヒトを苦しめない為に。

涙を流しじゃくり上げながら必死にねえりや、ねえちや、と呼ぶマルコを、懸命に説得する。

「こまねえさんのところにいつたら、ねえさんがこまねんだぞ？ねえさんをこまらせたくないだりう？」

「でも、でも、ねえちがつ！」

『あいつや、返つ目か。あのね方せぬ我なんぞしてやしない、坊や達、達

安心おし。

突然皺枯れた老婆の声が聞こえてきて、暴れていたマルコも抑えていたティーチも驚いて止まってしまった。そしてその声の方向から

「わ… わかなさん？」

『あたしゃ話すのが苦手なんだ、いいね～。君を困らせるじゃなこよ～出よつとしたらその尻を吊り上げたくからね。』

「はい！」

卷之三

「又に分かれた尻尾を社の床にたたきつければスパンと大きな音がし、そんなもので叩かれたくはないとばかりに二人はその場で正座をした。

これもセイの教育の賜物か、条件反射なのか。その様子を見て、若菜さんはため息を一つ零し、奥へ行くよつ促した。

「女狐えええ！成り損ないのくせに、よくも！」

焼かれた傷が痛むのかしきりに首を振りサキへ唸り吼える斑尾。それに対しサキは双眸を細めて、楽しげに笑んだ。

「その成り損ないに殺されかかってるのはどこのどいつだい？キヌまで喰らおうとしていたようじやないか。」この周りにも犬神が多

くいたようだけど、全部私が頂いちまつたよ。」

流石に食いすぎたかもねえ…と舌なめずりをしつつ悪びれもせずに笑うサキに、斑尾の毛が逆立つ。倒れ臥していたキヌは既に鳥天狗が抱えて社の傍へと避難をしている。

「おのれ、オノレ！ よくも我が同胞をおおおおおっ！」

悠然と立つサキに向かつて、完全に激昂し牙を向いて襲い掛かる斑尾を今度は真横から白銀が襲い掛けた。

一瞬のことであつた、白銀の狼が斑尾の喉笛を食い破りなおも四肢で身体を大地に縫いとめている。

斑尾は四肢を痙攣させながらも逃れようと/or>いるが、次第に歯茎を剥き出した口から舌が力なく零れ、その黄色い瞳が濁り動向が開いてゆく。

「お前で最後だ、斑尾。せめて自分の中でその同胞と再会するがいい。」

大きな痙攣を最後に動かなくなつた斑尾を咥えセイがゆつくりと飲み込む。血の一滴も残さぬように。

それが殺めた妖怪への償いだとでも言つよう。

「大丈夫かい？ キヌさんや」

「梅吉さん…」「めんよう…あたしゃ役に立てなかつた…！」

鳥天狗の介抱を受けながらキヌが泣き崩れた。子供の事を任されたところのに、満足に戦うことが出来なかつた事を悔やんでいるのだ

۸۱۵

一一ライカナイの住人達と子供 1-8

頃垂れるキヌの元へ社から飛び出してきた子供達が抱き付いた。

「坊や達つー怪我はないね?」

子供達を田に留めるなり安否を氣遣うキヌに、子供達は涙に濡れた顔でただただ頷くことしか出来なかつた。

「無事なら良かつた……」

「皆大したことなく済んで良かつたさ。」

サキの声に反応したマルコが弾かれたようにそちらを見れば、先程見た青みがかつた白い体毛の九尾と、それよりも一回りは大きい白銀の狼が並んで佇んでいた。

とはいへ、小さいマルコやティーチからは腹しか見えない程に大きい。上を見ようとして仰け反るマルコが、後ろへ引つくり返りそうになるのを慌てて鳥天狗が支えてやる。彼等もマルコの後頭部への打撃をこれ以上増やさない為に必死である。

「ねえちや、……こいちゃ……よー…?」

「そうや。」

目の前の子供達の瞳がこれ以上ないくらいに開かれる。
初めて本性を見たのだ。無理もない。

「おつきい、よい

「やうだな。」

ティーチなどは、田だけではなく口まで開きっぱなし。その田に憧憬が見てとれるような気もするが多分氣のせいなのだらう。……しかし。

「まるい、元にさりやへうご、がんばつむわくへなる、よこ」

「……ん?」

マルコの言葉に、最初その場にいた大人達は何を言い出したのか今一解らなかつた。

思わずサキとセイが目を見合ひます。

「ねえちやより、おつきくなつて、しゅうじくつよくなる、よこ」

「まー坊……?」

「だから、ねえちや、まるいの、およめしゃんになる、よこ」

泣いて顔をくしゃくしゃにしながら、サキの血にまみれた前足にしがみつく。

初めて見たサキの本性に、マルコは恐怖などよりも、守られている子供な自分への怒りが浮かんできた。たかが四歳といえど、好意を抱いてる相手に守られるのではなく、守りたいと考えるのは男の本能故か……。

実際は、「およめしゃん」発言に託つけて鳥天狗達が、男とは何ぞやを説いたせいかもあるのだが。

彼等からしたら下手な男（妖怪）に大事な娘を取られるくらいなら、今から相応しく育ててしまえとばかりに「逆光源氏計画」を実行しているに過ぎない。

本人達の意向などまるで無視だが、妖怪とは往々としてやついつものである。

「…ひ、お前まで血塗れになっちゃうよ。その手をお放し…妖怪の血は人間には良くないんだよ。お前まで人間の理からはずれちまう。」

唯の人間の血ではない、妖怪の血を浴びてしまえば人間の体にどういった効果をもたらすかわからない。

少なくとも毒にはなれど、薬にはならないことは明白だろ？

「にいちゃん…」

「なんだ、てち坊」

「すげえ、かつこいい！！でつけえ！」

「……え…？」

子供達の中でもどういう思考回路になつてているのか確認できないがく大きい＝格好いい＝という図式が成り立つていてるようだつた。

セイも血まみれのままで、呆気にとられたかのように口をパカリと開いてしまう。

人型に戻つたサキは、抱きつくマルコを鳥天狗に預けてから、腹を抱えて笑い出す。それに釣られるようにその場にいた大人たちも笑い出した。

「あつはつは！みなよ、セイの顔！あー…まあ、そういうや、これつくらいの子供つて、デカイもんに憧れるもんだよねえ。ああ、おかしい」

「まったくだ！あー… そつだよなあ。見越し入道の旦那や、キヌを見て平氣なんだ、ちいとデカイ狼や狐みたつてなんともないわな」「ちょいと！聞き捨てならないね！見越しの旦那はともかく、なんでアタシなのさ！その羽巣つて焼き鳥にしてやるよー」

ケラケラと笑う鳥天狗にキヌが噛み付く。もちろんそれは本氣で言

つてはいる訳ではなく、じゃれ合ひの範囲だ。現に鳥天狗は口では怖いといいながらも、キヌを支えるのを止めはしない。

なんだかんだで仲が良いのだ。

そこへ、付喪神や貉の旦那が長持や何やらを荷車に乗せてやってきた。

「梅吉さん、持つて來たよ。先発のやつ等ももうすぐ到着するつてさあ。」

「師匠、粗方片付けも済ませて來ましたよ。」

住人が次々と祠へとやつてくるのを見て、マルコ達は不安げにサキを見上げる。

「ねえさん？ なんでもつなんか…？」

「この世界は、私等妖怪には住み辛いってのは話しただらう？ これだけ派手に暴れりやあ、ここにも人間がやつてくる。その前に皆で引越しゃ」

お前達も一緒にねと言えば、安心したように胸を撫で下ろす子供達に、手ぬぐいで顔を拭つてやつてから鳥天狗が持つてきた風呂敷包みをしつかりと子供達に背負わせる。

そうしてゐうちに皆が準備を整えたと言われば、再び九尾の姿へ戻つたサキが社へ狐火を点す。

「さ、みんなお行き。急いでおくれ。こいつづときの人間は動きが早いからね！」

その声に皆が一斉に炎の燃え盛る社へと飛び込んでゆく。青い炎が燃え上ると飛び込んだものが消えてゆく。

「や、行くよ。」

「え…ねえさんば?」

「まのこはねえちやとこつしょこべー。」

子供達は促されるも其処に佇む二人と一緒にいと、ぐすり始める。それをサキは表情を変えずに優しく諭す。

「この回廊は私が維持してんだ。先にお行き。いい子だから。や、

キヌさん」

「あーよう。」

必死に離れまいとしがみ付く子供達を捕まえて炎へ向かうキヌ。

「はなせよー！こひゃん！ねえさんー！」

「やあああ！！！やーー！やーよこつー！ねえちやああああつーー！」

マルコがサキへ必死に幼い手を伸ばすも、それすら炎に絡めとられる。

熱くもないその炎に巻かれながら、マルコとティーチが最後に見たのは青い炎を身に纏い夕闇の中佇む美しい2頭の獣の姿だった。

炎に巻かれてから意識を失ったのか、ティーチが気が付いたのは見知らぬ海岸だった。直ぐ隣にマルコも倒れていて。

「まるいー。」

慌てて抱き起し、うつらと瞳を開く。泣き止んだその田代で、いか虚ろで、それでも辺りを見回してサキの姿を探す。

「てーち…? ねえ、ちやほ?」

「いねえ…みんなも…みえるはんいじや、みんなみあたらねえ」

捨てられたのではないかわかる。おそらく自分達が逸れてしまつたのだ。

皆が持たせてくれた荷物は幸いちゃんと持つていたし、姐さんが作ってくれたお守りもしつかりある。

「まるいー、こいか。よくせくんだ」

「てーち?」

マルコの肩をしっかり支えて、ティーチは何かを決心したように海を見つめる。

「つよくなつて、だれにもまけないへりになつて、ねえさんたちのところへ、かえるんだ。」

「かえる…?」

「おうーおれたちは、ヒトだからよむわいけど。つよくなつたら、きっとねえさんたちとこっしょにこられる。」

それは、幼い子供達にとっての唯一の希望。もつと大きく、強くなればあの人たちと一緒にいられる。
最低でもあの犬の妖怪に勝てるくらいにならないと、そばにいられないと。

「つよく、なつたらねえちゃ…」

「セハツ！まるこ、おまえ、うめきちねえさんを、よめさんにするんだろ？おんなよりよわいおとこなんて、あらわれちまつて。だからいつしょにつよくなろう！」

「なる…まあ」「つよくなつて！むかえにいくのー！」

キヌ達が語り聞かせてくれたお話でも、天女をあいかけて男が天界へ行っていた。今は無理でも大きくなつたら迎えにいける。
それは幼いマルコにもわかつた。

「なんだあ？チビども、こんなところで何をしてる？」

二人で目標を決めていた時に後ろから声がかけられる。慌てて振り返れば、入道のように大きな男がこちらを見ている。白いひげが特徴的な男で、今までのティーチ達なら怯えるしか出来なかつた。
しかし、幼いながらも決意を秘めた子供達は怯える事無く男を睨む。

「あんたにかんけいないだろ。」

「グラララ、面白えガキ共だな。お前等孤児か？」

「だったらなんだってんだ。へんなひげしやがつてー！」

威勢よく言い返すティーチに、無言のまま睨みつけるマルコ。それ

をみた男は一ニヤリと笑つて、口に言つた。

「本当に面白い坊主共だな。おれと来るか？俺あ、ハドワード・ヒューケードってもんだ。」

そして、運命の歯車が回りだした。

—ライカナイの住人と子供 FHN

一一ライカナイの住人達と子供1-9（後書き）

読んでいただきました皆様には心から最大の感謝を。

これより以降は番外編と第2部が始まるになります。

突つ込みどころ満載の、自己満足的な連載ではありますが、これらもお付き合いいただければ幸いです。

季節は皐月、新緑は濃い色合へ変化し、日差しも強くなり初夏と言つて良いほどに気温が上がる日も増えてきた。

そんなある日、珍しく外出をしていたサキは、新聞紙に包まれた大きな包みを持って帰宅した。それを見つけたマルコは、まるで親を見つけた子犬のように喜んで駆け寄つていく。その後ろから一緒に遊んでいたのであろう古狸の旦那とティーチが歩み寄つてきた。

「ねーちやー！おかーりなしゃーい、よーい！」

満面の笑みで、その足元に纏わりついてひょこまかと歩くマルコの姿は、金髪がふわふわと揺れるのと相まって、刷り込みをしたひよこのよつこも見える。

「まー坊、ただいま。良い子にしてたかい？ああ、古狸の旦那、明日は端午の節句だろ？悪いけれど、3日は我慢しておくれなどみんなに、伝えておいてくれないか。後で詫び代わりといっちゃんだが、上物の酒を届けるからさ。」

「それくらいお安い御用だ、梅吉さん。ちよつくり行つてみんなに伝えてくるよ。てち坊や、まー坊、悪いが今日からしばらくは遊びないからな。悪戯はいいが程々にな！」

そう言いながら古狸はティーチの頭を撫でまわしてから、ほかの住人の住んでいる長屋へと駆けて行つた。その様子を少し詰らなさそうな表情で、ティーチが見送る。

「なんで、たぬきのおっちゃんたちは、おれたちと同じあそべないんだよ。つまらねー。」

氣に入らないのか頬を脹らませ、足もとの小石を蹴りながらサキのところへ歩いて行く。その顔のまま着物の袖を引いてサキへ疑問をぶつけた。

「うめきちゃんと。なんでみんなは、おれたちとあそべないんだよ。ダンゴノセックつてなに？」

「だんごつて…だんごじゃなくて、たんごのせつく、だよ。てち坊や。お前さんたちは人間だからねえ。魔除けをして子供の健康と成長を願つおまじないをするのさ。ここに住む大抵の住人は苦手なものだからねえ。しばらくここに寄りつかないよ。なに、二～三日で元に戻るんだ、代わりに御馳走つくるから我慢おし。」

御馳走と言われば子供も現金なもので、掌を返したように機嫌を直してしまう。

兄貴分の機嫌が良くなつたのを見て、マルコも嬉しくて仕方ないのか、サキの着物の裾を掴んで歓声をあげる。

「セハツー！」ちしきかあー、たのしみだなあ。でも、へんなおまじないやるんだな。こつちつて」

「おじまないー？」

「おまじない、ね。まあ、今から千年くらい前から続く行事だからねえ。多少形式が変わつてるらしいが、せつかくだからね。私等があんた達の幸せを願うのは当然だろ？・皆家族みたいなもんなんだ。参加出来ない連中もちゃんと長屋で願ってくれるから安

心しな。」

こんなに大勢で祈るんだ、妖怪の祈りだつて神様が聞き届けてくださるだろうぞ。

そうやつて、荷物を縁側に置いたサキが一人の頭を撫で回した。それを嬉しいような、恥ずかしいようなくすぐつたいようなまぜこぜな感情を上手く表現できず、照れ笑いで子供達は誤魔化した。

翌日、早朝からサキは大忙しだった。

何せ元々死人で犬神崩れとして蘇つた妹はこういった行事には一切参加が出来ない。参加したら最後、己まで浄化されてしまう。長屋の住人もそういった怨念から生まれた者がいるため、敷地内の奥の奥でじつと終わるのを待っていた。

とはいって、ちゃんと前日に酒を用意しているので、子供達の健康を願いながら酒盛りをしているのだろうが。

めでたい事だからと、台所で付喪神と一緒に育ち盛りの子供達へのご馳走を作るべくあちらこちらへと立ち回っている。

そういうふたモノに左右されない者も多くいるので、せつかくだからと縁側から見える位置に大きい鯉のぼりを飾つてやるものもいたし
敷地内の竹藪へ夜も明けぬうちに筈を掘りに行つたものもいる。
海へもぐることの出来るものは、大きな鯛を生け捕つてきたし、ある者は寝かせて置いた自然薯を持つてくる。

それ以外の者は子供達が退屈しないように、色々な話を聞かせてやつていたりしていた。

長い時間を生きていく彼等にとって、こういったちょっととした事でもお祭り騒ぎのようになってしまつ。それが大切な大切な子供の為となればなおのこと。

「セハ！おれ、すいぐんのはなしがききたい！」

「まゆこも！」

海が近いせいもあるのか子供達は事のほか水軍の話を喜んだ。

水軍は現在で言うところの海賊なのだが自分達を酷い目に合わせたのがその海賊だというのに、そんなことはすっかり忘れてしまっているのかと、語り部達も笑つた。

楽しい話に気が付けば辺りはすっかり暗くなつていて、そして料理が出来上がれば、普段の食卓ではない大人数用のテーブルがだされ、その上に乗り切れないほどに並べられる。

弟子と名乗る女衆は綺麗に着飾つて音楽を奏でているし、男衆もあちらこちらでそれに合わせて踊りだす。明かりをつけなくても狐火や鬼火がやわらかく辺りを照らしてくれる。

人間の姿をしているものももちろんいるのだけれど、小山のように大きな入道や、大きな蛇の下半身をもつた女のヒト、一般的に禍々しいと言われるものも口々に子供達の健康を願う口上をあげてくれる。

姿形は怖いかもしれないけれど、それでもティーチやマルコを「てち坊、まー坊」といつて可愛がってくれる彼等に、無邪気に喜んで彼等に抱っこをせがむマルコ。ティーチは情深い彼等に嬉しくて涙を零して、それをごまかすようにご馳走に齧り付いた。
柏餅を齧りながら、ジュースを飲む子供達。その周りで騒ぐ妖怪た

ち。そのちょっと怖くて優しい夜の事は、いつまでもみんなの心の中に残つた。

色々小話詰め合せ一（前書き）

ひびつゝ時代の小話を詰め合せています。

色々小話詰め合せ1

1・着ぐるみパジャマ

秋も過ぎ段々と肌寒くなってきた頃、すっかり屋敷での生活に慣れたマルコが梅吉にしがみ付いたまま、泣いていた。

「うーゅ……いちゃーよい……」

「こんなに涼しくなってるのに、腹出して寝てるから腹痛になるんだよ……まったく。腹巻きをさせても寝てる間にはずしちまう……どうしたもんか。」

そう、いへり涼しいとは言え寝てはるうちに布団を蹴り飛ばしてしまつ為、マルコやティーチはショッチャう寝冷えをしておなかを壊していた。

それを何とかしようと、腹巻きをわせても寝てはる間に、器用にはずしてしまい、朝にはお腹をだして寝てはるのだ。血が繋がつていいとは言え、この一人の子供はあることなすことが良く似通つていた。

温かい日本茶を飲ませて腹をさすつてやりながら寝冷え対策を考え込んでいると、そこへキヌが大きな袋を抱えてやってきた。

彼女はたまにあちらこちらへふらりと出かけ、ショッチャう何かしらの土産を持って来るのでマルコとティーチはかなり楽しみにしていた。

「梅吉さんいるかい？江戸のまつへ行つてきたんだが、いやあ、あつちは泳ぐものじやないね。そこかしこへドロだらけで息がつまつちまつ。」

土産持つて來たよ、と居間へ入れば腹痛に泣いているマルコの姿。それをみて合点がいったのか、キヌが苦笑いをしながら包みを開いた。

中には黄色や白などの色合いが鮮やかな布が入っている。思わずサキが手に取り広げてみれば、それは子供用のいわゆる着ぐるみ状の寝巻きであった。

「キヌさんや、これは？」

「ほり、坊や達寝相が悪くて腹冷やすつていつてたじやないか。向こうで子供服売ってる店の人間にそれを言つたら、こんなのはどうだ？って言つてくれてねえ。色々あつたから買つてきたのさ。」

確かに着ぐるみならばお腹が出る事無いから、子供にはいいのだろう。キヌが広げた所謂着ぐるみパジャマは何種類もあり、猫や犬、ペンギンにキツネといつものもあつた。

「きつねちゃん、よい！まゆこ、これりえ！こえ！ねーちや！」

「セハ！おもしろいなあ。これなら、おなかださないでねれるのか？おれ、はらまきつて、はらがくるじこから、きらこなんだよな。」

キツネの着ぐるみを見た途端、機嫌になつたマルコが、必死に手を伸ばして、これがいと自己主張を始める。

ハイハイ、と梅吉が着せてやれば、嬉しいのか居間の食卓の周りをぼてぼてと走り出した。子供用とは言え小さいマルコにはまだ大きかつたのか、尻尾を引きずり、よたよたとしているようにしか見えないが本人がいたく満悦のようだ。

「おやおや、子狐の出来上がりだ。」

デフォルトされたキツネのパジャマは黄色い色でバランス悪く歩く。その姿は、子狐というよりも生まれたてのヒヨコと表現したほうがしっくりくるのだが、マルコはキツネに異様なほど執着を見せる為一応「子狐」と表現しておく。

梅吉が九尾の狐のため、幼いながらも自分の大好きな人とお揃いにしたいという気持ちがわからないわけではないから。

「あれ、これにしようかな。セハツ！ ジャンとおそろいだ！」

ティーチはジャンとお揃いということで犬を選んだようで、キヌに手伝つてもらつて着替えていた。幼い子供の割りにお腹だけが出つ張つた栄養失調の典型的な体型かと思いきや、どうやら生まれつきのものらしく着ぐるみの腹が出つ張つた犬になつてしまつた。

「……なんか、これつてたぬきのおつかちゃんみたいだな…。ジャンとおそろいにはみえないや。」

「…つぶ！ つあはははははー自分で言つかい？！」

「たぬきのやつある？」

「あるけど…着るのかい？」

「うん、きて、おつかちゃんとみせてくるー！」

ティーチの言葉に笑いながら一体どこから持ち出したのか、カメラで子供たちの写真をしつかり撮つているキヌが、しつかりペンギンやウサギ、イチゴなどを着せて「子供たちの思い出」と称しアルバムをしつかりと作成していた。もちろん狼夫婦の本性である狸姿とティーチと一緒に撮つたものも添えて。

遠い未来、ティーチとマルコが大人になり、それを持ち出してきた梅吉のおかげで、白ひげの乗組員達が大笑いしたのは余談である。

「……」「めんな、そこ……」

縁側に正座をしたティーチが、泣きべそをかきながら梅吉に謝る。と、いつもも縁側から見える物干し竿には敷き布団が干され、その真ん中は濡れていた。所謂オネシヨといつものである。

「てち坊や、なんで夜中に廁行きたいなら階を起こさないんだい？ 声をかけりや、ジャンや若菜さんだつて着いてくれるし、そちらを散歩してゐる長屋の連中だつて付いて来てくれるだりひつ~。」

子供が幼いうちはいついたこともあるものと解つてゐる梅吉達は、オネシヨくらいで怒つたりはしない。だが、なぜ廁に一人で行くのが怖いなら、他のものにつきてくれるより頼まないのかと問いただしていくのだ。

妖怪というものは夜に行動をするものがほとんどなので、声を掛けてくれれば皆が、なんだかんだと世話を焼いてくれる。だといつのになぜ嫌がるのかが解らない。

「だつて……」

「なんだい？ 怒つたりなんぞいやしないよ。話していいよ。」

ちうぢらうと、梅吉のほうを伺い見るように上田遣いでみてくる幼子に、梅吉は首をかしげた。しかし、辛抱強くまつていれば、ティー

チがクチを開いた。

「だつて、おうかで、そとにあるだろ？ いつかいいつたんだけど、くらくて、おつこちそうになつたから…」

「だつたら、明かりをつけておくから、それなら大丈夫だろ？ ほかには？」

この屋敷は元々が古い作りのため、トイレが外に別の小屋で作られている。所謂汲み取り式の為、幼い子供は足を踏み外せば便器に嵌つてしまふのだ。

暗くて足を踏み外すといつならば、明かりが付くようにしておいてやればいいし、子供用に踏み板を大きくしてやることも簡単だ。そんなことは訳も無いという梅吉にティーチはクビを振つて見せた。

「どうしたんだい？」

「それだけじゃなくて、からすのおつちゃんたちが……」

「鳥天狗？ クロウとコスケか。あの一人がどうかしたのかい？」

話を聞いてみれば、この屋敷の裏にある森を根城にしている鳥天狗の名があがり、訝しげに梅吉が尋ねる。

「おつちゃんたちが…」

「ねえ、てち坊、今夜はから揚げと、水炊き、どっちがいいかねえ？」

話を聞けば、わざわざ皆の手を煩わせるのも、と一人で廁へ行つていたのだが鳥天狗が暇つぶしにと、明かりをいきなり消したり、暗がりから子供を脅かしたりと散々悪戯をしたために夜の廁がトラウマになつていた。

そんなことをされれば、当然夜中に起きるのを嫌がり朝まで我慢をしてしまうだろう。そして堪えられずにオネショをしてしまつ。事の真相を聞けば、梅吉は笑顔で立ち上がり、欄間に掛けてある愛用の薙刀を片手に外へと出て行き、着物の裾をたくし上げて、鳥天狗を追い掛け回す梅吉にティーチは呆然としながらも憧れの眼差しで見送るしか出来なかつた。

「待ちなあああああーーの鳥井おおおおー。」

「今日といつ今日は、許せないねえ。覚悟あしー。」

ああああああ！

「うめき声なんせん、すげえ…かっこいい…」

こうして、この日以来ティーチは夜中に廁へ行くために梅吉かキヌに連れ添つてもらい、オネショをすることはなくなつたといふ。

闇話 ハフ未来設定 よりJAPAN樂園へ（前書き）

「ハフ未来設定」の未来設定となつてこます。

しかし「ハフ」はハフですので、必ずしも「いつなるところ」ではない
ぞこめせん。

今回ハフマンは出でまつません。

「なあ、そういうやお前らの恩人ってどんな奴よ?」

グランドラインの中にある小島、その中の歓楽街の店でお茶を飲んでいたマルコとティーチへ四番隊隊長であるサツチが唐突に尋ねた。

「ん~? 恩人って…ああ。あの人のことかよ!」

彼は以前から、マルコとティーチが海賊になる切欠となつた恩人なる人物のことが気になっていた。どこで出会つて暮らしていたのかは知らないが、一人が言つには「あそこは、一ライカナイつて場所なんだ。」としか言わない。

しかし、このグランドラインでさえも、そのような地名は聞いたことがない。そこで直接聞くことにしたらしかつた。

ブラックのコーヒーを飲みながら新聞を読んでいたマルコが、尋ねられたことに対し一瞬考え込むようなそぶりをしてから答えた。その目の前で、ティーチがお気に入りのスイートポテトパイを頬張つている。

「まあ、なんとも表現し辛え人だな。中途半端なようつで中途半端じやねえ。鬼みてえに怖いが、同じだけ優しい。」

「なんだそりや。女か?」

「一応…2人とも女だつた…はず。うん、間違いなく女だな。」

一緒に風呂入つたことあつたしな、一方的に洗われた記憶しかないけど。とティーチが事も無げに言えば、マルコが懐かしそうに頷き、サツチは眼を見開いた。

「何、お前ら女に風呂入れてもらつたのか？羨ましいじゃねえかつて…じゃあ、いまじゃけつこうイイ年のババアか。」

美人は美人でも昔の美人は俺の範疇じやねえんだよな。と顎を撫で付けながら呟く。

「んな事、あの人達の目の前で言つてみろよい。サツチ、そのリーゼント着られて頭から食われちまうよ。」

「そうだな。バリバリと食われるな。下手したら一口で終わるかも知れねえなあ。なんせにいちゃんはマジで怖いし。」

呆れた目線でマルコとティーチが言つのに、サツチが笑いながらそれを否定した。

「何言つてんだよ。頭から食いつてどんだけデカイバケモンだよ。俺あ天下の白ひげ海賊団四番隊隊長のサツチ様だぜ？それくらいじややらねえなってーの。」

しかも年寄りだろ？と笑い飛ばすサツチに、一人は視線を合わせて同時にため息を吐く。

「あの人達はな。元ドラム王国にいるD.R.・クレハの2倍は最低でも生きてて、なおかつ若いんだよ。にいちゃんは、まあ同じくらいかもしけねえけど。」

「俺達があつた時で既に300歳は超えてたはずだねい。それでも見た目は変わっちゃいないらしいから、今でも綺麗なままでゲイシヤをやってるはずだい。」

「マルコは昔からあの人べッタリ甘えてたもんな。三つ子の魂100までだつけ？相変わらず一筋か。」

「愚問だろい。」

「ちゅ……ちゅっとまで。一体どんなやつだよ。ほんと」

300年以上生きる生物など、グラントラインでも珍しい部類で、なおかつ不老となればお宝級だ。しかも……ゲイシャ……？そこでサッチは、いぶかしげな表情をして、首をかしげた。

「ん？ ゲイシャってあれだら？ この島にもこの姫婦だら？ お前、姫婦に助けられたのか。」

「……あ～あ。サッチ、お前、言つちやけねえことこつたな。」

「まったくない。サッチ、嬉しくことにそのフランスパンの寿命も潰えるよ。」

「なんだよ、それ？ ……やめんなさい」と叫つなよー。」

「これは俺のポリシーだぜ？ ……と思わずサッチは口の髪をかばう仕草をする。それに対してもマルコは、少々冷たい、むしろ戦闘をしていたときのような厳しい表情でサッチを見んだ。

「いいかい、ゲイシャってのはない、サッチ。芸をうるからゲイシヤであつて、色を売るのはゲイシャっていわねえんだよ。そちらの娼婦と一緒にすんじゃねえよ。今度そんな事言つてみろい。その頭のフランスパンを引きちぎって海王類の餌にしてやるよ。」
そのときは、そこで話が終わつたのだが、マルコとトリー・チはその後思いもかけない出会いをすることになる。

「ははあ……悪魔の実を食べたら化け物……でござりますか。いや、これは面白い。どうりにいたしました根本は同じ人間でござりますの。」

この島で唯一の宿泊施設に泊まつた際、その妙に恰幅が良くて、眼

の周りが隈なのかいわさか黒ずんだ支配人にそんなことを言われた。

「この島では、悪魔の実を食べていようがいまいが、関係ございませんよ。まあ、部屋の内装は少々異なりますが。手前共にはどちらであつてもお客様でござりますからね。ああ、この島には能力者は一人もおりませんよ。」

能力者用の部屋には、極浅い浴槽が備え付けてあるらしい。希望者にはシャンプーなども水を使わずに洗えるドライシャンプーに取り替えるらしい。

この島のログは20時間必要とのことで、せっかくだからと一晩厄介になることとなつた。

「なあ、なんでこの島の連中は能力者をこわがらねえんだ？能力者は大抵海賊や海軍だろ？一般人からしたら、やつぱり怖いもんじゃねえのか？」

無邪気にエースがそんなことを聞けば、部屋に案内をするナカイへは苦笑いをしながら答えてくれる。サツチがさりげなくナンパをしようとしているが見事にスルーするあたり見事といえる。

「ああ、なるほど。まあ、ついでござりますねえ。この島が海賊に襲撃でもされましたら、その理由がよくお分かりになるかと存じますよ。」

「襲撃？！あぶねえじゃねえか。まあ、白ひげがいるところにやつそうくるわけ無いだろうが。」

「いえいえ、よくあることでござりますし、それにそれが一番わりやすいのでござりますよ。」

そんな話をした夜に、早速島が襲撃された。見える旗はグランドラ

インでも4000万程度の賞金首で、船員の数だけでビックリかまか
なっているような海賊団だった。

最初は白ひげの面子が出ようとしたのだが、この島は白ひげの縄張
りではないし、自分達の面倒は自分達で見れるといつ島の長老に言
われてしまい、出れなくなってしまった。もちろん船に被害が無い
ように居残るのは問題ないが、手出しだけはしてくれると釘を刺
される始末だ。

島の住民が嬉しそうに海岸へと集まつていぐ、大人も、年寄りも、
子供までも、全員武器らしいものは何も持っていない。

「久々の運動だねえ。」

「まつたく。今度はどれくらいい楽しめるやう……」

うふふ、あははと和やかな会話が交わされる。今この島は海賊に襲
撃されているというのに、この和やかさはなんなのだろう。

「『』の島は変わってるなあ？マルコ」

サツチが海岸から少し離れた所で酒瓶を片手に話しかける。マルコ
とティーチは興味がなさそうに座り込んで辺りを眺めていた。

すると、海岸へ続く道にある集団があわられた。皆一様に地味な色
合いで着物を身にまとい、羽織という上着を羽織っている。その上
着も黒っぽい地味な色ばかりだというのに、その集団の先頭に立つ
一人だけが眼にも鮮やかな桔梗色を身にまといっていた。

「おお、与一姐さんらの到着だ。」

「やつぱり粹だねえ。『』の氣風の良さ」

等と口々に島の住人が憧れを込めてその集団を讃めそやす。それを
見ていたサツチが首を傾げる。

「なんだあ？ありや、ゲイシャの集団じやねえか。」

「ん……？」

サツチの指差す方向にマルコとトイーチが首を向ければ、ビジコと体を硬直させ眼を見開いた。

「ちょ…ちょつとまてよ。ありやあ…」

「間違いねえ、あれは…姐さんだ。なんでここにいんだよ？…」

「へ？お前等知り合いか？」

慌ててトイーチとマルコがゲイシャの集団へ駆け寄るのをサツチはあっけにとられる様に眺めていた。

「『一姐さん！…』

トイーチが桔梗色の羽織を羽織ったゲイシャに声を掛ける。すると、驚いたように首を傾げる『一姐さんと呼ばれた女が訝しげに返事を返す。

「ええ、確かにアタシは『一』ってえ名前ですがね。田那方あ、失礼ですがどつかでお会いしたことありましたかねえ？」

「俺だよ！トイーチだ！こっちはマルコ！覚えてないか？ほら、あの家で世話んなつた！」

「え…トイーチとマルコって、あら、やだよ。あのおチビさん達かい？！暫く見ないうちにでつかくなつたねえ？」

思いがけず知り合いに再会した為に、『一』だけが一人を連れて座敷へ戻る。

完全に置き去りにされたサツチであったが、その後に見た驚愕の真

実際にその島でナンパ行為等を止めてしまった。

そう、この島はマルコやティーチが世話になつたくニライカナイの住人達への楽園だった。

悪魔の実の能力者を恐ろしいと思うはずもない、人間というカテゴリーに区分されない異世界でいうなれば、妖怪と称される生物の縛張りなのだから。

「なあ、サッチ！頼む！俺の飯をダイエットメニューに切り替えてくれえええ！！！」

「はあ？！なんだよ、行き成り…」

「その腹がバレたら蹴り殺されるよ。姐さん達、主に兄さんに。」

「俺つ俺まだ死にたくねえ！頼む…！」

そして翌日、本来ならばこの島で見た記憶は宿の支配人の手配で改竄される予定だが、マルコやティーチがいるならば問題なかろうと不問にされた。もし辺りに吹聴したとしてもマルコやティーチの匂いを追つて根源を断つのは容易いことであるし、吹聴したところでは誰も信じないからだ。そして出航してから、サッチに必死に泣きつくティーチの姿が見られた。それを白ひげのクルーたちは不思議そうに遠巻きに眺めている。

出航前に、この島の住人が見送りをしてくれたのだが、その際に「一が二が三」と言つたのだ。

【暫く見ないうちにでかくなつたのはいいけどもねえ。ちゃんと鍛え上げてあるま一坊はともかく……てち坊、お前さん、梅吉姐さん達がその太鼓腹をみたら何て反応するだろうねえ。】

まだこちらに来ていないとほいえ、あの人人がそういう体型を一番毛

嫌いしてんのを知ってるだらう。と訴われたときのティーチの顔色は蒼白といつてもいい。

「あー……やつこり」とか、わかった!」このサッチ様がビーにかけてやるやう!」

「サッチ!本当に恩にきる!…」

「それもそただけどよい、ティーチ。酒とオヤツ止めて運動しねえと意味ねえよ。」

そんな兄貴分のティーチを見て、マルコはため息を溢した。今更減量をしたからといって、現在のティーチを『一』が見てしまっているのだ。まだ一人がこちらに居ないとは言え、遅かれ早かれあの二人に報告が行くのは確実だらう。

それでも何もしないよりはマシかもしれないが、本当にマシなだけで、どのみち制裁が待っている事には変わりはない。

(あー……身体を鍛えておいて本当に良かつたよい……)

そしてティーチの、このダイエットが成功したのかどうかは、わからぬ。

閑話　IF未来設定 ようこそ楽園へ（後書き）

こちらは元々知り合いへの捧げ物でした。
実際の設定とはかなり違っていますが、お楽しみいただければ幸い
です。

第2部 君が為惜しかりやつしゆれく（前書き）

第2部開始です。

第2部 君が為惜しかりやつしゆれく

蒼い、青い、碧い

海の色ではない

空の色ではない

優しく、包み込む、アオ

白い、シロイ、しろい

雲の色ではない

綿の色でも、絹の色でもない

何処までも恐ろしいまでの強さの象徴

幼い頃の記憶を搔き集めなくとも思い浮かぶ美しい2頭の獣

あれから既に20年以上経とつとしても、マルゴとトゥイーチは決し

て忘れない誓つた。

「おーい、マルコー！オヤジがよんでもつぞーー！」

「…ああ、今いくよー。」

あの幼い頃に出会った、エドワード・ニューゲードが率いる白ひげ海賊団に入つてからもうすでに20年以上が経過していた。

あれから身長も伸び、筋肉も付け、幼い頃に良く頭に拳骨を落としていたあのヒトよりも、大きくなつたと思う。強さはわからないが、少なくともあんなパワーはないけれど。

ティーチもマルコよりも大きくなつて今では344cmにもなつていて、ほんの少しだけマルコは悔しいとも思うし、羨ましい。しかしあまり大きくなつても身長差が出来てしまつ為今のままでいいかと思い直すようにしていた。

最初のことは反発して暴れまくつていたが、今では白ひげの事はオヤジと呼ぶくらいに尊敬しているし、父親として好意もある。でも本当の家族のことは、いまだに誰にも言つていない。

〈人間が来る前に、逃げるんだよ〉

あの言葉は、未だに一人の心の中に残つている。そういうものが存在するということは、公言するべきではないのだと暗に自分等に示していた気がしていて、どちらからとも無く口にしないのが暗黙の了解となつていた。

「オヤジ、呼んだかよい？」

「おう、気候が安定してきたってんで次の島が近えそつじやねえか。ログがさつさと溜まる島ならいいんだがな。」

「やうだない、一応島の規模とログの長さを下調べしてくるよ。」

「おう、行つて来い。怪我しねえで無事もどつてここう。

白ひげの言葉に、マルコは苦笑を漏らしながら偵察をするべく部屋を出る時に振り返り、「」と言つた。

「オヤジ、俺あ不死鳥だい。怪我なんざあつといつ間に治つちまつよい。心配するだけ無駄だい。」

その自嘲めいた言葉にも聞こえるそれに、白ひげは眉根を寄せたままマルコの背中を見送つた。
実際マルコは自嘲などはしていない。

最初は九尾になれる実でなかつた事に落胆したものだつたが、蒼く熱さのない炎は彼の人を思い起させるものであつたし、不死鳥へはまるで「ヒトではないナニカ」になつたよつた気分にもさせてくれる。

少しでも彼のヒトに近づきたいと考えるマルコからすればどちらも有難いものだつた。

同じく、ヤミヤミの実を食べたティーチも人外といつていいいだろう。実を手に入れたのはサツチだつたのだが、マルコとティーチは土下座までして譲つもらつた。

本来なら、実を手に入れた者が食べる権利を得るのだが、恩人のために何としても強くなりたいと渴望する一人に、結局折れたサツチが譲つてくれたのだ。

その代わり暫くオヤツは抜きになつたが、それは名目上でちゃんと裏でティーチの好物のチョリーパイをくれたりしていた。

「ティーチ、これからちょいと出でくるよ。」

「お、偵察か？」

甲板へ出ようとしたところで丁度出くわしたティーチへ、これから偵察へいく血を伝えれば頷きながら見送ってくれる。

それは昔からの習慣で、偵察へいくマルコをティーチは仕事がない限り見送ってくれる。一人は血の繋がりは無いが兄弟で、運命共同体のようなものだ。

白ひげの元に集つた兄弟達とは違う、本当の兄弟。この絆の強さは白ひげでさえも知っている。

燐光を発した蒼い羽が燃え上がりマルコの姿が人から不死鳥へと変化する。ティーチはそのマルコの姿を見るのが好きだった。見るたびに、あの人達に近づいたと感じることが出来るからだ。

そして、マルコが舞い上がり虚空へ消えてゆくのをいつまでも見守つていた。

君が為惜しからざりし命をへ2

マルコが偵察へ出かけてからしばらくして、ニュース・クーが新聞を配達しにやってきた。それを受け取りお金を渡してから、何気なしに手配書を開いたティーチの双眸がまん丸に開く。

「はあ？！ちよつ！マルコー！！早く戻つてこーい！！！」

思わず握り締めた手配書、そこにはかつての記憶のままの2頭の獣の姿。

〈毒婦・ウメキチ 3億4千万ベリー〉

〈魔狼・セイ 1億9千万ベリー〉

罪状：天竜人殺害

大きさ、強さのスケールでのかい一人（？）は、犯す犯罪の規模も（ついでに懸けられた金額も）やはり半端なくでかかった。

「つてまでよ……？本性で賞金つてことは人型だと問題ねえってことか？……うん、あの二人なら完全犯罪もやつてのけるよな。うん。」

思いも掛けずに恩人の手配書を見てしまったため、いつになく取り乱してしまったティーチだが、この手配書での二人が捕まる確率が低いことに気がついたのだ。しかも姉さんにいたっては本名である〈サキ〉ではなく通り名だ。

いつもあの姿でいれば目立つことこの上ないし、潜伏するにも場所に困る。そうなれば必然的に人型になる。

資金が心配にもなるが、己らに持たせてくれた荷物は服の他に、

金の板や水晶、瑪瑙や珊瑚といった宝石などだった。

それは金だけは現金に換えたが、その他の石は今も使わずにとつておいてある。つまりそれくらいなら、簡単に手に入るということなのだらう。

今思えば、地上げ屋の事務所からもお金を奪つてたりいろいろやつたから、あの時家に押しかけてきたんだろうと思う。

く人で無しゝつまり人間ではないから、人間の法に縛られずに犯罪にも手を染める。とはいへ、あの人間たちは悪人だつたらしいから、姐さん達はこちりで言つといふの「ピースメイン」に該当するのであらう。

（馬鹿騒ぎや酒が好きで、夜通し騒いだりしてたもんなん……。そのくせ餓鬼だつた俺等と一緒にになって全力で遊んでたし……）

思い出せば思い出すほど、あの楽園にいた妖怪達は海賊に、この白ひげ海賊団と良く似ていた。血の繋がりがなくとも家族のように身内に甘く、同じだけ身内の敵には厳しく。まさに白ひげの考え方のそれ。

この白ひげの「家族」が心地いいのは、この家族の関係と似ているからだ。もう思つと、無性に楽園の家族に会いたいという衝動に駆られた。

（そういうや、樂園つて意味教えてくれたのはキムの兄ちゃんだったなあ……）

キム兄ちゃんと懷いていたのは、赤い髪をした青年で鶏が苦手な精靈だつた。オキナワというところから移り住んできたらしく、庭に植えてあるガジュマルの木の下でよく昼寝を一緒にしたものだつた。本性はガジュマルの木精で、キジムナーというらしいが子供にはうまく言えなかつたということで、「キム兄ちゃん」と呼ばせてもら

つていた。

あの家は、自分たちにとつての「ニライカナイ」なのだと教えてくれた。ニライカナイは理想郷、楽園なのだと聞いて納得してしまったのだ。

生まれた島で孤児となり、マルコと一緒に残飯をあさる日々。孤児院はあつたけれどそこは裏で奴隸販売をする競り会場の隠れ蓑だった。大人たちに見つからぬように生きなければならない日々、目に見える大人はすべて敵だった。

そして島がモーガニアの襲撃を受けて壊滅し、大時化での海岸へ流れ着いた。

ご飯がたくさん食べられて、みんなに可愛がられて、叱ってくれて、たくさん遊んで…人間はティーチとマルコしかいなかつたけれども、人間でないものたちから受けた愛情は本物だった。

「会いてえ…なあ」

手配書を眺めながら、そつと咳く。マルコは未だに梅吉姫さんを嫁にするつもりでいるし、この手配書をみたらきっと喜ぶだろう。この世界にいると判れば十分。昔お守りにともらつた爪でビブルカードを作ってしまえばすぐに探し出せる。

そこまで考えてティーチは、早くマルコが帰つてきたらしい、と空を見上げながらにんまりと微笑んだ。

君が為惜しからざりし命をへる

ティーチが逸る心を抑えつつマルコの帰りを待つて、2日後の夜に偵察から帰ってきた。それをいつもよりも浮き足立った様子で出迎えるティーチに、マルコが訝しげに尋ねた。

「ティーチ、どうしたんだい？なんだかいつもより嬉しそうだねい：何か良い事でもあつたのかよ。」

「ゼハハハっ！まあ先にオヤジへ報告してこいや、マルコ。その後で俺の部屋に来い、話がある。」

何かを企んでいる様な表情をして、大きな腹を揺らしながら楽しげに笑うティーチにマルコは釈然としないながらも了承をして、白ひげの元へと向かった。

「オヤジ、今戻つたよい。」

「おお、帰つたかバカ息子」

「オヤジ、バカは余計だろい？あー次の島なんだがねい、口グが溜まるのに2ヶ月かかるらしいよ。秋島で規模はまあまあだが、海軍の支部はなし、この白ひげの艦隊で行つても問題はなさそうだい。」

「

白ひげのからかいも軽く受け流したまま報告をするマルコに、その頭を撫で付けてスキンシップを図る。これも日常のことで、白ひげのチョッカイは幼少の頃から受けている妖怪たちの揶揄に比べれば、子供染みていて一々反応するのも大変だつたりする。やつてる本人は何かしら反応を返してほしいのだろうが。

自分の子供を構いたくて仕方のないという表情をだされれば、マルコも三十路を過ぎても嬉しいし、くすぐつたい様な気分にもなるの

だが。いつまでも幼児扱いはいががなものかとも思つのだ。

(ついで言つても、オヤジからみりやいくつにならうが「子供」なんだろうがねい…。)

彼の人から見ても自分は「子供」なのだろうか…と、少し落ち込みながら報告を終えて、ティーチの部屋へ向かおうとした途中で、四番隊隊長をやつているサッチに出くわした。

「お？マルコじゅねえか。偵察から帰つてきたのか？お前飯は？」

「よい。」

「いや、よこつてお前、どうちよ。」

気の良い性格で髪型のセンスはともかく（サッチから言わせればマルコに髪型のセンス云々は、言われたくないだろうが）隊の関係なく人望が厚い人物である。

世話好きで性格は良いのだが、快樂主義の節がありしそう悪戯を仕掛けてくるというはた迷惑な一面もあつたりする。

自分で食とは快樂である」と自己主張するだけはあり、コックとしての腕も最高級、厳つい顔に傷というマイナスな面も、悪戯小僧のような笑顔で相殺されてしまうのだから憎めない。己のことを良くわかつているのだろうサッチを、内心マルコは隠れナルシストなんじゃないのかと疑つていたりする。

「食つてないよい。」

「キッチンに夜食置いてあるから食つていいぞ。ボンゴコレゾットが鍋に入つてて、前菜とデザートは簡易保温棚、コーヒーはセルフな。」

「よこよーい。」

だから、よじゅわかんねえって！と、笑いながら片手を振つて去つていくサツチの背中を見送つて、先にキッチンに行きトレーをもつてティーチのところへ行こうと考えを改めると、その足をキッチンへと向けた。

恐らく持つていけばティーチもデザートは食べるであろうと踏んで自分のトレーと前菜とデザートだけを乗せたトレーの2つを持つてティーチの部屋へと向かつ。

「よーい、ティーチ、あけてくれよ。」

「おう、お？ それ、今日のデザートじゃねえか。うまかったんだよな、それ」

マルコからトレーを受け取ると中へと促して、隠し棚から酒瓶とグラスを2個取り出す。それをみたマルコは普段は眠そうに細められている目を見開いて、ティーチを見た。

「キルシュヴァッサーじゃねえかよ。それ、前に特別なときだけ飲むつて言つてなかつたかよい？」

「まあまあ、いいから座れって。」

本当に何があつたんだと、盆の邊を擦りながら勧められた椅子に座るマルコに、ティーチは昔寝物語で聞いた白兎を追いかける少女が出来つたネコの様に、口元をニンマリと歪めて笑つた。
はぐらかされたまま、しぶしぶ食事を始めるマルコに、次の島のことなど当たり障りのないことを聞く。そんなティーチに、次の島の事を話し出すマルコ。

「次の島は温泉があるらしいよ。紅葉もきれいだつたし、海軍の代わりに島の自警団がいるらしいが、海賊でもちゃんと金を落としていくだけなら問題ないつていつてたよ。」

「へえ、変わったんなあ…。お、俺達にやありがてえ話だがよ。」

リゾットを食べ終わったマルコにキルシュヴァッサーをグラスに注いでやつてから、徐に2枚の手配書を差し出した。その表情は少しだけ涙ぐんで、普段の毛むくじらな顔ではなく年に似合わない幼い表情で。

「せつと、俺達も行動できるようだ。」

君が為惜しからやうじ命をく4

差し出された手配書を手にしそれに田を向ければ、再び田を見開き座つていた椅子から勢い良く立ち上がり、手配書とティーチを交互に見つめるマル口。

悪戯が成功したかのように喜びながら、自分のグラスの中身を飲み干して笑い出すティーチ。先ほどから何かを企んでいたような顔をしていたのは、このことだったのだ。

「て……ティーチ、これ……」

「ゼハハハハハハ！ 流石は梅吉姐さんと、にいちゃんだよなあ！ やることのスケールがちげえよ。ま、大方身内の誰かがアイツ等に連れてかれたかなんだかで、やっちはまつたんだろ。」

基本面倒事の嫌いな彼女のことだ、それくらいのことでないと動きはしないはずだと笑いながら、空になつたグラスに新しく酒を注ぎ足す。

彼女達が賞金首になつてしまつたのは残念だが、逆に口達もその首にかなりの賞金が掛かっている。そこはお互に様といつやつだ。

「…………そんなことよつよい。なんだいーこのく毒婦へつてえのは！ あのヒトのどじが毒婦だつてんだいー！」

「おま、最初の着眼点そこかよ。」

飲んでいた酒を噴出しそうになりながら、海軍のつけた異名に激昂しているマル口に突つ込みを入れるティーチ。てっきり、彼女達の動向がわかつた喜びから驚いたのかと思えば、どうやらやうじではなかつたらしい。

昔からそうだったが、どうもマル口は着眼点が常人とは違うようだ。

「当たり前だい！大体毒婦の意味つてなあ。騙したり陥れたりする無慈悲で性根の悪い女つて事だろい？それに狐の姿で女つてわかるつて海軍のやつ等一体どこ見てやがったんだい！」

「そういやなんでだろうな。」

「だろい？」

思わず、動物の性別を確認するために海軍はいちいち股座を確認したのだろうか、と勘織ってしまう。だとしたら彼等の掲げた正義の情けなさに泣きそうなものだが。

この世界は人間とは思えない生物が多く存在する為、彼女達のような存在も受け入れやすいかも知れない。殺した相手を食べるたびに強くなるという妖怪は、この世界では最強になるんじやないかと思う。

世界最強の白ひげ海賊団と言えども、彼女等に挑んで善戦ができる保障もない。大量にいた犬神をわずかな時間で食い殺してしまうようなヒトなのだ、唯の人間など蟻のようなものだろう。下手したら単騎でバスター・コール数倍、もしくは数十倍の戦闘能力を出すかもしれない。

（世界政府とか海軍つてバカが多いからなあ……頭が良いやつってのは逆に馬鹿つてことだし……。姐さん達に喧嘩売らねえといいんだけど。）

いくら自分達が海賊だといってもその辺りは心配をしてしまう。能力者や一般人、海賊や海軍という括りではなく「妖怪」と「人間」では絶対的な捕食者と餌でしかない。

人に害を及ぼさないものもいるにはいるのだが、そんな彼等に害を及ぼすものならば手痛いしつべ返しがくる。手を出した瞬間に、殺された天竜人のように危険だと分類される者達がここぞとばかり

に「食事」をしへるだらう。

「……姉さんに、逢いてえよ。」

さつきまで立ち上がつていたマル「は気が落ち着いたのか、椅子に座りなおしサキの「写る手配書」を指先でなぞりながら小さくため息をこぼした。

幼い頃にサキへ覚えた感情は慕情。それはいつか淡い初恋に変化するには時間が掛からなかつた。最初に彼女へ伝えた《およめしやん》といふのは、確か烏天狗から聞いたのだ。

【坊、知つておるか? ヒトといつものは常に側に置きたいものを《嫁女》にして側へ侍らすそだぞ。】

【嫁女とは、およめやんのことだ】

幼いマルコにはサキと一緒にいるために、あの暖かい場所を手離しあくないがためにあんなことを言つていた。

あれから年を重ね年頃の男性としてそこそこ女性とイタシタ経験もあるにはあるが、どうにも恋愛までは発展できない。根本にある理想の女性像と一致しないというのもあるが、結局のところその女性像が理想だけでなく、生身の姿でいると解つているからだ。

彼女だけを思つて女性とそういう行為をしないという選択肢もあるにはあるが、その辺りも烏天狗からの余計な知識が影響していた。

すなわち【床上手になつておけ、籠絡するにしても睦言の一ツも囁けぬ、閨事の下手な男は嫌われる。】

今思えば、3~4歳児になんて事を教えるんだとか、いろいろ言いたいことはあるが、人間の常識の通じない彼等に言つたところで暖簾に腕押しになるだけだ。

彼等の《まー坊逆光源氏計画》は、マル「の気が付かない」ところで

着々と息づき、現在では慕情ではなく、立派な恋心に変貌を遂げていたりする。げに恐ろしきは妖怪の執念。

「おい、マルコ？大丈夫か？次の島で、ビブルカード作れるなら作つちまおうぜ。」

「ん…？ああ、そうだねい。」

急に黙り込み物思いにふけるマルコに、心配になつたティーチが声を掛ける。

昔からマルコが彼女に何かしら思いを抱いているのは知つていたが、幼い初恋をここまで維持させているのがたまに心配になる。そうさせてしているのが、あの鳥天狗たちだと知つているからなおのこと。

彼等がサキに懐いているマルコを、彼女の番にしようと息巻いていたのを知つていたからだ。そこら辺の者に取られたくないから、とマルコを彼女に相応しいように教育していたのも知つっていた。

（鳥のおっちゃん達…本当に悔れねえ…。いや、梅吉姉さんは妖怪だとしても確かにイイ女だろうが。）

うつそりと微笑む鳥天狗の顔を思い浮かべながら、ティーチはキルシュヴァッサーの瓶を片手にため息を吐き出した。

君が為惜しからざりし命をく

無事島に接岸した白ひげの船団は、これから2ヶ月間この島で過ごすことになった。とはいえた船をがらぬきにするわけにはいかないが、順番に船番をするのは変わらないが。

ワノ国に似た様式の町並みに16番隊隊長のイゾウが少し懐かしそうな表情で、景色を眺める。

今日から1週間は5番隊と11番隊が船番ということで、マルコとティーチはビブルカードを作る店を探しに街へとくりだした。しかし、そこで一人は島の住人から大歓迎されるという事態に巻き込まれることになる。

「なあ、ティーチ……こいつあ、なんかおかしくねえかい？」
「だよな。なんで俺等だけなんだ？」

先ほどの通りを歩けば、あちらこちらから声を掛けられ何かしら貰つのだ。まるで「等の子供に対するような態度で」この島にくると皆がそうなのだろうかと思えば、後ろから歩いてくるHースには普通に対応しているためそういうではないようだ。

「おーい・マルコー！ティーチー…ずつりいじやねえか、さつきから物もらつてよー。」

「あー、わかつたわかつた。ほら、食つていいよ。」

「ゼハハハ！本当に二十歳になつたのか～？」

とつぐに成人しているはずのHースが頬を思い切り膨らましながら文句を言つ様子は、はつきり言つて可愛くない。大体185cmもある体つきも筋肉で発達した二十歳の男が、子供のように振舞つても視覚の暴力になるだけだ。

白ひげに入った当初のHースは礼儀の礼の字も知らないようなヤン

チャであつたが、セイ仕込みの教育法で海賊にしては礼儀正しくなつた。それでも食事中に突然眠りこける癖だけは更正をせることはできなかつたが。

結局マルコがもらつたお菓子を貰つて、嬉しげに横で食べ歩いている。

「なんだ？あれ、サッチじゅねえか？」

そのまま石畳の階段を歩いていれば、前方の茶屋でサッチの姿を見かけた。なにやら誰かと話をしているようでは近づいて見ると、濡れた様な黒髪の女を口説いてる。

「悪いんだがね、あんたに付き合つてゐ暇はないんだよ。」

「そ�は見えねえんだがなあ。さつきからここに座つてゐただけじゃないか。」

「しつつこねえ！あたしや遊女じやないんだよー他を当たりなー！」

長い航海で女に飢える気持ちも解らないわけではないが、なんとなく今声を掛けている女性は、やめておいたほうがいいのではないかとティーチとマルコは思つた。

本当になんとなぐだつたのだ、やつ捕つたのは。しかし女性がこちらを振り返つたときにそれは確証に至つた。

(サッチ……そのヒトはやめておこて正解だ。殺されるが……まじで)

「まつたくーつて……おや……。」

サッチの差し出した手をぴしゃりと跳ね除けて、威勢良く啖呵を切り髪を靡かせながらこちらを向いた女が目を見開く。同じようにてーチも女を見てその眼をまん丸に見開いた。

「その匂い…もしかして…」

「まさか…キヌねえちゃん…か？」

「ああ！やつぱりてち坊やとまー坊じやないかあ！坊や達、無事だつたんだねつ？！」

さつきまで声を掛けてきていたサッチを完全に無視した状態で、キヌと呼ばれた女がマルコとティーチに抱きつく。

その目には涙が浮かび、しきりに「よかつた、よかつた」と口にしながら、マルコの頭を撫でて、同じくしゃがみ込んだティーチの顔を撫でて喜んでいた。完全にスルーされたサッチは声も出せずに、呆然とその様子を眺め、その肩を良くなきわからなりに察したエースが叩いて慰めた。

頭を撫でられて嬉しいのかいつもは眠そうな目も和らぎ、淡く微笑むマルコにサッチは悔しげに地団太を踏んだ。しかし、マルコもティーチもサッチのことは完全に視界に入っていないのか気が付いた様子はない。

「完全に俺は無視か？！」「らあ！」

そう怒鳴つて初めて3人は気が付いたというような表情でサッチを見て、完全に視界に入つていなかつたのかと打ちひしがれてしまつた彼の様子に、エースが余計居た堪れなくなつたのは余談である。

君が為惜しからざりし命をへ

「本当に懐かしいねえ。あのおチビ達がこんなに大きくなるなんて。

」

あれからエースが打ちひしがれたサツチを伴つて別行動になると、キヌがマルコとティーチを自分が暮らしているという長屋へと案内してくれた。

話を聞けばやはり、あの時一人だけが逸れてしまっていたらしく皆で搜索したが見つからず、もう逢えないのではないかと思つていたというのだ。

最も、はぐれたのは一人だけではなく何人かの住人も同じようにバラバラになつたらしいのだが。

妖怪であれば幼くともなんとか自力で仲間の元へ帰るなり、喚ぶなりできるが、人間の子供では自力で戻ることは難しいであろうと。それでも、海の妖怪である濡れ女・キヌと一緒に居たということと、本人達が気が付かない所で住民がさまざまな加護を分けていたから海で死ぬということはありえないということから、恐らくどこかで生きているのだろうと。

流石にもう20年以上も経過していれば加護も薄れているが、それでもサキとセイの体の一部を持っていればすぐに彼女達の庇護下の者だと解る。そのため島の住人は一人を歓迎して可愛がっていたのだ。

「そういや、まー坊、お前さんどうしたのさあ。いつの間にかアタシ等と同じ匂いをさせるようになつてんなんてさあ…妖怪でも食べたのかい？」

キヌに聞かれたことにまったく心当たりのないマルコは、出されて

いた茶を噴出しあつになりながらも否定をする。

「よい?...食つてねえよ?...まさか海王類つて妖怪なのかよい?...」

「んな訳ないだろ、もしそうだったら、そこかしこ妖怪だらけになつてるよ。...おかしいねえ...ち坊はともかく、まー坊は昔は人間だつたはずなのにねえ...。すっかり馴染んじまつてるが、確かに匂いがするんだよ。まー坊、あんた急に体の調子が悪くなつたとか、なんか覚えてない?」

「いや、不死鳥の実を食つてからはそんなことはなかつたがねい。」

「それ以前に、なんで俺はともかくなのかが気になるんだがよ。マルコ」

俺あロギアだが、人間やめた記憶はねえぞ。と、笑いながら、出された茶菓子を口に放り込む。確かに少し特殊な体质ではあるが、少なくとも人間であると自分では思つていてるティーチ。

妖怪といわれても、キヌたちの仲間になるので特に異存はないのだが、改めて断言されると少し微妙な心境になる。

それよりも特に不死鳥となつた以外特に目立つた変化のないマルコが、妖怪になつていると言つことのほうが納得できない。

「だつて、妖怪の血肉に触れないと...」

「あ、それだ!キヌねえちゃん、マルコの奴逸れてから直ぐにすごい高熱を出したんだ!その前に梅吉姐さんに抱き付いてたろ?あれが原因じゃねえか?!」

「よい? そうだつたかねい?」

ティーチは健康体だつたので問題はなかつたのだが、白ひげに捨ててから2日も経たないうちにマルコは原因不明の高熱をだしてしまい、実は当の本人はあのあたりの記憶はおぼろげだつたりする。

白ひげと出会う前にマルコは、滴るほどの妖怪の返り血を浴び、他に自身も浅いとはいえ傷を負っていた梅吉に抱きついていた。

そして社に隠れていて安全であったとはいえ、あちこち遊びに行ったり、見事としか言えない様な転倒を披露していたマルコは、常にどこかしら擦り傷なりきり傷なりをこさえていた。

妖怪の血を体内に摂取する方法など経口か体に浴びて皮膚吸収かのどちらかだし、そこに傷があればその比率は高くなる。

住民の加護が働いていたお陰で1週間の高熱だけでマルコの命には問題は無かった。その後1年で悪魔の実を食べたマルコ。しかし、それで気が付くのが遅れた。

そして成長期ということも手伝って、拒絶反応も起さず、いや、實際は拒絶反応が起きていたのだろうが再生の能力で、本人も気が付かなかつた可能性が高い。

その不死鳥の能力でゆっくりと身体が変質していたのだ。人間から妖怪へと。

「いいんだか、悪いんだか…わからねえな。しかも不死鳥の能力で体の不調はすぐ直つちまうし…気が付けねえわけだ。」

「便利なモンだねえ。そのくあくまのみつてやつは…ヒトでも簡単にアタシらみたいな能力を手に入れられちまうんだから。」

「なんでも便利ですませるキヌさんもすげえよい。」

すっかり冷めてしまった焙じ茶の湯飲みを見詰めながら、ティーチがぽつりと呟く。

「でも、納得できたなあ。」

中心になつてく遊んでくれていたのは鳥天狗、つまり有翼。マルコは不死鳥になつても、能力に振り回されること無く自在に飛んで

見せていた。つまりはそういうこと。

（実際に飛んでるコツを身体に叩き込まれてたようなもんだもんな。
そりゃ簡単に飛べるようになるわけだぜ。）

子供の柔軟性故のものと思われていたが、実際はお手本を嫌という
ほど見てきたからだと思い出した。なにせ鳥天狗は、風を使った攻
撃の他に蹴り技に長けている。

思い起こせばマルコの戦闘スタイルも、腕が翼になってしまふため
足技がメインだ。

「俺は嬉しいけどねい。皆の仲間入りだい。」

当の本人であるマルコは嬉しげに茶を啜る。其れを呆れたように笑
いながら見ているキヌと曰があつたティーチは、同時にため息を零
した。

君が為惜しからやうし命をくへ

「やういや、ここの島は皆が住んでるんだやうへ、姐さんたちも…こるのか？」

そう、キヌたちがこの島に居るならばと、ティーチが恐る恐るキヌへ尋ねる。隣に胡坐をかけて座るマルコも表情を引き締めてキヌを見詰める。

だが、その返答はなんともあっけらかんとしたものだつた。

「ああ、梅吉さんだらうへ、ちよいと前まではここの代表をやつていたんだがねえ。やめちまつて今は隠居しつつ次期く調停者ゝの育成やつてるよう。権兵衛名が知れ渡つちまつたからねえ」

「それつて、賞金首になつちまつたからか？」

「よく判つてるじやないか、てち坊や。天竜だかなんだか知らないがアタシ等に喧嘩売つてきやがつたんだよ。」

芸者見習いの子をさらつて行きやがつたから、皆で暴れてやつたのさあーと楽しげに笑うキヌ。だがその眼だけは笑つておらず、その瞳孔は縦に割れていた。

「知つてるだらうへ、ここの島には海軍の支部はないのさ…。密の相手をするのは大抵芸者。闇事を希望されれば遊女が相手をするんだがねえ…あいつ等はまだ座敷に上がれない見習いを無理やり手籠めにしようとしたしやがつた。」

急須に新しい茶葉を入れ、火鉢の上に置いてある鉄瓶からお湯を注いで、ちょうど良い温度のそれを湯のみに注ぎ足せば鼻腔をくすぐる馥郁たる香りを放つ焙じ茶。

それで舌を湿润させながらキヌが話したのは、彼女達が賞金首になってしまった経緯。

「海軍のやつらも礼儀がなっちゃいない。お役人ってえやつは、権力を笠に着るような屑が多いからねえ。芸者も遊女もあいつらからしたらく媚婦ゝなんだとか。そんな事言われて我慢できる奴等はこの島にはいやしない。だから追い出してやつた。」

この島は元々の楽園の住人以外にも、あの世界で行き場をなくした世界各国の仲間が移住に来ていたらしい。その他にも魚人も多数隠れ住んでいるという。この島では魚人であろうと、く人間くの括りに入ってしまうし、外見だつてもつと凄いものがいるから差別などをするはずもない。それ故に安息の地として住み着くものが後を絶たないのだそうだ。

容姿が人間に近いものは商いをし、それ以外のものは島で隠れ里のようない集落を作り、特産品を生成し卸す。

その中でも商いの才能は無いが、歌が上手いとか踊りが上手いといふものにも仕事を与えるために考案されたのがく芸者と遊女くだった。

その振り分けも各自の能力などによつて分けられていて、主に人間の精気や生き血等を糧にするタイプは殆どが遊女へとなつている。サキュバス等はその行為 자체楽しんでるので構はないのだが、殆どの者は幻覚を見せて終わらせるのだという。その隙にこちらは食事を済ませるという寸法だ。

キヌも最初は遊女を考えていたのだが、この島が裕福であるが故に海賊の襲撃を受けるため、そちらで食事が可能だからやつていないのでといつ。

「ま、最終的にはその天竜何某が、その子を気に入つて何人目だかの嫁にするとかいいだして連れて行つちました。まだあの子は付喪

神になつたばかりの、子供だつて言つのにさー。」

そこへ調停者へとなつたサキが九尾の姿で追いかけて行つたらし
い。あとからやつてきたセイもかなり暴れたのだろうが、サキが天
竜人を食い殺してしまつた。連れ去られた見習いが一人の名前を呼
んでしまつたため、名前もばれてしまつたのだろうとキヌが言う。
念のため記憶を改竄したのだが、それを免れ逃げ延びた者が海軍
へ情報を流した可能性もある。

「終わつちまつた事は仕方ないけどね。そんなもんだから二人は、
この島の中心部にある宿の離れで隠居生活してるよ。」

元々浮世離れした御仁だからたいして気にしてないがねえ……と言つ
が、マルコやティーチからしたら心配で仕方がない。

「キヌねえちゃん……一人のところへ連れてつてもらつていいか？」

確かに世話にはなつてはいたが、これだけの年月が経つていれば、
会いたいと思う反面、会いにくいという感情もでてくる。マルコに
いたつては恋愛感情も絡んでくるから余計に複雑そうな表情だ。

「何言つてんだい。坊や達なら宿に行けばすぐ案内してもらえるさ。
なんせあの宿は、猪の旦那が夫婦で経営してるし。」

「たぬきのおっちゃん達が？！」

あの飄々とした好々爺夫婦は良く一人を可愛がつてくれたし、
良く覚えている。そういうことならと長屋を後にし宿泊施設である
「幻燈樓」へと足を向ける。石造りの灯籠が続く石畳を少し緊張し
ながら上つていけば、通り沿いの店やすれ違つ住人達からほほえま
しげな笑顔を向けられる。

「お、」隠居に会いにいくのかい？喜ぶよ

「元気な顔を見せておあげよ」

会つたことのないものが殆どだといつのに、まるで自分達の子供のように接してくれる彼等。幼い頃に戻ったような感覚に、マルコ達はお互い顔を見合させて、笑いあう。次第にその足取りが軽くなつて行く。

「行こう、マルコ」

「よー！」

君が為惜しからざりし命をく

石段を登りきり眼の前に広がるのは、燃える炎のような鮮やかな紅と、眩い黄色の洪水。あの家で見た紅葉と同じ色。それに圧倒されつつ宿の玄関へと歩み寄れば、宿の中から見覚えのある好々爺が笑顔で現れる。

「おお、お帰り、おチビ達。ようやつと帰ってきたねえ。さ、中へおはいり、疲れただろう?」

甘い物でもあげようね。と、あの時と同じ人のよさそうな顔で、8時20分の時計のように田尻を下げる手招く男。

〈お帰り〉

その言葉にもう三十路もとうに越えた良い年した男が、一人して顔を皺くしゃに歪めて、笑う。

「たぬきのおっちゃん…た、ただいま!」

「相変わらず、おっちゃんは変わらないねい…やつと帰つてこれたよい!」

感極まつたかのように、170cmもない老人に思い切り抱きつく二人の肩を、優しく叩く。嬉しくて嬉しくてむせび泣く二人、幼い頃に離れたくて離れたわけでなくして。サキの作ってくれた門を潜り抜けたらみんなと離れていて、一人だけで…。

寂しくなかつたわけがない。白ひげが幾ら息子として迎えてくれたと言つても、皆家族なのだと分かつても。

彼等が与えてくれた愛情を忘れない、忘れるはずがないのだ。

二人で中へ入れば、女将のタキが待ち構えていたかのようにティーチを抱き締めてくれる。

年甲斐もなくボロボロに泣く一人に、老夫婦も笑いながら同じように涙を流していた。

「なんだい、お前達、良い年して情けないねつ。ま一坊も相変わらず泣き虫だし、お前様までみつともない！」

袂で涙を拭いながらタキが言えば、お前こそ泣いてるじゃないかと言い合いになり。その掛け合いすら懐かしいと、マルコ達は笑った。手拭いで顔を拭かれて、離れへと案内される間、マルコとティーチは幼い頃のように互いの手を握る。帰つて来れたという安堵と、あの人達に会えるという高揚感で手が震えるのを抑えたくて。その様子にタキが微笑ましいと笑む。

「相変わらず兄弟仲がいいねえ。安心したよ。」

さ、着いたよ。と案内されたのは、宿の一一番奥まつた場所にある離れの一室。

茅葺きの離れは周りを竹やぶに囲まれて、入口しか見えない造りになつており、隠居するには詠え向きのものだった。

先を促され扉に手を掛け引戸を開けば、途端に紫煙独特の香りが鼻孔をくすぐる。

その香りに、マルコ達の動きが止まる。

間違いなく、この先にあの人人がいる。そう思つのに身体が動かない。

「どうしたんだい、わざとお入りな。私に逢いに来てくれたんだ
わづへ。」

耳に響く、独特な巻き舌の口調。堪らなく一人は同時に駆け寄つて
叫んだ。

「姐さんっ！」

「つるさこっ！」

その瞬間二人の頭に強い衝撃が襲つた。ティーチに至つてはロギア
だというのに、踞り悶絶するこの威力。

「こつにいちやああんっ」

「デカイ団体して泣くな。やかましい。抱きつけば、暑苦しい。中
身は成長しないようだな、全く情けない。」

目の前には紺色の作務衣で腕を組んだセイの姿。心底呆れたように
見詰める容姿は昔のままだ。嬉しさにティーチが抱きつけば、その
額を面倒くさそうに押しのけてくる。

その相変わらずな様子も、ティーチからしたら嬉しくて仕方がない。

君が為惜しからやうし命わく（前書き）

感想などを聞かせていただけると嬉しいです。

君が為惜しからざりし命をく

額を抑え押しのけられても一向に離そとしないティーチを、終いにセイが蹴りを入れて突き放す。一見見るとなんとも乱暴に見えるが、それでも踏み止まれる程度に力加減をしているとか、それ以上は突き放したりしないところとか、幼いころには見えなかつたセイなりの譲歩。

性別は女なのに筋肉質で抱きついたつて女性らしい柔らかさも丸みも無くつて、性別以外は本当に「兄」であるセイをティーチは心の底から尊敬して慕つていた。ティーチ自身の礼儀作法に厳しく少し苦労人な部分は確実にセイの影響を受けているといつていい。

「まったく団体ばかりで中身が成長してない餓鬼が。
「でも、にいちゃんとだつて嬉しそうにしているよ。」

「ふん」

ため息とともにセイが言えば、其れに対してもマルコが嬉しそうに言い返す。普段無表情で感情を表に出さないだけで、ちゃんとセイも再会を喜んでいるのだ。ほんの少しだけれど、その瞳が和らいでいる程度の差はあるけれど。

「そろいえば、てち坊。キヌからの早文で聞いたんだが鳥が色々と画策してたらしいな。少し顔を貸せ。」

「お? 鳥のおっちゃん達のつて……ああ。了解。」

いきなり何を言われたのかと思えば思い当たる節はいくらもある。おそらく鳥天狗の「まー坊逆光源氏計画」のことだろう。ティーチは片棒を担いでいないので、大方証人が欲しいといったところか。キヌの早文の内容は知らないが、凡その見当は付く。

「今夜は焼き鳥か水炊きにでもするか。」

（うわあ、鳥のおっちゃん達、『愁傷様』！でも俺は悪くない！）

口元だけで笑みを形作るセイに、ティーチは引き攣りながらも必死に頷く。ここで逆らつたとしても余計なくトバツチリを喰らうだけだと、昔からの経験で十分判っている。いくぞ、と刀を片手に離れを出て行くセイの後ろに付いて行くティーチ。

「お前だけでも姐さんに会つて来いよ。俺あ、にいちゃんとちょっと行つてくる。」

「よ、よい。」

サキと逢えるのは嬉しい、しかしティーチがいないのでは心細い。そんな感情が表情に出てしまっていたのだろう、セイが振り向く。ヤリと人の悪そうな笑みを浮かべた。

「どうしたチビ。前のお前なら、ねーちゃーーとかいつて後先考えず突つ込んで抱きついていたろうに。歳食つて姉さんの所に素直にいけないか？ああ、それともあれが、惚れた女だから逆に逢いにいけないってやつか？意外と初はじなんだな。」

「そ、そんなことねえよ！」

「お前な、そんな面おもてで説得力がないんだよ。遊びであの人に手を出すなら自分が斬つて捨てるが、本気で添い遂げるなら何も言わない。本人達の意思だからな。いくぞ、てち坊。」

そう言つてティーチを伴い旅館の中へ消えていくセイの背中を見送つてから、マルコは離れの中へ入つていく。玄関でサンダルを脱いで廊下を奥へと進む。歩くたびにキュツキュツとなる廊下に、心拍数を上げながらこれは侵入者が直ぐわかるなど、頭の片隅で冷静

に考えていた。震える手で障子を開けば明かりのない部屋の中、明り取りの窓から差し込む日の光を受けて、こちらに背を向けている女の姿。

先ほどまで煙草をのんでいたのか、脇に置いてある煙草盆に煙管が置かれている。畳の部屋の中へと足を運び、後ろ手に障子戸をしめるとそこで声が掛けられた。

「一体、どこをほつつき歩いていたんだい？ 口の迷子にしちゃあ、性質が悪いじゃないか、まー坊。」

衣擦れの音をさせて振り返る彼女の姿は記憶のものよりも華奢で、小柄だった。もちろんそれはマルコが大人になつた為に、そう見えるのだろうが。

「只の迷子じゃ、つまらねえだろい？ 序にあちらうち見聞してきただい。」

「おやおや、そんな憎まれ口を叩けるほどには成長したのかい。やっぱり人間つてえのは成長が早いもんだ。」

ゆっくりと歩み寄りつつ、口元を緩ませながらさう言えれば、面白げにサキがませつかえす。

幼いころから焦がれていた彼女が目の前にいて、思わずマルコはその腕を伸ばし、あの日の幼い頃の自分のように、サキの目の前に膝を付きその細い身体に抱きついた。その胸に頭を預けて、まるで母親にすがりつく幼子のような様子に、サキは何も言わずにその背中を撫でながら、抱きしめ返した。

「よく、無事でいてくれたね。」

静かに、囁く様な小さな声でサキが呟く。それにマルコは、ただ頷

いていた。

「逢いたかった…。姉さん、逢いたかった…約束を守るために戻つてきたよ。」

「おやおや、こんな隠居の婆に何をお言いだい。」

くつくつと笑い出すサキに、マルコは一旦サキから離れてその切れ長の眼を見詰めながら、緊張した面持ちで再度言う。

「姐さんは、よい。ガキの戯言と思つかもしないがねい…俺あ本気だい。」

「私かりやすれば、あんたは子供なんだがねえ…。」

「一朝一夕で姉さんが俺のモノになるなんざ、端から思つてねえよい。長期戦で挑むからその心算でいてくれよい。」

海賊は諦めが悪いんだい。と子供の頃からは思いも付かないような笑みを浮かべるマルコに、サキは内心一体どんな人生を送つてきたのだといふのかと、少し心配になつてきた。

幼い頃のあの愛らしく懷いていたマルコが、悪人顔とも言えるような笑みを浮かべ己を自分のものにする等と言こ出すなど、一体誰が予想できようか。

「ねえ、まー坊…」

「マルコ、だい。なあ、ちゃんと名前を呼んでくれよい。」

サキよりも大きい団体をしているといふのに、その顔を覗き込むようにして強請るのは傍から見れば軟派な男のようにも見えるのだが、その顔つきが真剣なもの故に、いつまでも子ども扱いをしないで欲しいという本人の意思表示なのだろう。

また決して誰もが振り返るほどの美形というわけでもないが、比較

的整った顔つき。鍛え上げてあるその肉体などで、少なくともそういうたく「場数」は踏んでいるのであらうと容易く看破できる。応えないサキを逃がさぬように覆いかぶさるようにして、顔を近づけ囁くように優しく強請る。その言葉や声は甘く低いものではあるが、その眼は獲物を狙うかのような雄のもの。

「なあ……」

その厚みのある唇が、長い髪に隠されたサキの耳元に触れるか触れないかの位置になった瞬間

「まー坊…あんた、その後頭部…どうしたんだい？」

「……よい？」

突然の質問に固まるマルコへ、首を巡らせて正面から見詰めるサキ。その表情には照れや羞恥などは一切浮かんでいない。

正直な所、素人の女であれば、先ほどのマルコで簡単に落せたであろう。だが、サキとて色を売らぬとはい、幾多もの男を相手にしてきた商売女なのである。あの程度の「色香」など簡単にかわす事など朝飯前。

「伊達や酔狂で私も芸者をやつてたんじゃないんだよ、坊や。人間がこの妖狐を誑かすなんざあ…青い、青い……」

切れ長の目を細めて喉で笑う女に、バツが悪くなつたのかマルコが身体を離して座りなおす。

「俺あ、妖怪になりかけるつて。それも聞いたのかい？」

「ああ、キヌさんから聞いてるよ。でもまあ、このまま放つておいても問題はなかろうよ。アヤカシの血肉を取らずに居れば、いずれ

人間にもどるだらうしねえ。」

幸いにも妖怪はこの島にいる島民しかいないのだ。おそらく幼い頃に血まみれの己に抱きついたから、妖怪化が始まつたんだろうとアタリをつけて。

「人間なんぞ、戻らなくていいよ。姐さんたちと同じ妖か…」

「おやめっ！ 滅多な事を言つんじゃないよっ！」

マルコが妖怪になりたいのだと言い切ろうとした瞬間、サキが其れを凄い剣幕で遮る。怒りのせいか、ほとんど化粧を施していないといつのに薄い唇や目元に朱が差し、まるで紅を施したような色香が立ち上がる。

「いいかい？ 人としての生を全うする方が幸せに決まつてゐるだろう？ 私はね、お前に、く人で無しゝの生を歩ませるために助けたんじやないんだよっ！」

必死にそういう募るサキは悔しげに唇をかみ締め、拳を握り締める。サキとしても、己の懐にいれた子供が、己と同じ妖怪になりたいと言い出すとは予想をしていた。

しかし、今の彼等には己等とは違い、人間の仲間が居るのだ。その彼等が己だけを置いて先に逝つてしまつといつ苦しみを味あわせたくは無かつた。

伊達に江戸時代から生きてきたわけではない。

時代が過ぎてゆくのを見守りながら、その中で何度も戦^{じぐわ}を経験してきた。

人間の子供を拾い育てたのは、初めてではなかつた。慈しみ育てて、戦地へと送り出さねばならなかつたこともある。いつだって人間は脆弱で、わがままで……。何度悔やんだことか、何度己の無力を呪

つたことか……！

彼等が一緒に行動しているということは、彼等が今マルコやティーチの「家族」なのだ。

その絆を崩すようなことはしてはいけない。

「ねえ、まー坊。あんたはちゃんと人間として、生きておくれ……お願いだから……」

淡く微笑むサキの表情に、マルコは鼻の奥がツンと痛くなりながらも、その身体を抱き寄せて胸に抱いた。下心などではなく、目の前の人気が消えていなくなりそうな恐怖が芽生えたからだ。

幼いながらにも綺麗な女だと思っていた頃と寸分の違いも無い彼女。それが意味することにマルコはやつと気が付いた。現在の仲間が老い、逝くのを見送らなければならないということを。

人間という理から外れ、もしかしたら輪廻と枠からも外れ、墮ちなければならぬかもしれない。彼女と「同じになる」ということはそういうこと。悪魔の実のような海に嫌われるなどという生ぬるいリスクではない。下手したら精神を病むかもしれないほどなの……

「でも、姐さんは耐えたんだろう」「耐えるしか、できなかつたんだよ……」

抱きしめた細い身体に似合わない強さ、本性は見上げるほど大きくて、バスター・ホール数十発以上の強さかもしれないが、それでもこの人は「女」なのだ。

この女以上に強くなるのは無理かもしれない（敵になりうる妖怪が居なければ食べることも出来ない）が、離すことなど出来ない。

「俺も耐えられるよ。ティーチだつて人間じゃないらしいじゃないか。ティーチが嫁さんもらえるまでは見守つてやりたいしねい。」

だから人間の寿命じゃ足りないよい、と笑いながら、抱き込んだサキの顔を覗き込む。その唇が切れていることに気が付けば、そのまま何の気なしに、つい己の舌で舐めとつて。

そのままの雰囲気で今度こそ口付けようとなれば、サキの細い指にマルコの厚い唇が押しのけられる。其れでも醸し出す雰囲気は、甘く感じられるような互いの吐息がわかる距離で。

「妖怪の血肉を口にするなと言った矢先にかい？ なんで聞き分けないんだらうねえ。」

その表情は呆れたようなもので、嫌がされたわけではないと判断したマルコが押しのける指を節くれだつた手で、やんわりと包み込んでから、ゆるく微笑みながら再度口付けを試みようとする。と、首筋に冷たく硬い感触が触れる。それに思わずマルコの動きが止まつた。

「本気ならば構わないといったが、無理強いはいかがなものかな？」

「よこ……。」

鳶張りの床が鳴らなかつたといつのこと、いつの間に戻つたのかセイが抜き身の刀をマルコの首筋へと当てている。固まつたマルコに抱きすくめられた状態から、サキがするりと抜け出しながら、マルコの耳元に優しげに囁いた。

「同じになりたければ、精々頑張つて口説くが良いぞ。お前さんがどこまで頑張るのか見物だねえ？ まー坊」

そういうながら笑うサキは、マルコが出会つた娼婦の誰よりも色香

が強く、無邪氣だった。

君が為惜しからざりし命をへー〇

場面は変わつて幻燈楼の大広間、他に海賊も来ていないと「う」とで大広間を貸切ってくれた支配人のニンザエモンにより、白ひげの陸に降りた殆どのクルーが揃つていた。とはいへ、この島の宿は此処しかないので、此処以外に宿泊場所などは無いのだが。

「すげえよな…お前部屋みたか？能力者には能力者用の部屋つて言うのがあるんだぜ？」

「聞いた聞いた！さつきジョズ隊長に聞いたら個室の風呂が付いてるんだろ？他の奴等は大浴場みたいだが…細かいよな。」

そんな事をクルーが話しているのがあちらこちらから聞こえてくる。各自の席の前には大勢の仲居により膳が運ばれ、あちらこちらで酌をしながら会話の相手をしている。荒くれ共の相手だというのに、みな一様に笑顔を絶やさず、なんとも嬉しそうに給仕をしている。そんな中、支配人が女将を伴い現れ、何かを合図すれば、ちょうど白ひげの正面に位置する広間の舞台の幕がひらかれる。

不思議そうに眺める一同に、幕の開いた場所に座りこちらに向かって平伏する女が5人ほど。

「本日は、当宿「幻燈楼」へお越しいただき、誠に有難うございます。折角の宴盛り上げさせていただきたく、馳せ参りました。芸者の「」と申します。以後よしなに。」

中央に位置した女が面をあげて口上を上げる。同じく後に控える女達も面をあげ、各々が楽器を構え樂を奏でれば、それに合わせ扇を片手に与一という女が舞い始める。その洗練された動きにイゾウが楽しげに眺め、舞がわからずとも整った容姿揃いの芸者に男達は

喜んだ。

盛り上の酒の席の中、ニンザエモンは白ひげの元へと歩み寄り、頭をさげた。

「グララ…払つた料金のよりも派手にもてなしてくれるじゃねえか。どういう腹積もりだあ？」

「いえいえ、これは、私共からの御礼でござります。」

「…御礼？」

芸者を呼べばかなりの料金が掛かると説明を受けていたのにも関わらず、こつやつて料金以上のサービスを提供する支配人に後でぼつた来る心算かとあたりをつけていたものの、返つてきた答えに各隊長格のものを含め白ひげは訝しげな表情をする。

「あの子達と再度の逢瀬が叶つたのは、貴方様がま一坊達を救つてくださつた為。こんなに嬉しいことがあります。こちらは私共のほんの御礼にござります。本当に有難うございました。」

そう言つて深く頭を垂れる一人に、白ひげは漠然とではあるが、ここがあの一人の探し人のいる島であつたのかと合点がいった。

「やうか、あいつらの搜してたく家族ってのはあんたたちのことか。」

しんみりと呟く白ひげに、ニンザエモンは微笑んで頭を振つて否定する。

「いえいえ、家族同然として一緒に過ごされておりましたのは、拙宅の『隠居達』でござります。私共はそのお手伝いをしていたに過ぎません。」

「隠居？」

ビスターが酒を飲むのを止め、なおも問い合わせようとするのへ、広間の襖が開かれることにより遮られる。そこに居たのは少々幼い仲居のようだ、一度平伏してからこちらへ歩み寄り女将に耳打ちをする。とはいへ近くに居る隊長格にはまる聞こえなのだ。

「女将さん、ご隠居がお見えに。ご挨拶を…と。お一人もご一緒にござります。」

「まあ、相変わらず仲の良い…。」

仲居と女将が微笑ましいとでも言ひよつに笑顔で、やり取りをすると、開かれた襖から女を先頭に男、そしてマルコとティーチが現れる。見知った顔にクルーだけでなく、サッチやエースも驚いたように見詰める。

「え…マルコ？ ティーチまで…」

マルコとティーチはそのまま酒の席へ戻つてきたが、その視線は女に注がれたまま。

先ほど聞いた「隠居」というのはあの女かと思うも、その容姿は若く、隠居をしているような年齢には見えぬし、付き従う男も女よりも歳若く該当はしないのだが。

「お初に御目に掛かります。私はここ、幻燈楼にて芸者の元締めをしております、梅吉と申します。とはいへ、今では与一に元締めの座もほぼ譲り隠居の身でございます。本日は、そちらの乗組員でございますマルコとティーチをお連れくださいました事、深く御礼を。

「

そのまま深く礼をする一人に白ひげが目を細める。同じように何人かのクルーも訝しげにサキを見詰めた。

「ウメキチってえ名前は、そういうのいるような名前なのか？」

探るような視線でイゾウが尋ねるのへ、サキの唇が弧を描く。

「さて、私はこの名になりましたから随分と経りますが、他には聞いた覚えなどはないですがねえ。何か、私の名前に問題でも？」

そちらへ視線を投げてから、うつそりと微笑むサキに警戒をしたのか懐に手を忍ばせたイゾウを白ひげが片手で制すると同時に、サキの声が聞こえる。

「およし。酒の席で無粋な真似するんじゃないよ。喧嘩ふっかけにきたんじゃないんだよ。」

そちらへ目を向ければ、梅吉^{サキ}の後ろに控えていた男がいつの間にか片手に刀を携えていたのが目に見えて、思わず戦闘態勢に入ろうとしたものの、白ひげから許可が出ないためにイゾウ達も睨むだけしかできない。

「どうか、お前が毒婦・ウメキチか。グララララララッ！確かに度胸が据わってるじゃねえか。と、なると後の奴が魔狼・セイってとこか。」

「おや、こんな小物をご存知とは……」

「3億超えが何をいってやがる。天竜人をやつたそうじゃねえか。」

楽しげに白ひげが尋ねるのへ、サキは口元の笑みを崩すことなく首をかしげて尋ねる。

「天竜人…？さて、そんな奴ここに来ていたっけかねえ？一ーンザエモン」

「さあ？金魚鉢を頭に被つた変な男ならきておりましたな。数ヶ月前にこの島で好き勝手に荒らしていたので、早々にお帰り願つたはずですがねえ。」

支配人の言い草に隊長だけでなくその場に居たクルーたちも目をむいた。この男は何を言つてゐるのだ？

「グララ…そいつ等は何をしたってんだ？」

面白そうに尋ねる白ひげへ、ニンザエモンが、袂で口元を隠しつつ進言する。

「いえね、当旅館の芸者見習いだけでなく、仲居までを海軍の奴等と一緒になつて手籠めにしようといたしましてねえ…。」

その言葉を聞いて思わず近くの仲居を見るクルー達に、仲居たちは動じた様子も無くつくつと、楽しげに笑みを零した。海軍の中にはそういった蛮行を行つるものも居るのは知つてはいたが、彼女達の様子では恐怖があつたようには見えない。

「お客様方は、ま一坊やてち坊の恩人だ。ですから正直にお話いたしますがねえ…」

黙つていたサキが楽しげに一同を見回す。先ほどまで酒の席についていたマルコやティーチもいつの間にかまた彼女の傍に座つてゐる。

「ここの島にや、人間なんぞ数えるほどしか住んでいないんですよ。私も含めて…ね。」

その言葉にハルタやエース達が身構えようとして気が付いた。隊長格や白ひげ以外のクルーがその場に倒れ眠っていることに。慌てて見渡すと舞台に座る女のうちの一人が香炉を片手に扇を仰いでいた。其れを止めようと血氣盛んなエースが飛び掛るが、其れを片手でいなし押さえ込むティーチ。

「ゼハハ…安心しろ、みんなただ眠つてるだけだ。エース、前から言つてるだろ、ちゃんと見極めろと。」

「なんだとつ？！」

必死に逃れようとエースが、周りを見ればイゾウやビスター、ジヨズやナミユール達まで笑いながらこちらを見ている。そのことに余計混乱したエースが叫んだ。

「皆までおかしくなつちましたのか？！」

「誰がだ、アホンダラ！ エース、お前は最初の話を聞いてなかつたのか？」

他の隊長格が落ち着いているのも尤もで、あのサッチでさえ料理に舌鼓を打ちながら女に酌をさせている。未だに理解できていないエースにマルコが説明をしてやる。

「ようはだ、他のクルーには聞かせられねえ話があるから眠つててもらつてるだけで、オヤジ達にどうこうしそうつていうのは一切無いことだい。話の流れで気が付くと思つてたんだがねい…お前の落ち着きの無さには困つたもんだい。」

「むしろ猪突猛進だよな。思い込んだら一直線。」

マルコの言葉を受けてイゾウがからかうように酒の杯を空け、次々

に同意を示す面子にエースも言葉が出ない。

君が為惜しからせつし命をへ11

やつと開放されたエースが頬を膨らませたままその場に座り込む。其を見て白ひげがサキに話の先を促すようなそぶりを見せる。それを受けてサキが話始めるも、いきさか伝法口調なのは仕方ないものなのかもしない。

「私共は、元々この世界にはいない生物、となりますか。人間から
は「妖怪」だとか、「アヤカシ」なんて名前で呼ばれることもござ
ります。別世界の人間に住処を賣かされこの島へ移住してきた次第
で。此処にいるま一坊とてち坊は移住する前に、幼い時分で出会い
まして暫く世話をさせてもらつたんでさあ。ちょいとしたイザコザ
に巻き込まれ、移住の際に離れ離れになつちまいやしたが、本日そ
ちらさんの船に乗つていたお陰で再会と相成りまして。その礼を…
と。ああ、もちろん一人が船を下りる必要はございません。私等は
ここにおりますので、この子達の「故郷」になればそれで結構。
私等は確かにこの子達の家族ではござんしたが、今はそちらさんが、
<家族>で、『ざんしょつ?』

かなり話の内容を端折つてはいるが、ここに弔会できたからそれで十分で、ここに置いていけとは言つ心算もない。といつ思ひは伝わったようだ。

それに対し後ろに控えるマルコとティーチは些か不満げではあるが、反論が出来ないのか何も言わない。それを面白がりて眺める白ひげが自慢げに宣言する。

「確かにこいつ等は全員俺の家族で、息子だ。」

それを聞いて安心したのかゆるりと微笑んだサキが返すように応え

る。

「な、この島はその息子の故郷と思い、ゆるりとお過ごしください。私共がく人で無しゝであれど、一度懐に入れたモノを戻るにすることはありやしません。通常私等の秘密をしつた海賊は記憶を改竄させてもらうか、そのまま餌にさせていただくんですが、そちらさんに限りそれはござんせん。一部例外の場所を除いて自由に回つていただき結構です。」

「一部つてなあ、どこだ。」

「ああ、一部の牧場では女しか入れない場所があるんで。そこは島の住人といえど限られた者しか入れないんでござんすよ。それ以外なら特には問題はござんせんが、牧場や農場、工場などの回りは罠が張り巡らされてるんで、見に行かれんでしたら二ンザエモンか女将、に言つてくださいや、案内のものを寄越しますよ。」

つらつらと島の案内を説明する女に、周りの女達もにここと笑顔で頷いている。海賊からの襲撃も多いということだし、そういうた備えが徹底されていくために怪我をしたくなれば大人しく案内されていた方が賢明ということか。

「あとは、ここにいる人間はいわゆる魚人と呼ばれる種族の方々でして……」

「魚人？」

「ええ、随分と迫害されてたらしくって、まあこんな島ですからねえ。容姿なんぞ気にしゃしない連中しかおりませんから、のんびりとされてますよ。」

魚人であるナミコールが、この島で迫害されずのんびりと過ごさせていると聞いて、嬉しげに頷く。

「代わりに他のクルーには普通の島つてことにしておこしてくれよ。折角ここまでできた楽園が壊されるのは見たかねえよ。」

「ああ、他にや他言はしねえ。そりや保証しよつ。わかつたかつ！」

マル口の言葉に白ひげが同意すれば他の者達も異論も無く。そのままサキとセイは広間から外し、他の面子も割り振られた部屋へと下がる。その広間に残つたのは支配人と白ひげのみ。

「まだ何か、言いたい事があるようだな。」

「よく、お分かりで。」

人の良さそうな表情の支配人は、そのまま白ひげの前に土下座をして見せた。

「貴方様を見込んでお願いの儀ござります。どうか、どうか…梅吉さんを連れて行つてはもうえないのでしょうか。」

そつ言い切つた二ングザエモンの表情は苦渋の決断とも言える厳しい表情を浮かべていた。

「さつきの肝の据わつた女だな。何だつて俺にそんなことを頼む。」

白ひげや隊長達をして臆することなく応対して見せた女。口調は巻き舌で特徴的ではあるが、芸者の元締めをやつていたというだけはあり、度胸と色氣はなかなかのものだつた。ああいつた女といふのは筋を通さないと梃子でも動かないのが常であるのだが、なぜ、自分に託そうとするのかが理解できない。

「この島は、海軍に見張られておりますので、いつ彼女達の存在が露見し捉えられるかわかりません。この島に移住してからずっと身

力を尽くしてくださった彼女を、海軍なんぞにみすみす渡すなどできやしません。これはこの島の住人の総意でございます。そこへ、貴方様があの一人を連れて来てくださった。これは天命といつていい。

どうか、と深く土下座をして頬み込む支配人に、いつの間に現れたのか他の仲居や女将達まで同じく土下座で頬み込む。

「あ…あたしからもお願ひします！」

その中から一際若い女が前へと飛び出してきた。芸者と同じ化粧を施してはいるがまだ17・8といったところか。その少女が、涙を流しながら白ひげに頬み込む。

「あたしのせいだ、梅吉師匠やセイさんまで賞金首になっちまつたんです！あたしがつ！あたしがもっと強かつたらこんなことにはならなかつたのに…つお願いです！」

「小峰！お前は控えておいで。」

「ミニネと呼ばれた少女を支配人が嗜める。その様子に、天竜人が攫い殺される原因となつた芸者見習いが彼女なのかとわかつた。確かに少々幼いが将来有望な顔立ちに、声も鈴を振るような聲音で、邪な男でなくとも男心をくすぐられる様な容姿である。

「あたしが、まだ変化仕立てだから上手く立ち回れなくて掘まつてしまつたから…。だから…」

「変化つてなあ、どうこうことだ？」

なおも言い募ろうとするミニネを落ち着かせながら、支配人へ尋ねれば困つたように説明をしてくれた。

「ミネなどは、古道具などが長い年月をかけて力を宿し変化した妖怪である事。

それは所謂「付喪神」と呼ばれ、ここでは赤子のよつた扱いになるというのだ。

どれだけ年若いのだろうと思えば、大体力を蓄えるのに百年を有し、そこから安定するまでまだ時間が掛かるのだという。コミネもつい10年前に付喪神として変化したばかりで現在は芸者としても、人間の姿で暮らしていくためにも見習いということで修行をしていたのだという。そんな年数はともかく若い少女を手籠めにしようとした、海軍の人間や天竜人に同情などは一切沸かない。

少なくとも話を聞いてる限り非があるのは明らかに向こうであって、彼女達はただ、幼い家族を取り返したに過ぎない。白ひげとて、己の息子が攫われれば白ひげ海賊団全員で取り返しに行くだろう。色々話を聞いていれば、この島はそこらの国よりも統率が取られていて住民が全員家族のような意識があるのがよく判る。

マルコやティーチを仲居達、島の住人全員で可愛がっていて、種族の問題ではなく彼等からしたらあの2人も子供に認識されるのである。

年齢よりも親の気持ちというものは皆共通するものだから、人間とは違う時間の感覚のため、この島の赤子は白ひげよりも年上になってしまつたりするという事実は、この際無視だ。

「俺は構わねえ。マルコのやつあ、どうにもあのウメキチって女に惚れてるようだしなあ。」

「ああ、それは昔からそつでございましたよ。幼い時分から、あのお方を嫁女にすると言宣言されておいででしたからなあ。」

「グラララララッ！そいつあいい。俺あ息子や娘は居るが孫がいねえからなあ。一人二人孫が欲しかったところだ。本人が望むんなら受け入れよう。」

「有難うございます！」

幼いマルコの様子に膝を叩いて楽しげに笑う白ひげ、それに対し再度全員で深く礼をする。

鳥天狗ではないが、妖怪といえど「女」として幸せになつて欲しいと願うのは同じなのだ。幸いマルコはサキに心底惚れていようであるし、当のサキも憎からず思つているのであればそのままくつついてもらいたいというのが本音である。それが家族としての愛情であろうと、なんであろうと上手く纏まつてしまえば男女の仲というものは案外簡単に治まるものである。

君が為惜しからざりし命をへー2

セイが主に作業をする鍛冶場は、地妖精のそれとは異なり日本古来から伝わる形式のものを利用している。

使用している鉱石は同じものだが鍛え方が違つだけで風合いが異なるのが面白いと、時折彼らが作業を覗きに来るほど鍛冶の腕も良い。生前跡取りにと望まれた通り、父親から鍛冶の仕事は幼少から叩き込まれていたが、本人の興味は鍛冶ではなく剣の道だつた。

とはいへ、彼女が剣を抜くことは殆ど無い。なぜなら大抵は蹴りだけで済んでしまうし、剣を使うよりも先に敵を殲滅しなければならないからだ。と、いうのも原因はサキなのであるが。

彼女はその性格からか、喧嘩早い傾向がある。それでも実際に喧嘩をするまでに彼女の舌先三寸で丸め込まれたり、相手にしなかつたりが殆どで、傍から見たらそこまで短気というわけでもない。ただ、彼女が切れるとすぐさま足が出るのだ。

手ならば問題ない。しかし、裾を絡げて蹴りを繰り出すのはいただけない。彼女の普段の生活からしてそうなのだが常に着物で生活をしていて、元々下着というのは腰巻と呼ばれる布を腰に巻くだけで、今で言うショーツ等はつけない。現代社会でも日本に下着が流通し一般に使用されたのは、ここ100年ほどであつたというはご存知だろうか。昔ホテル火災で、着物女性が窓から飛び降りるのを躊躇い大勢が亡くなつたと言う惨事があつた。これは下着をつけていなかつたために、飛び降りて下半身が露出するのを恐れたためと言われている。

そう、サキはいわゆる洋風下着が落ち着かないといって身に着けるのを嫌がつて使用していない。そんな状態で蹴りを繰り出せばどうなるのか。言わずもがな、蹴られる相手は桃源郷を見ることになる。そんな状況にならないように、サキが喧嘩をしだす前に先に出て相

手を倒す為に、セイが得意とする刀より己の脚力を利用した蹴りを利用するようになったのだ。

「そういうや、タベサツチが情けない悲鳴上げてたな…。女に夜這いでもして返り討ちにでもあつたか…？」

思い出したかのように、イゾウがそんなことを言い出し、思わずマルコとティーチが目を見合わせて笑い出した。セイは無表情のままだが、それでも鳩尾の辺りを抑えているので笑いを堪えているのだろう。その様子にイゾウが不思議そうな表情で首を傾げる。

「なんだ？ 何か知つてんのか？」

「知つてるの何も…そりや、逆だ、逆。」

「逆う？ ってえと、あれか、サツチが夜這い掛けられたってことか？」

「冗談だろ」

全くもつて信じていないイゾウに、必死に笑いを堪えようとするが堪え切れてないマルコが噴出し、涙を浮かべながら事の顛末を説明してやる。

「くつ芸者見習いの女がいてよ。昨日サツチに酌をしてたんだが、そのときにサツチに一目惚れしたらしくてよい…つふ…くく…つ。いや、すげえ女だい、Hース以上に猪突猛進で夜這いを掛けで逃げられたつて、さつき姉さんに報告きてたつよいつ

そこまで説明して我慢できなかつたのか、腹を抱えて笑うマルコに、ティーチも涙拭いながらひいひいと笑う。

「あとで、サツチに感想でも聞いてやれ、きつと話してくれるぜ。ああ、おかしいたらねえや…。あのサツチが…」

「まあ、後でからかいついでに聞いてみるさ。あのサッチが逃げるつてどんけ凄い女だよ。昨日の女って結構な上玉だったじゃねえか。」

「いや、流石に俺もあの勢いには負ける。ありやあ、サイクロン並だ。」

「全くだい。ティーチも上手い」と言つない。」

そんな話をしつつ、いつの間に着いたのか鍛冶場の入り口に着き、4人はその中へと消えていった。

昼時が過ぎ、サキ達が寝泊りをしている離れの隣に設えてある座敷にて、今日も芸者達が稽古に励んでいた。

板の間に15名ほどの芸者達が並び三味線や太鼓の音に合わせて舞い踊る中、舞扇を片手に各自の体勢や首の位置、手の位置を直してやりながらサキが歩く。その壁際に正座し、座るほかの芸者達もその姿を見逃さぬよう見詰め、少しでも上達しようと切磋琢磨している。その中に朝に軽い騒動を巻き起こした小峰の姿もあった。

「ほら、首の動きが硬いよ。そんなんじや踊りじやなくて突っ立つてる案山子だよ。もつと柔らかく、動きに遊びを持つて。」

「はい！師匠有難うござります。」

「辰龜たつとき、あんたは音をちゃんと聞きな。動きは合つてゐるのこノンビリしてたんじや、旨と合わないだ奴うへー。」「すみませんー！」

普段の薄らと浮かべた笑みの欠片も無く、真剣に芸を磨くとするサキの姿に、周りの芸者や見習い達も必死に見習おうと待機している者達まで手の動きや首の動きだけでも練習を重ねる。芸者は基本歌と踊り、楽だけで成り立っているように見えるが実際はそうではなく、礼儀作法や話術、そして知性を磨かなければ出来ない仕

事でもある。

この島ではなかなか無いが、密の好みはそれほどま異なるため密の二人に合わせた世情の話や古典などの知識の幅が要求される。ありに言えば、姿だけではなく知性、柔軟性などあらゆる面を磨き高めなければならない。世の男が芸者を口説きたがるのは、その女性としての理想像を具現化しているかのように見えるからであろう。

「本日の稽古は此処まで、みんな、お疲れさん。」

「梅吉師匠、本日もご教授有難うございました。」

板の間に弟子達が全員声を揃えて礼を言いつつ、そのまま出て行く。これから湯浴みをし、着替え芸者としての仕事に就くのだ。それを見送つてから、一息つくと、その横にある窓へ視線を向けてサキが声を掛ける。

「そんなに珍しいなら、中へ入つて見ていいってださつてよかつたんですよ。」

「……ごめんなさい。つい、魅入つてしまつて」

そう、おずおずと入り口へ姿を現したのは白ひげ海賊団のナースが数人。履物を脱いでどうぞ、と言われれば、恥ずかしそうに履物を脱いで中へと入つてくる。サキは隅に置いてある座布団を出して板の間へと置き座るよう促す。

「私らと違つて正座なんて慣れてないでしょ? から。この上に楽にしてくださいな。秋島とはいえ、昼過ぎからは暑くなりますからねえ。ちよことお待ちを。誰かいるかい?」

「はい、お呼びでしょうか?」

「おや、小峰。悪いんだけどね、いらっしゃる方にお茶をお出ししておくれ。」

「はいー只今ー」

いつの間に現れたものか、座布団に足を崩して座るナースの後ろから、「失礼いたします。」と小峰が各々の前に茶を置いてゆく。その茶の横に小さな花型の干菓子が添えてあつたりと、17・8に見える少女のその所作もどこか洗練された動きで、ナースたちもどこかつつとつとした眼差しでそれを眺める。

「「」むるつと。また何か「」ぞこましたら、お呼び下さい。」

「ありがとよ。下がつておこで。わわ、あんな外にいたんじゃ喉もお渴きでしょ「」。」

その嫌味の無い心配りや言葉を掛けるタイミング、容姿だけではない魅せ方にナースであるアンリエッタは背筋に電撃が走つたような感覚を覚えた。外見だけの色気ではない「女」というもの。先ほど若い少女もそうなのだが、仕草一つ、配慮一つで嫌味のない色気を醸し出す、そのゲイシャの凄さに感動を覚えていた。

「ありがとう…。私は白ひげ海賊団でナースをしているアンリエッタよ。お稽古中に覗いたりして「」めんなさい。」

「いえいえ、こちらこそお礼を申し上げたい所ですよ。人様に見られることで、あのこたちの稽古にも熱がはいりますからねえ。お気にせず見に来てやつてくださいな。大抵この時間には、ここで稽古をしておりますから。」

「本当にゲイシャつて凄いのね…。イゾウ隊長から聞いたことがあつたけれど。許されるなら女としてここで修行したいくらいよ。」

「おやおや、十分お綺麗でいらっしゃるつてえのに…まあ、女は欲張りなモノで「」ざこしますからねえ…」

からかい口調の梅吉に、アンリエッタだけでなく他のナースも微笑

みながら、肩の力を抜く。3億超えの賞金首である毒婦・ウメキチがどんな人物なのか、単に興味本位で覗きに来たのだ。そんなことなどお見通しだろうに、笑顔で出迎えてくれてこうやつて歓談をしている彼女の度量の深さに、ナース達は感服するしか出来なかつた。昨日の宴の席では珍しく皆酒が回り、彼女も軽い挨拶だけして下がつてしまつたようだつたが、それでもその所作や眼差し、周りのナカイの羨望の視線からも彼女が同性から憧れを抱かれていることがよく判つた。

実際こうやって話してみても判るほどに、その相槌や笑い方、口元を隠す指の動きにも「色香」が漂う。それなのに口調は清々しいほどにサッパリとしていて嫌味がない。同じ女であることが恥ずかしいくらいに、アンリエッタを含めたナース達は彼女に魅せられていった。白ひげから許可をもらえば、滞在の間ここに本当に見習いで入りたいと思うくらいには。

「マルコ隊長やティーチさんが、お世話になつて聞いたけど、納得ができるわ。だつて二人とも礼儀や作法には厳しいもの…、自分達の部下達にも徹底しているし。」

「昔はてち坊、いえ、ティーチもしょっちゅう怒られてましたがねえ。廊下を走つたり、おねしょがなかなか直らなかつたり。」

「やだ！ ティーチさんつておねしょ直らなかつたんですか？ 意外…」

「たしか7歳くらいでやつと直つたようだけどねえ。マルコ坊やはすぐ直つたのに…」

どうやら会話の内容が、マルコやティーチに移つたようで彼等の幼い頃の黒歴史が暴露され始めた。女というものは、いつの時代もういつた話が好きなのかナース達は楽しげに聞いている。

そんな中、アンリエッタが思い出したかのように梅吉へ尋ねた。

「そりいえば、『一』やつていうものはなんのかしら。以前隊長達が話してたんだけれど、悪魔の実よりもまずいって聞いたわ。」

「ああ、『一』やかい。あれも今となつちや笑い話さ。瓜科の野菜でねえ、別名が苦瓜つていうものなんですよ。名前の通りエグミと苦味が強くてねえ、まあ、普通は生では食べないで、塩もみしてから炒めたりして食べるんですよ。」

「そんなものを食べるの？……本当に食べ物なの？」

「いえいえ、それが食べると肌の調子を整えてくれるし、暑氣障りにも効くんで女の味方なんですよ。で、そいつを生で齧つちまつたんですよ。そりゃえらい騒ぎになりますね。ティーチは悲鳴だかなんだかわからない声を上げるし、マルコ坊やにいたつては泣き出して、いくらあやしても止まらないし。」

昔のことを思い出しているのであるが、サキの表情が柔らかく微笑むのにナース達は感嘆のため息を零した。昨日のマルコの様子からおそらく彼女を思つてゐるのだろうとはすぐにわかつた。密かにマルコはナースの間でも人気が高いので、今回もやっかみが半分あつた為どんな女か確認しようとしたのだが、これが大きな間違いだった。同性からみてもため息が漏れるような女っぷりでは勝ち目が無い。

だが、そこは転んでも只では起きないナース達だ。マルコを落すだとからはもう思考の彼方で、むしろ彼女に傾倒し女として色々師事を受けたいと思うようになつてしまつた。只でさえこの島の女達はレベルが高いのだから、自分達も頑張れば近づけるかもと思つのは至極自然なことだった。

「ねえ、ウメキチさん。船長の許可をもらえた後、私達を、見習いとして弟子入りさせてもらえないかしら。」

「おや、なんですか？」

「だって…女だもの。ゲイシャは女の憧れそのものだわ。近づきた

いじやない。もちろん時間の空いたときだけで良いわ！

頼み込むナース達の剣幕に、サキも苦笑を禁じえない。それでも、白ひげの許可があればと承諾した。以降ナース達が白ひげから許可をもぎ取り弟子達に混じつて稽古に励む姿が見られるようになった。

君が為惜しからざりし命をへー3

それから3週間ほど経つある日、大きな船舶が沖に現れたと見張りの魚人から報告が投げられた。港は大きいため特に問題なく停泊は出来るだろうがどうにも、補給のための停泊ではないようだった。そのため見張りは海賊ではないかと辺りをつけたらしい。

「おや、ひと月ぶりの襲撃つてえやつだねえ…。だが、なにやらキナ臭いじゃないか。本当に海賊なのかい？」

宿の常に使っている離れではなく、支配人や女将などが使う部屋でサキが煙管を咥え紫煙を燻らす。その日は窓の外、海岸の方へと向かっていた。その近くで茶を入れていた女将も、その眉間に皺を寄せその言葉に頷く。

「そうですよ。この辺りには他に島がないってえのに港に入らない…怪しいことこの上ないですよ。」

「そいつあ…もしかしたら囮なんじゃないかね？海軍の。」

いくら海賊でモーガニアとはいえ、この島を最後に消息を絶つていると調べれば直ぐにわかることだ。とはいえ、この辺りは大型海王類が多く生息しているから、その仕業といつともあるのだが。

「で？偵察の奴の報告は？そろそろ戻つてくるんだろう？」

「大変だよう！」

偵察の人間が戻るだろ？と話していたところで、キヌが部屋へ飛び込んできた。その慌てようからしてどうにも嫌な予感しかしない。

「あいつら、海賊じやなかつたんだよー梅吉さん、海軍お偉いさんの私用船みたいだよつ。いま島の連中に触れ回つてゐるから、ノームの旦那方もみんな避難してゐるーセイさんにも伝えておいたから隠れておいた方がいいよう！」

なんだつて海軍の奴等がくるんだいとキヌが爪を噛み苛立ちを隠さない。以前海軍の将校が来たときはサキが相手をしたのだが、そのときには梅吉とは名乗つていない。なんとも言いがたいが本能からか咄嗟の偽名で葛葉（クズハ）と名乗つてゐる。どうしてそう名乗つたのかは自分でも判つていないが、そういう直感には逆らわない方が賢明だと長い時間のなかでわかつてゐる。

「……もしかしたら以前にこの島に来た将校の旦那かもしれないねえ…島の特産物とか気に入つてたし、また来るみたいなこと言つてやがつたからね。つち…何もこの時分にやつてこなくとも良いだらうに…。」

気に食わない輩であるつとも、客は客である。一応様子を見て相手の希望を叶えてさつさとお帰り願おうといふことになつた。だが、それも狂わされることになる。

「まだクズハはいるか？もう他の座敷へ行つてしまつたか？」

「まあまあ！これはサカズキ様ではございませんか。葛葉でござりますか？いかがされましたか。」

「うむ。少し話があつて此処まで來た。いるなら、相手をしてもらいたい。」

「はあ、かしこまりました。お部屋へ案内させていただきますので、少々お待ちくださいませ。」

それを受けて小峰が慌ててサキのいる部屋へ伝えに行く。

「師匠！ 海軍のサカズキ様が、葛葉をだせと。」

「……なんだつて？ 面倒だねえ……直ぐに行くと伝えておくれ。それと坊や達を上手く抑えておいておくれな。」

「ええ、姉さん。に、してもあの男…まさか姉さんを身請けしたいとか言い出さないでしちゃうね。いやですよ、あんな男が義理でも兄になるなんて。」

「よしとくれ。あんな厳ついの好みじゃないよ。断るに決まってるだろ。」

セイの言葉に、嫌悪感を前面にだしたサキが、器用に芸者の姿へと変貌していく。紅を塗り、簪をさして戦闘準備を完了。黒い留袖の裾を翻してサカズキの待つ部屋へと向かつ。

廊下を衣擦れの音だけが支配し、慣れた仕草で部屋の前に座り、中へ声を掛ける。

「葛葉にいざります。お入りしても？」

「来たか。待つちょっとたゞ。」

相手からの返事を待つてから両手で襖を開け、静かに中へと入り戸の半分を開けたまま中へと進む。これはこの宿独特の習慣で、芸者を呼ぶ際、1対1の場合は襖を半分開けることになっている。これは芸者に無体を働くことすれば直ぐに回りに露見するようだということ配慮から生まれた風習で、それを破れば金輪際この島に来ることはできない。

「お久しぶりでいざります、サカズキ様。本日は私に御用とうかがいましたが…どのようなお話でしちう？」

今回は酒も出ていないので茶のみ、客ではなく話しがあるとこつこ

となので向かいへと座るサキに、サカズキは茶を飲みながら話を切り出そうとしない。その煮え切らない様子にサキは首を傾げた。

「サカズキ様？」

「うむ…。」

どうにも団体の『テカイ巖つい男』が、空になつた湯呑みを上げたり下げたりとしつつ、こちらに視線を一切寄越さないのは異様といえよう。その様子からおそらくセイの言つていたく身請けの話が現実になりそつだと内心ため息を零した。

「わしは、ちまちましたのが苦手じやあ。クズハ！ 単刀直入に言つぞ！」

「はあ。何で、『ざこましょ』？」

「わしは、お前を身請けしようと思つちよる。じゃけん、付いて来てくれないか。」

「お断り申し上げます。私は芸者でござります。芸の道を捨てるなんぞ出来やしません。どうかお引取りを。」

一大決心ともいえるようにサカズキが話を切り出すのを、即答でばつさりと切り捨てたサキ。

大体にしてこの島で海軍に対しいい感情を持っているものはまずいない。ついでこのサカズキという男は、サキの生まれた時代によくいる男の傾向そのもので、どうにも彼女からしたら嫌いなタイプなのだ。

顔の厳しさはさておき、正義ということに重点を置きすぎ、周りが見えていないまるで風船がギリギリまで空気を入れられたかのような性格の男。無か有か、善か悪か、まるで縫い代の無い着物のような考え方。少しでも力を入れれば壊れてしまいそうで、極端な、いわ

ば昔の日本帝国軍そのもののよつたな考えは、彼女にとつて嫌悪でしかない。

もちろん、礼儀正しやや金払いの良さなどは評価できるが、それだけである。

嫌悪が強い相手にどうして身請けされなければならぬのか。サカズキに特別な感情などはなく、只の密と芸者の関係だといふに何を勘違いしたといふのか、この男は。

「もちろん、芸事なういへりでもちつともひらつて構わん！ 考えてはもらえんか？」

「サカズキ様、何度も同じことを言わせないで下さいまし。お断りいたします、とお答えさせていただきました。私はこの商売に誇りを持つております。」

口元の笑みが湛えたまま、しかしその田舎の信念を揺るがすものは許さないという、強い意志の炎が燃えている。その炎にサカズキは思わず息を呑んだ。霸氣というものではない、芸に全てを捧げる女の気迫。

「秋空を彩る野鳥はそこを飛ぶからこそ、その良さがわかるつゝえ
もの。手前の駕籠に入れたところぞ良きなんぞ靈むだけですよ。…
：どうぞお引取りを。」

そのままもつ話すことは無いとばかりに、その場に平伏してから部屋を後にするサキにサカズキは拳を握ったまま俯いていた。

サカズキとて、直ぐに了承してもらえるとは思っていない。それで も芸一筋に生きる彼女の生き様に惚れて、身請けしたいとまで思いつめたのだ。結果彼女の信念を折るものと判断されてしまった。

その後、部屋に案内した仲居がサカズキを玄関へと案内する道すがら、サカズキは名残惜しいのか幾度かサキの後姿を目で追いかけて

いた。

そのまま先ほどの部屋へと入れば、中で待っていたのであろう女将とセイが心配そうな表情でこちらを見てくれる。その私選を受けつつ脇息へと持たれかかれば、女将であるタキが焙じ茶を入れて出してくれる。

「ああ、ありがとうよ。はあ…くたびれた。ああ、悪いけどお茶じやなくて酒にしておくれ。」

ちゅうほど良い温度のそれを一気に飲み干して酒を頼めば、タキが苦笑しながら冷酒を注いでくれる。それを立て続けに2杯飲んでやつと人心地がついたのか、大きくため息をついてから天井を仰ぎ見た。その様子に、セイが膝をにじり寄せて尋ねた、

「大丈夫ですか？結局なんだつたんですね？」

「セイの言つとおりだつたよ。私を身請けしたいんだとさ。つはん！速攻で断つてやつたよ。」

あそこまで言つて尚も身請けをと宣言するのならば島からたたき出してやるところだが、ああいつた手合には妙に物分りがいい部分もあるので、おそらくもう来ないだろうと予想できる。なにせあの男の己の信念で動く男なのだ。それを折られるということがどうことか判らないほど、馬鹿ではあるまい。

「梅吉さん、お疲れだつたねえ。」

「任左衛門、どうだつたい？」

玄関でサカズキを見送っていた任左衛門が手ぬぐいで顔の汗を拭いながら戻ってきて、サキに労いの言葉を掛けた。

「ああ、身請けは諦めるらしいよ。申し訳なかつたと伝えてくれつてさ。ま、本人もすっぱりと諦めが付いたようだからいいんじゃないかね。」

「ならいいがねえ。まったくこつちは肝が冷えたよ。奴さん達の船は上手く隠したのかい？あの赤犬が気が付かないんだから策は講じただろううが。」

港には白ひげ海賊団の船が停泊しているのだ。あの堅物がみて暴れだしかねない。それを尋ねれば、満面の笑みで住左衛門が応える。流石は古狸、抜かりは無いらしい。

「ああ、只の貿易船と護衛艦にしか見えないよつこしてるからね。あいつ等は氣にしてないようだよ。島からでたら避難してる旨を庚してあげないとねえ。」

「そいつは上出来だ。もつ、こんなのはつづりだよ。」

幸いこの島には幻覚を見せることに長けているモノが何人かいるため、事前に船にマヤカシを掛けていたのだといつ。その辺りの配慮はさすがとしかいえない。そう思いながら、酒の入った湯のみを傾けながら、安心したようにため息混じりの苦笑を浮かべた。

後日談

「ええ？！、あの赤犬が来てたんですか？！」

「そうなんですね。梅吉師匠を身請けしたいと言つ出しあきました。まったく海軍の分際で身の程を弁えろでござります。」

稽古の合間の休憩中に、臨時で弟子入りしたアンリエッタ達が小峰から事の顛末を聞いて愕然としていた。

確かにあの日は、稽古も無かつたし白ひげの乗組員全員が島の中央にある、施設の病院で一齊健康診断をどうかと言われ全員で行つていたのだ。

船でやる検査にも限度があるからと言つこと也有つて、早朝から全員で施設に籠つていた。それも赤犬の来訪のためにと聞けば納得である。

「にしても、あの赤犬でさえも袖する師匠つて…素敵ね！あかなりたいわー！」

「アンリエッタさん達もこの短期間で踊りも三味線も上達しますし、芸者としての素質は十分だと思いますわ！」

「嬉しい」と言つてくれるのね。そんなこといわれたら張り切つちやうわ。」

なんとも和やかに、他の弟子達と共に歓談していると、そこへマルコが通りかかった。話の内容が聞こえていたのだろう、眉間に皺を寄せている。

「姐さんが、赤犬の野郎に言い寄られたのかい？」

「あら、マルコ様。ええ、でも師匠つたらそれはもうはつきりと断つたんです。あのときの啖呵は忘れられないです！」

「え？え？何ていつてたの？聞きたい！」

赤犬の申し出を退けたという啖呵に興味が沸いたのか、周りの皆が興味深げに小峰に注目する。その視線に少々照れながらも小峰があのときのサキを思い出しながら言つた。

「確かく秋空を彩る野鳥はそこを飛ぶからこそ、その良さがわかる

つてえもの。手前の駕籠に入れたところで良さなんぞ靈むだけです
よ。……どうぞお引取りを。へつていつてました。」

秋空とはいの島で、野鳥とは舞い踊る芸者を指しているのだらう。
芸に生きる芸者を囲つたといひで、舞い踊つていた頃の女ではない
のだといつ意味なのであるが、その言葉にて、他の弟子達も、憧れを
こめたため息を零す。

「あ～…やつぱり師匠はカツコイイわあ。」

「この島じや、いハコのを、く粹クヘイとかく氣風がいゝつていう
んですよー。」

「まあ、なんにせよ姉さんが身請け話を受けなくて良かつたよー。」

ほつと安堵のため息を零したマルコに、皆一様に視線を向ける。
マルコが梅吉に思いを寄せてゐるのは皆周知であるし、なかなか進展
しないのも知つてゐる。

少なくとも、ああいつた切り返しの出来るく良く出来た女ハを、く
モノハにするには少々マルコでは物足りないかもしけないとアンリ
エッタたちは思つた。この頃になるとアンリエッタ達のく女ハとし
ての質も上がつてきて人を見る目といつものが養われてきてゐる。
確かにマルコは魅力的なではあるが、どうにも決定打に欠けてい
るのである。

「…………なんだよい。」

「いえ、マルコ様、いこいらで氣を張つて頑張らないと、いつまで
経つても師匠をモノにできませんよ?」

「そうよね。隊長が頑張つてくれないと。一緒に船に乗つてくれれば、私達も嬉しいんですー散々女遊びしてたくせになんでも落とせないんですか!」

いわれなくとも判つてゐるといいたいところだが、如何せん生きた期間の差が激しそうで、逆にサキに翻弄されっぱなしと云ふのが正直な所だ。それをどうにかしようとして毎回回りをしているのだが、ここにマルコは一つ思い違いをしてゐる。

サキ自身はマルコを本来子供だとは思つていない。しかし子供のようだと甘えてくるから、そう接しているだけのことだ。

要はちゃんと男女の仲というものを理解して向き合えば、それにちゃんと応えてくれること、基本的な所を見落としているだけのこと。そこにマルコが気が付けるのがいつのことなのかはわからないが、島の中ではいつも賭けの対象になっていた。もはや娯楽と化している。

もちらと丘びげは既に手に持つてこないが、落せるまづに賭けていたりする。

君が為惜しからやうし命をへー4

早朝、セイの一日は朝日が昇らぬうちから開始する。

目覚めると、前日のうちに出しておいた着物に香を焚き染めることから始まる。狼となつてから異常に鼻が利くようになつて入るが、この習慣だけはやめよつとは思わない。

その香りは、セイの感覚に合ひつつ調整されてるので常人ではば判るものではない。それでも、この島では特に鼻が利くものが多いため、その程度の香りで丁度良いようだ。

焚き染めている間に、寝泊りしている部屋に併設されている道場で日課の鍛錬をし、その後汗を温泉で流し、身支度を整える。

そして香を焚き染めた着物を身に纏い、井戸で汲んだ水を、自身で世話をしている君影草の手入れをするのだ。身に纏う香も君影草と芍薬の芳香で、無表情ではあるが、それでも彼女にしては穏やかな眼でその香りを愛でている。

彼女の義姉であるサキは、意味ありげに微笑むがそれについては何もいわない。その香りの名のごとく誰かの面影を想つても、それを口に出さない限りはサキも口を出すつもりはないからだ。

勿論彼女が言い出せば、サキの持ちうる能力をフル活用して成就させることもあるのだが、逆にそれを分かつていてから言に出さないの

かもしだい。

着替え終わるその頃には口も昇り、食事の時間となる。義姉の寝泊りをする離れて共に朝餉をとり、その後仕事場である鍛冶場で槌を振るう日々。

最近では、昔海岸で拾つた子供が大人になり、この島へやつてきて一緒に食事をするようになつていて。共に鍛錬をしたり、鍛冶仕事をしたり、義姉の補佐をしたりと子供たちと一緒にできることは多くなつてはいたけれど、相変わらずセイに怒られているし、拳骨を落とされるのも変わつていない。

すでにセイよりも身長も横幅も大きいといふのに、そのあたりが変わつていないこと、内心呆れながらも安堵してもらつた。

マルコが、セイや義姉であるサキと同じ妖怪になろうとしていたことに驚きもしたが、あの義姉の姿を見てお嫁さんにするといつていたマルコのことだ。何が何でもそれを実行するだろう。

まさか、あんな奇妙な髪型になつているとは思わなかつたのだが…。むかしから奇抜な転び方をしていたし、基から常人とは違う視点をしていた子だ、髪型が多少奇抜でもおかしくはないのかもしだい。

「なあ、にいちゃんつていつも同じ番りをさせてるけど、なんの匂いだ? 昔はつかつてなかつたよな?」

「…ああ、そうだな。」

ふいに、ティーチがセイにいつも花の香りをさせてることについて尋ねた。それに対してもセイは、明確な答えを出さず淡く微笑んで有耶無耶にしてしまった。

そんな彼女の反応にティーチやマルコも口には出さずとも、尊敬し憧れる「兄」に口には出せない想い人がいるのであらうと考へた。

（いわないってこたあ、口に出しちゃいけねえ相手なんだろなあ。）

兄思いな弟であるティーチは、ただ、純粋にそんな彼女の想いが成就すればいいと願つてゐるし、幸せでいてほしいと願う。

幼い頃に受けた厳しいけれど、優しい愛情は今もティーチやマルコの中に息づいているから。

今日も鍛錬の合間、セイが何処か遠くを眺めるように海を見ている姿を、見守るように一人で眺めるのだ。

君が為惜しからざりし命をへー5

海賊といえば何を連想するであろう?・酒盛り?・お宝?・冒険?このイナリ島の宿は1件のみ。しかしそうとはいって、白ひげのクル一達が泊まつてもまだ部屋に余りがあるといつ宿は、一体どれだけ広いのか。

この不思議一杯の島は、彼らからしたら冒険をするためにあるようなものなのだ。この宿とて例外ではない。

とはいって、一般クルーには普通の島としか説明していないのだから、冒険に誘えるはずもない。となると自然に隊長格同士であちこち出かけることとなる。

ハルタはこの前ーンザエモンに連れて行つてもらつた牧場で、幻獣たちと戯れることに夢中だし、イゾウはこの島の鍛冶が興味を引いたらしくホームの所へ入り浸り。

ビスターは島で作られるさまざまな果実酒の製造過程を見せてもらつたりして、ナミコールは島に移住してきた魚人達と過ごすことがほとんど。

ある程度の年齢を重ねた乗組員は、温泉とつまい酒と料理に満足している。

「まー坊、久々に手合わせ等やらんか。あの童^{わいじ}がこの年月で、いかに強くなつたか確かめたいからな。」

セイの仕事の手伝いを終えたマルコを待ち構えるようにして、鳥天狗の兄弟に捕まり引きずられる様にして来たのは鬱蒼と繁った森の中。

幼い頃からマルコは彼らに、こういった森の中で遊んでもらつてへいた。

何もない場所での空中戦はいかようにでも戦うことはできるが、こういった動きを制限される場所での戦いも想定していなければならない。

船内での戦いもそうであるし、街中でもあらうる事。

黒い艶やかな翼を羽ばたかせて風を纏いながら此方を見やる鳥天狗達に、マルコも不死鳥へと変化し身構える。妖怪のすごい所は、その体の丈夫さとロギアにも干渉が可能というところである。

此方が渾身の蹴りを放つたとしても、それを風で押し返えしつつ翼のコントロールを奪おうとするし、面白そだからと飛び入り参加したエース（どうやって嗅ぎ付けたのかは謎）。彼が2番隊を率いる隊長であるということは戦闘力の高さもよく解る。しかし鳥天狗にいいように翻弄されるのは、如何なものなか。

本来ロギアは霸氣など一部を除いて、物理攻撃が無効化される為防御を無視した戦い方をする傾向がある。これは、不死鳥であるマルコも、「再生」という能力故に同じような傾向に該当する。

しかし、驚いたことに妖怪には一切これが通用しない。いとも簡単に先ほど飛び掛ったエースの片足を掴んだクロウが、空中でジャイアントスイングをしてコスケへと放り投げ、体勢の整っていないエースの横腹にコスケが蹴りを入れる。

蹴りをまともに喰らつたエースがそのまま地面に激突し、その衝撃に苦しげに呻く。一応手加減をしてはいるようではあるが、能力者のエースが手も足も出ない状態でここまでやられるのを初めてマルコは見た。

（……的確に苦手な角度から攻めてくるねい…。コンビネーションが良いだけに嫌な相手だい。）

元々天狗は集団で行動する種族である為、空中戦では単体でいるマルコには歩が悪い。しかし、あの子供の頃と比べられては、こちらとしても嫌だと思うわけで。

「オレがあん時のガキのままだと思わねえほつがいいよい！」

蒼い熾光を纏いながら力強く張り出した枝を上手く飛び交いながら、マルコの戦闘スタイルである蹴り技を仕掛ける。クロウの死角である左側の下から蹴り上げようとすれば、その後ろからコスケの真空の刃が攻撃を阻もうと襲つてくる。

翼を翻して風をやり過ごそうとしても、クロウがその進行方向へ移動してそれを阻む。

そのまま背中に刃を受けてしまったマルコは、その傷を再生の炎で癒しながら枝から枝へと飛び移る。再生の能力があると判つていてからか、二人の攻撃には遠慮がない。とはいへ、その再生能力にも限度があるから、そこまでこられたら嫌でも白旗を揚げなければならぬのだが。

「どうした童よ、小童のままではないといふのを見せてくれるのではなかつたか？」

「言われなくとも！」

この鳥のジジイドもめーと内心悪態をつきながら、突っ込んで言つては返り討ちにされるという行動を繰り返していく。どちらにせよ、翼や風の使い手である鳥天狗に空中戦を挑む方が間違いであるのだが。

結局ボロボロになるまで転がされ、といつても再生の能力で身体は傷一つ残らないため、マルコのプライドだけが傷ついたといえる。少なくとも白ひげ海賊団1番隊を率いる隊長としての面子など丸つぶれである。

結局のところ、鳥天狗としては再生の能力に頼りきつた捨て身の戦闘スタイルを更生させたかったようであるが、そうなると戦略や他の部分にも関わる為、一朝一夕でどうにかなるようなものではなか

つたよつだ。

「……酷い目にあつたよい。俺あ一応人間だつてのに、手加減なし
かよい。」

「妖怪になりたがつての癖に、よう回る口だな、小童。」
「わらし」

「からからと楽しげに笑う鳥天狗に、恨み言を零しながら氣絶してい
るエースを背負いつつ戻るマルコだったのだが……宿へ戻った後
鹿つてえんだよ。」

そうサキに、呆れた表情で告げられつつセイにまで、冷めた視線を投げられてしまつたマルコはかなり本氣で落ち込んでしまい暫く船に籠り、ティーチに心配を掛けつつイゾウ達に爆笑されたという。

君が為惜しからぬつし命わく一六（前書き）

お氣に入り登録本当にあつがとづけられこます。
別といふか、派生で小峰の話を書こうかと思ひのですが… 読みたい
つていう方はいらっしゃるのでしうか…。

君が為惜しかりやうし命ねく一六

久しぶりにセイと手合せでもしようつと、ティーチとマルゴがセイの仕事場へ尋ねると誰もいない。それに顔を見合わせ首を傾げていれば、そこへサキがやってきた。

「セイに用でもあんのかい？あの子は今農場の方へいつてる筈だよ。……たしか糸を紡ぐとか言つてたはずだが。新しい服でも仕立てるんじゃないかねえ。」

「糸？紡いでどうすんだ？糸作つて服を仕立てるつて……？」

「何言つてんだうね、この子達は。……糸を紡ぐんだから布を織るに決まつてゐじゃないか。基本この島じや全部自給自足なんだよ？糸つむぎから機織り、仕立てまで、島の住民なら性別関係なくほとんどのやつがやるよ。」

折角だから案内しようつとこいつことで、弟子のアンリエッタも伴い4人で農場へと向かう。

「……アンリエッタ、お前姐さんに弟子入りしてんだろ？稽古はどうだ？」

「そうですね、正直きつこですけどそれ以上に楽しいですよ。ただ、長興とかを覚えるのが苦手ですけど。」

道すがらティーチがアンリエッタに弟子生活の塩梅を尋ねれば、和服姿のアンリエッタが笑顔で答えた。キツイと口では言つものの、よほど楽しいのか以前よりも女っぷりが上がつてゐるようにも見える。

極上の女達に師事を願つてゐるのだから、変化がないならば稽古をサボつてこることであるし、眞面目に稽古をしてゐるのだろう。

うアンリアッタの評判も『一からよく聞いていた。

「今はく松竹梅』つていう長唄を教わってるんですよ。」

「それ、いろいろ種類あるけど…俺が知ってるのだとしたら、ずいぶんと色っぽい歌を習つてるんだな…」

「そうなんですよ。あれって解釈すると色っぽいどこひじやないですかけど。」

二人で長唄の話をしているが、ティーチは別に師事を受けていたわけではない。サキがいろいろ歌っているもので気になつたものの題名を尋ねたりして、いるうちに覚えたものだ。

中には子供に聞かせてはまずいだろうという艶めいた歌も多いのだが、芸者というものは何でも歌えるのが当然と考えるサキのことだが、何の気なしに歌つていたに違いない。

余談ではあるが、ティーチやマルコは横笛を嗜んでいる。それは、妖怪達が各々の得意なことをティーチ達に教えていた結果だ。

それに対し、サキやセイが、いつたい子供たちを何にならせたいのだ?と笑つて見ていたものである。止めないのは、何でもやらせて見せることはいいことであると思つて、いるからであろう。とはいえマルコは才能がなかつたのか、吹いても音程にすらならないのできらめている。彼の場合は戦闘スキルにのみ特逸した才能があり、文芸の才能には恵まれていなかつたようだ。

それでも、練習を重ねた甲斐あつてかその腕前は、時折イゾウがティーチに強請つて横笛を吹かせて肴にし、酒を楽しむくらいにはなつていて。芸の道は深く険しいが、少しでその腕前になるということはそれなりに才能もあつたのかも知れない。残念ながら三味線は子供の指では無理があり、ティーチも腹が邪魔で習得には至らなかつた。

島の裏手の農場は作物だけでなく、妖精たちの集落がある。そこで

飼育している蜘蛛が細い糸をだすのでそれを紡いで機織りをするのだ。一般的のクルーはこの島が妖怪の島だということは知らないが、弟子入りしたナース達は弟子入りの時にそれを知らされている為に問題はない。

芸者修行をするというのはこの島の誉れとなるので、彼女達は人間の身でありますながら弟子入りしたとして一目置かれる存在で、男衆から秋波を送られるほどだ。とはいえ、彼女達はあくまで臨時の弟子入りなので、流石に本気ではないだろうが。

そういうしているうちに集落の入口へと到着し、妖精たちが道案内をするべく出迎えてくれる。彼らの身長は凡そ150～160位で華奢な体つきをしている。中性的な容姿が多く服装もゆつたりとしたものが多いので一見すると性別がわからない。子供には羽が生えているのだが成人するとその羽が無くなる為、表で商売を出来る種族の一つもある。

ここは特産は、機織物が中心で絹のような光沢と丈夫さでは定評がある。この糸の原材料である蜘蛛の糸なのだが、特殊な蜘蛛で餌は鉱石のみ。鉱石の硬度により糸の強度も変化し、色も千差万別。主に防具の繋ぎとして使われていたものを任左衛門が、織物などに加工してみてはどうかと提案したところ、人気を博したものである。そんな場所にセイが来ているということで案内をしてもらえば、小型犬程の大きさの蜘蛛が入れられたゲージの並ぶ小屋へとたどり着いた。

しゃりしゃりと、かすかに何かを削るような音があちこちから聞こえる。おそらく餌である鉱石を食べている音なのだろうそれは、不快なものではなく、むしろ風に木立が揺れている音に似て落ち着くような音だった。

「蜘蛛つていうからもつとグロテスクだと思つたら、そういうものね…。むしろ綺麗……」

どこか見惚れるような口調でアンリエッタが言えば、なるほど蜘蛛とは呼ばれているが、精巧なガラス細工のような外見のそれは蜘蛛でありながら芸術品を眺めるような感覚であった。

その一角でセイの姿が見えると4人はそちらへと静かに歩み寄つていぐ。

糸紬用の椅子に座つたセイが、蜘蛛の作った複数の糸玉を繕り合せ1本の糸へと変えて紡いでゆく。黒に近い青い其れを足元の板で調節しつつも均等な太さに紡いでいく様子は、感心するしかできない。椅子の隣に置いてある籠には既に紡ぎ終えた同じ色の糸がたくさん入つている。

「いい色じゃないか。何を食べさせたんだい？」

「刀鍛冶に使う鉱石ですよ。あれは青みが強いので、丈夫をもいかと。」

サキが話しかけても振り返ることなくセイは返事を返す。近くを見れば他の妖精たちも同じ色の糸を紡いでいるようで、鉄紺色の糸が奥の籠に積まれている。

「合わせる色は決まつてるのかい？」

「いえ…これからです。」

「その色ならいろいろ合わせやすかるうよ。紅碧の艶消しがあつただろう? あれか銀鼠ぎんねず、ああ…勿忘草色なんかもいいだらうねえ。」

そうですね…と何やら考へ込んだセイに他の物がサキの言つた色の見本を持ってきて紬終わつたに合わせてみせる。

何時になく真剣に悩むセイの姿に、ティーチとマルコは顔を見合わ

せ楽しげに微笑んだ。

君が為惜しからやうし命をくへ

結局縁取りは銀鼠ぎんねずにする」としたらしく、その色を出す鉱石を食べさせた蜘蛛の糸玉を取りにマル口とティーチが向かつた。糸を紡ぐのに最低でも30玉必要ということだったので、しつかり籠を持つて。

気分はあるべく初めてのお使いのそれで、自分たちの年齢を忘れているのだろうかと思えるほど楽しげに向かつていった。
糸を紡ぎ終わつたセイが、今度はその糸の籠を農場の前に置いてある荷車に積んでいく。そして隣に併設している加工場へ持つていくのだ。

「あの蜘蛛綺麗でしたね。糸も綺麗だつたし…ショールを編むのにあの糸玉どれくらい必要なかしり…。」

「襟巻き程度なら10個くらいで十分だらうよ。気に入った色でもあつたのかい？」

アンリエッタは元から虫が苦手というわけでもなかつた。しかし、先ほどの蜘蛛達は例え虫が苦手でも、あの美しさに思わず見とれてしまふのではなかろうか。

作られる糸も光の加減で淡く光つていて、それでも華美過ぎることもなく控えめな美しさだった。

「自分で糸を紡ぐつてんなら、糸玉だけ買えばいいさ。そつすりや10玉で5000ベリー程度で済む。商品になつちまつたらもつと掛かるがね。」

「だったら私自分で紡ぎます。でも糸車なぐてもできるのかしら

…」

糸を紡ぐだけでも時間が掛かるため、航海中にできるならばと思つたものだが、アンリエッタ達が乗つてゐる船は海賊船でそんな物があるはずもない。

いくら白ひげの船が大きいとは言えあくまで船なのだ。もちろん、船乗りならば余裕があつたとしても無駄な物を載せるようなことはしないものだ。

「ああ、独樂みたいに回して使う小さな糸車があるから、あれを使えば船でもできるよ。その代わりあまり細くはできないがね。」

「後で見せてもらえばいいといわれれば、嬉しげにアンリエッタが頷く。

マルコが惚れている女という事で、彼女に対し良い感情を持つていないナースも多くいた。しかし腕つ節や気風の良さ、艶めいた色氣もあるが何より海賊の気質に似た所が好感が持てる。

そして当の本人であるマルコを相手にせず、母親のようにからかう姿を見ていれば、邪な感情など持つのも馬鹿らしくなつてしまつ。と、いうのもからかわれるマルコの姿は正直情けなく、普段目にす るような頼りがいのある男らしい一番隊隊長マルコの欠片も見出せないからだ。

対して梅吉は、度量も情も深く抱き込んでしまう。男はいくつになつても子供だというが、あのマルコをみて受け止められると考えられる者はいなかつた。それすら平然と受け流しからかう彼女を尊敬する者が続出し、2～30年しか生きていかない小娘では、300歳を超える彼女に勝ち目がないとわかつたのだ。別の意味で白ひげの乗組員の女達が怖くなつていて男たちは近寄らなくなつたのは、この際放つておく事にする。

そんな会話をして、加工場へ着けばセイがすでに機織に糸を通し、準備を整えていた。それを見てセイヘサキが声をかける。

「どれ、ちょいと手伝おうか。それだけの量なら骨が折れるだろうからねえ。自分で作つちまいたい気持ちもわかるが、時間が掛かつちまうだろう?」

「……お願いします。」

たつぱり20秒程考えてからセイが頷く。アンリエッタは籠の横に座り、足りなくなつた方に糸を渡す役目になり楽しげに眺めている。隣同士に座る二人の機を織る音が力口力口と鳴り始め、縦糸に横糸が滑る独特の音以外その場所で音が消えた。

二人が織る速さは、ほかの妖精達のスピードには劣るものアンリエッタには到底真似のできないものだった。なにせ、渡す横糸がどんどん減つていくのだから。最初、二人の機織の場所の横に妖精が立つてている理由がわからなかつたのだが、今ならばよく解る。どんどん機織で出来上がつた布を巻き上げなければ間に合わないということに。それでもその織り上がつた布の均一性や精密性から、質の良さは一目瞭然で。

（ありえない！……運んだ糸がもう半分もないなんて！……ヨウカリつていうのは、何をさせても完璧なの？！）

それでもそのスピードを維持させたいと思うアンリエッタは、必死に糸を一人へ運んでいるとティーチとマルコが中へ入つてきて、現状を把握するなり外の糸の籠を中へと運んでくれる。実際はこの機織は妖精達の術により通常に4～5倍の速さで織れる様になつてゐるのだが、そんなことを彼女たちが知るはずもない。運び終えた糸の全てを織り上げるのに半日も掛からなかつた。後でその事実を知つた3人は恐ろしい物を見るような目つきで機織の機械を眺めていた。

「おいてち坊、ちょっと付き合え。異論は認めん。」「お？いいけど……って、ああ。了解。」

布を織り上げた後、セイは荷台に積み込んだ布と共に、なにやら一人で納得したティーチを連れて別棟へと行ってしまう。それをマルコとアンリエッタ、そしてサキが見送る。その後近場の妖精にサキがなにやら耳打ちをし純白に近い美しい糸を準備させたかと思えば、ノリノリのアンリエッタが嫌がるマルコを引きずり再度加工場へと消えていった。

君が為惜しからざりし命をへー8

2ヶ月とこゝう長いログ期間のあるこの島に、白ひげ海賊団が逗留して一月が経ち残り2週間というところまでになつた。

そろそろ航海の準備をするために臨時の弟子入りをしていたナース達も、本来の仕事へ戻るために本日付けて稽古場に入りをしなくなる。

それでも航海中に自主稽古を続けると約束し、それぞれ梅吉からの饅別を受け取り名残惜しげながらも嬉しそうに稽古場を後にした。

そこへ、セイが顔を出したので、サキは煙管で紫煙を燻らせながら眉を上げて首をかしげた。

普段セイはこの稽古場へは顔を出すことはしない。珍しく顔を出した義妹に、何か話しがあるのだろうと人払いをした上で手招く。

「そんなどこで突つ立つてないで此方へおいでな。珍しいじゃないか、ここへ顔をだすなんざ。」

「ええ、少々…お話があつたものですから。」

昼夜がりの稽古場で差し向かつて座つたセイの表情は些か硬く、傍らに置いた包みに時折視線を投げては俯いてしまう。それを見たサキは黙つたまま、静かに届けさせた杯をセイへと差し出した。

「酒でも入れたらどうだい。」

「はい。」

注がれる酒はとろりとした物で、恐らくじぶろくに近いものなのだろつ。普段は精製された清酒を飲むほうが多いのだが、こういった

時には飾り気のない酒のほうがありがたい。

清酒にはない独特の甘い香りが、強張つていた筋を解してゆくかのようすで、知らずセイは小さくため息を零した。

「こうして一人で差し向かい酒を飲むなんざ、久しぶりじゃないかね。」

「……ええ、移住してきてから何かと忙しかったですからね。」

江戸切子の杯はサキのお氣に入りの物で、濃い青で彩られた麻模様が、どぶろくの白を際立たせていた。それを静かに喉へと送り込めば、鼻腔に広がる酒の香りに口元を緩める。

「話つてなあ。その包みの事だらう? そして…誓約。違うかい?」

酒を舐めながら視線だけをセイへと眺めやつて尋ねれば、セイの瞳と視線がぶつかる。その瞳には、驚愕と後悔の色が濃く浮き出していた。

セイは多くを語らうとはしないものの、その瞳は雄弁に語る。話したとしても、あまり表情が表に出ないポーカーフェイスと、昔ながらの不言実行の性格が災いしてか冷淡な性格と誤解を受けがちだ。実際のところは、思慮深く物事の三手先は必ず考えてから行動し、礼儀正しく心を許した相手にはいくらでも心を碎くような性格。明治から大正にかけての時期に生まれたらしいセイは、剣術にしか興味がない実直な男だったのだという。

生家は鍛冶を代々していたというのだから、跡取り息子だったのだろう。鍛冶の才能もあつたが、それよりも剣術の法が楽しいと感じてしまったセイは、近くの道場に居候をしその腕を磨いていた。

父親はセイを後とりにすると決めて讓らなかつたというから、ほかの弟子達からすれば邪魔だつたのだろう。そして、何があつたのかは知らないが、父の打つた刀と共に山で殺されてしまつたのだ。切り殺した拳句、油を掛けて燃やすという念の入れようで。

それからまた何年か経過して、その人里離れた山で禁術を行つた者がいた。ちょうどオカルトめいたことが流行つっていた時期なのだろう、それを実行しようとした者がセイの亡骸のあつた場所で犬神を作ろうとした。

實際犬神を作るのには何種類か方法があるのだが、どうやら他のものどじちゃ混ぜになつた知識で挑んだらしく、多くの犬を集めて、餌を与えずに檻に押し込めたまま殺し合ひをさせたという。

そして最後の1匹をその者が手を掛け術を完成させようとしたときに、落雷でその人間と1匹が命を落とした。運が悪いのか良かつたのか、その亡骸を糧に、多くの殺された命の慟哭と恨みを糧に、セイは蘇つてしまつたのだ。炎に焼かれ死んだせいなのか炎を纏つた狼として。

ただ蘇つたのならば問題はなかつたが、その姿は人間のものではない。そして偶然近くにいたサキが気がつき手を差し伸べてくれたのだが、そのときのセイは己の姿に混乱しただけでなく、己の内にある多くの負の感情に多い尽くされ何も解らない状態だつた。そして近くにいたサキへとその牙と爪を向けたのだ。

『……つ生まれたばかりにしちゃあ、随分と暴れてくれるじゃないか！落ち着きなあ！！』

サキが本性を現して喉元に噛み付こうとするセイに、狐火で攪乱し

その爪から逃れる。その時点で気がつけばよかつたのだが着物姿の女が、セイには極上の餌にしか見えず、血肉を喰らうことしか脳裏には浮かばなかった。目の前にいる女の腹を引き裂き柔らかい肉を咀嚼し、甘い生き血で喉を潤す。なんという甘美な誘惑！

低く唸りながら姿勢を飛び掛かるとすれば、目の前の女がセイをきつく睨み付ける。

『ちいとオイタが過ぎるんじゃないかい？』

そう言つたかと思えば、青い、蒼い炎が逆巻き女を包んだかと思えば、そこには純白よりも白い青を纏つた九尾の狐がいた。そうして、その四肢で地を蹴つたかと思えばセイの喉笛に噛み付きその身体を大地へ押し付ける。それでもなお暴れる身体を、燃え盛る狐火がセイの半身を焼いてゆき、その痛みでセイの意識は途切れる。

君が為惜しからうつし命をくへり（前書き）

2011/7/3 改

君が為惜しからざりし命をくへー9

次に目が覚めたのはどこかの家の一室の布団の中で、慌てて身体を起こせば傍らに父親の作品である刀が一振り。

それを手にとり、鏡台を眺めれば、そこに映るのは見知らぬ女。思わず空いた片手で口の頬や胸を触れば、鏡の女も同じ動きをする。

そこで己が女になつていると認識した瞬間、手にした刀で鏡台を叩き切り意識を無くすまでのことを思い出した。

『気がついたのかい』

そつ、この声の持ち主を殺し喰らおうと想えていたところだ。

己は人間ではなかつたのか？なぜあのよつた姿になつた？

なぜ人間を食べたいと考えた？

人間は餌でしかないのか？

己は人間？

本当に？

肉の柔らかさや血の甘さにこんなにも食えていふといふの？

そう、この刀などといふ無粋なものなど必要ないではないか。

チガウ

己には鋭い牙と爪がある。

ダメダ

何を『惑つ』ことがある?

ヤメロ

腕を伸ばし、あの細い首を手折ってしまえばいい。

ヤメロ、ヤメロヤメロ…

『近づくなあつ！…！』

手に持った刀を抜き放ち、己の心を侵食しようとする獸の声を払拭するように、田の前に現れた女に切りかかる。

『つうあつ！…！』

女の左肩から脇腹にかけてをまるで唐竹を割るように切り伏せれば、当然女の血を真正面から被る、とたんに霞掛かつた思考がクリアになり、女のうめき声に田を向ければ一刀両断にされ血の海に倒れた女の姿。

その太刀筋は、見事に頸動脈を捉え心臓をも切つたのだろう、その夥しい血の量から女が即死したのだとしか思えなかつた。

『あ……うあ……っ』

返り血を浴びてから、やつと己の仕出かしたことにながついたのだ。その事実に己の血に染まつた手を呆然としながら見詰めていると死んだはずの女の声。

『……随分と、酷いことをしてくれるじやあないか。私じゃなかつたら死んでただろうねえ……？』

ゆるりと起き上つた女の血は相変わらず酷く流れ、その顔色はひどく青白く死人がしゃべっているようにしか見えない。

肩から袈裟がけに切られたといつのごとく、右手で器用に帯を包帯替わりに傷を縛り付ける。それを見てその場に力なく座り込むも、まるで射竦められたかのように視線を女から離す事が出来ない。土気色の肌に血の通つていないうのような唇、それでも薄い唇は緩い弧を描いている。

『まつたくこれじゃあ、この部屋の畳は全部取り換えなくつちやあいけない。……ああ、襖もかい。一じりやあ骨だねえ。』

『な……なんで？！確かに俺がこの刀でつ……』
『殺したはず……ってかい？』

口元では笑みを湛えたまま、しかしさはり辛いのか、ややふら付きながらもゆつくりとした足取りで女が近付いてくる。それを、恐ろしいと思いながらも、身動きが取れない。

手を伸ばせば届く距離まで近寄つた彼女は、静かにその場に座りやすしい手つきでセイを抱きしめた。

『お前さんは、まだ何もわからない状態で目覚めちまつたんだ。大丈夫、ここにはあんたを傷つけるようなものはいやしないよ。みんな訳有りのモノばっかりや。』

『あ、……あなた……は……』

『私かい？私は……』

そこまで話したところで女は倒れてしまい、奥から現れた老夫婦が悲鳴を上げながら介抱した。そして一緒に現れた女が駆け寄るなり、セイの顔を思いきり殴打した。

『ふざけんじやないよ！嫁入り前の女のからだを傷物にしやがって！…どういうア見だいつ？！』

なおも果敢に殴りかかるつとする女を後ろから山伏の姿をした男たちが必死に抑え込む。

『落ち着けい！キヌ！相手はまだ生まれたばかりの赤ん坊ぞ！』

『これが落ち着いてられるかい！ええい！いいから放しなあ！邪魔立てすんなら、鴉天狗の丸焼きししてやるよつ！』

暴れるキヌと呼ばれた女の下半身が蛇体へと変化し、身をくねらせて逃れようとする。それをうまく取り押さえようと、鳥天狗と呼ばれたほうが羽根をバタつかせながら抑え込む。その非現実的な光景に目を見張つていれば、老夫婦に抱えられながら起き上った女がこちらを見て声をかけた。

『私は梅吉つてえ名前の芸者さあ。あなたの名前は？』

『……エヘ、堂守、寵えぐ……』

『どうもつ、りゅうのすけ……あん、苗字持ちかい。ま、いこわ。あんたのこじでの名前をつけてやるつね。女の姿でその名前は不釣り合いだ。そうだねえ……セイってのはどうだい。』

そう言つた梅吉の笑みは何とも楽しげな表情だった。

「何を物思いに耽つてんだい？」

「いえ、昔を思い出していました。お氣になさりや。」

ぼんやりと過去のことをして起こしながら、セイは田の前の義姉の身体へ消えることのない傷を負わせた事や、「己の身体に残る誓約の印、色々なことが脳裏をよぎる。それを胸に留め杯を傍らに置くと姿勢を正す。

「姉さん、いえ、梅吉様、相談がござります。」

「…………聞こつか。」

「己を姉ではなく召前で呼ぶ場合、義妹としてではなく従者として話をする時の会図となつてこる。

「これを……」

そう言つて傍らにおいた風呂敷包みを梅吉の前へと差し出す。差し出されたそれを解けば、昨日仕立てていたものであろう鉄紺色の上着が入つていた。縁取りは銀鼠の刺繡で、釦は深い蒼の艶消し。丁寧に仕立てられたそれは、セイが己のために作ったものではないのがすぐにわかる。

「……覚悟を決めたのかい？」

「……はー。たしかに、この魂は男のもので、体は女で矛盾したものが『』の娘を見るかのように淡く優しげなまなざしです。

「ねえ、セイ、いやお籠之内。お前さんがその命を掛けてもいいと思えるおヒトなのか？」

「……おそれくは。」

「なんだい！あの堅物が必死に『』までやつとして、そんな適切にしか答えられないなら、そんな相手やめちまいなっ！」

「いえ、そうでは、つというよりも、自分はそんな必死になんて！」

「裕の色であんなに悩んで、私の手伝いまでたっぷり時間かけて悩むくじいの相手のくせに何言つてんだい。」

「当つ前じやないですかつ！姉さんだつて、相手が着るものはいろいろ詰むでしょ？！」

「生憎と着物を仕立てるほど懇意にした男なんざいなかつたもんでもね。悩んだことなんぞないよ。」

「…………あの子が不憫じやないですか。」

「ほん一芸者の名前で口説くよつた男に、秋波送られたつて何とも思わなこわ。」

「いえ、あの子は姉さんの名前自体知らないんですからって……もつ、

いいですか。自分の負けです。」「

疲れたよつた表情で傍らに置いた盆の酒を飲みほして、溜息をつきながら酒を手酌で注いで飲み始める。その背中には苦労がにじみ出でているかのようだ。

「結局、そのおヒトと所帯をもつつもつなんだひつへ・なり、ちゃんと挨拶しどがなことねえ……。」「

「いえ、あの、まだそこまででは……。」「

「セイ、あんたね、懸想してる相手の服を仕立てるつてえのはそういうつもりつてことだろうが。私の眼は誤魔化せないよ。めでたいこつたねえ。お相手に送るんならクロウかコスケあたりに押し付けりやいいさ。ごねるようなら焼き鳥か水炊きが好きなほうを選ばせりやいい。」「

君が為惜しからざりし命をへ 20

いい機会だからと、半ば強制で島の医療機関にしばらく滞在していた白ひげに、話があるといわれたサキはその病室へと向かった。人間では高齢になる白ひげから改まって話があると言われば、聞かないわけには行かないだろうということで木造の病院内を一人歩く。妖怪だけではなく体の大きな魚人もいるということで、この病院の扉は通常のサイズ以外にも見上げるような大きなものまで大小様々。もちろんその大きなものには別途通常サイズの扉も設置されている。

そして、一番奥まった場所にある大きな病室の扉の前で、中にいるであろう人物へと声をかけた。

「失礼、梅吉でございますが、『在室で？』
「おつ、来たか。」

この島に上陸した頃よりも血色の良い顔で出迎えた白ひげに、梅吉は会釈をしてから入室した。

「ここでの暮らしはいかがなもんか？だいぶいい顔色になつたようですが。」

「ここに入れられてから禁酒を強いられててな。まったく忌々しいつたらねえ。時折出る酒といえば、苦い薬膳酒だし…」

渋面をつくり、満足に酒が飲めないとぼやく白ひげへ周りのナースたちも困った顔をして見せる。それでも完全な禁酒をさせず、薬効のある酒を適量渡されるだけでもありがたいとは、一応理解はしているようではあるが、満足は出来ないのだろう。

「天下の白ひげとあれひものが、情けないですなえ。昔つかひ過ぎたるは毒といひじやいじやせんか。70過ぎた程度でガタが来るのが人間でさあ。夜泣きする赤ん坊みたいにびいびい泣いたつてしまふがありやせんぜ?」

「…ぐ…言つじやねえか。」

「当たり前ですよ。私の3分の1も生きてない子供じやあないですかい。まつたく…」

ぐぢぐぢと文句を言つて白ひげに對し、聞き分けのない子供に言い聞かせるよつな梅吉。見た目の年はともかく、實際は梅吉の方が白ひげの3倍は年上なので、流石に白ひげも強く出ることはできない。しかも言つことが正論で、確かにナース達も正論を突きつけるが、それでも口のほうが立場が上といつことを利用していくらでも融通をつけめどことが出来るが、しかしこの島ではそもそも行かない。年若いナースでも、實際は白ひげよりも年上といつことがあるのだ。下手なことを言えば、また懐かしくも恥ずかしい尻叩きをされるかもしれない。（實際それを初日にされて、白ひげもおとなしくせざるを得なかつた。）

「この島あ。海軍に目え付けられてんだつてなあ。」

「ええ、そのよつで。隠居も樂じやいさんせんよ。人間つてえのは、手前等の都合で考えなさるんで、これだから私どもも隠れ住まないといけない。ねえ、白ひげの旦那あ。異端なモノつて奴はいつの時代、どんな世界でだつて扱いは同じなんですよ。」

今までの口の歩んできた軌跡を思い浮かべたのであるつ梅吉が、扇

子を片手間に弄びながらそつと訴えれば、白ひげは双眸を閉じなにやら思案する表情を浮かべる。

先だつての宴の席の後で任左衛門へ、梅吉の身柄を預かると請け負つた白ひげではあるが、果たして本当にこの女を手元に隠していくものか。

人間である「」等の常識をも覆す彼等ならば、簡単にその身を守る」とも出来そうなものなのだが……

「田那あ。私等のことを勘違いしてやいませんか？」

「勘違いだあ？」

思案に暮れる白ひげに、梅吉が扇子で口元を隠しながら、視線だけが彼を捉える。一重の田元がゆつくつと細められ、ガラス球のような瞳に白ひげの顔が映し出される。

扇子の端から見える口元は歪められ、その口角があり得ないほどのが曲線を描き出す。

「私たちの能力を持つてすれば、いくらでも海軍の奴等なんぞ追い返せますよ。でもねえ……」「でも、なんだ？」

実際に梅吉たちが戦つたところを見たわけではないが、無傷で大将を追い返すことが可能なのだから、何を隠れる必要があるというのか。白ひげからすれば、そう考えたのだらう。確かに彼女たちならば海軍を追い返すことも、殲滅させることも可能。だが、それはバランスを崩すことなのだと今は思わない。

「人間つてえのはね。共通の敵つてえのを持つと面倒になるんですね。確かに私なら海軍はおろか、世界政府さえも制圧できるで

しう。でもそれをしてどうするつてんです？私等が望むのは平穏。でも絶対的な強さってのは、それを阻むんですよ。」

ほつ…と吐息をひとつ零してから、半ば開いた扇子を閉じれば、ぱちり…と音を立てて。その先を己の脣へと当てる、双眸を伏せる。

その仕草は艶めいたものにも見えるが、反面常の彼女の気風の良さを隠し、弱さをも匂わせるもの。田の前の女がその実妖怪で、己の3倍以上の年月を生きてきた九尾であることを忘れさせめるような。

（やいらの男じゅ、あつという間に骨抜きにされてお終いつてとか。）

「降りかかる火の粉を一々振り払つてぢやあ、本当の平穏つてのはこの世界を私たちが牛耳るより他無いで、」びんじゅつ？そんな面倒事なんぞ、いじりお断りですよ。」

無駄に正義感の強かつたり、汚職の温床になつてゐる海軍や、情報を作操作し真実を隠蔽しつつ下らない人間の保護にいそしむ世界政府。彼等を全て潰しこの世界を手中に收めることなど造作も無いこと。それをしようと思わないのは、人間のことは人間でという考え方とは別に思惑があるからだ。

そもそも妖怪といつものは享樂的で、自分たちの興味のわいたことにしか関心を示さない。そしてその興味もいつまで保つかも曖昧で、一瞬で興味を失うかと思えば、何百年、何千年でも執着をして見せることもある。

そんな彼等が人間を従えて政を出来るのか、と問えば答えは否である。

対して人間は口クがよく働く。口クとは、聴覚、触覚、視覚、味覚、嗅覚、これら五感からくる勘働きの直感の6つの感覺。えてして、妖怪というものはこの感覺のいずれかが鈍いものが多い。逆に言えばどれかに逸脱してしまい、その他まで感覺が回らないものがほとんびだ。

梅吉や義妹は元々が人間であつたこともあり、感覺は人のそれとは違い、研ぎ澄まされたモノへとなつてゐる。鋭い感覺が故の弊害もあるのだがここではあえてそれは語ることはない。

「アウカイつてえのも、色々と大変そうだな。」

「長く生きてるからこそ、まあ、色々とあるんでござんすよ。」

「……で、私にお話とは？」

「……まあ、单刀直入にいえばだ。この島に隠れるのも限界があるだろう？俺の船に乗る気はねえか？」

「私が…旦那の船に…？」

流石にそれは思いもしなかつたのか、梅吉の双眸が大きく開かれる。

「マルコの奴もお前えに惚れてるようだし、ナース共からの信用も高い。腕つ節も強いとなれば文句のつけようがねえ。」

「まー坊はさておいて、なんだつてそんなことを。」

「おーおい、惚れられてる自覚があるのに、さておこてとまあいつが不憫じやねえか？」

「さあ？男女のことも口クに知りもしない、尻の青いガキに迫られたらつて、嬉しくもなんともないですよ。」

「……アイツの父親として、なんといふかいたたまれないといふか… その、なんだ、少しさ意識してやつたりどうだ。」

マルコの名前を出せば、とたんに梅吉の態度は元に戻ってしまう。それに対し少々というかかなり、息子であるマルコに同情してしまった白ひげだった。

その後1時間ほど経つてから、梅吉は病室を後にした。残された病室には腕を組み窓の外を眺める白ひげと、側に付き従うナースのアントリエッタが無言でいた。

そして梅吉が病室を出てから30分も経つた頃、おもむろに病室の扉がノックされる。

「オヤジ、呼んだかい？」

病院へ向かう道すがら、島の住人からまた何かをもらつたのであるう、その両手には風呂敷包みが握られていた。
三十路も当に越えた中年男だというのに、島の住人には小さな子供にしか思えないのであつた。包みを開けば、果物やお菓子などの他に、真珠や水晶なども混ざっていた。

「マルコ隊長… なんで宝石まで入つてるんですか？」

「綺麗だからやるつて言われたんだい。昔も、こうこつた類はよくもらつてたよい。」

綺麗だからという理由で渡す妖怪も妖怪なのが、慣れているマルコもマルコなのではないかと思う。しかしそれは言つことは出来ない。

結局のところ、そのマルコを育てた彼等だからこそ、マルコがそう

いう考えになつたのだから。

「価値とか、わかつてない、とかじやないですよね？」

「一応知つてるけどよい。価値を決めるのは人間だけだろい？」

「まあ、確かに。」

宝石の価値を決めたのはあくまで人間の主觀であつて、他の動物や妖怪からしたらただの綺麗な石ころという認識しかないのだ。そう言つてしまえば、納得せざるをえない。妖怪という存在を認識し容認しているアンリエッタではあるが、やはり人間としての感覚までは脱せ無かつたようだ。

「おい、馬鹿息子。」

「馬鹿は余計だつて言わなかつたかよい。」

「お前、あの女に本氣で惚れてんのか？」

いつもの揶揄かと思ひきや、思いのほか白ひげの表情はまじめな顔で、それに対しマルコも田を見開く。

「いきなり何を言つのかと思えば……愚問だろい？俺あ、ちつせえ頃からあのヒト以外の女なんか興味ねえよい。」

「だったら、精々必死になつて口説き落とすんだな。船の上あ女は少ねえ、いくら腕つ節が強くつたつて狙われねえとは限らねえんだぞ。わざとモノにしちまえ、馬鹿息子。んで、早く俺に孫を見せうや。」

出来るものならやつてみろと言わんばかりの白ひげの態度に、マル

「は言われた」と理解するだけで精一杯だった。

「それって、オヤジ…姉さんが船に乗るってことかよい?…」

いつのまに?…と驚愕と喜びの入り混じつた表情でいる息子に白ひげは、人を食つたような笑みを浮かべて頷いた。

「グラグララ…せつかく俺がここまでお膳立てしてやつたんだ。ちゃんとモノにしゃがれ!」

(お膳立てをしたとしても、あの女狐をモノに出来るかはわからぬ
えがな。)

その胸中は、マルコには明かさず白ひげは微笑んで息子を見守るこ
とにじむた。

2ヶ月とこつログがやつと溜まり、白ひげ達が島を発つまでに残り3日となつた。

白ひげの乗組員達が積荷の準備にいそしむのはもちろんだが、島の住人たちが何やら忙しない。

マルコはここ最近妙に機嫌がいい。そしてセイもこのところ鍛冶場へ籠りきりで、ティーチにかまう余裕もなさそうで、ティーチは何かがあつてマルコにとって良いこと、つまり梅吉が船に乗るのだろうと考へた。この予想は外れるとは思わない。

昔からマルコは梅吉の事で機嫌が良いと鼻歌を歌うのだが、これが聞くに堪えないほどの音程で、流石のセイも閉口し逃げ出すほどだ。現に今も鼻歌を歌つといつ事はほぼ100%彼女が関わつていると云ふことだ…、あと3日でのこの島を出港し離れ離れになるのであれば、もつとマルコは落ち込んでいてもいゝ筈なのだが、その様子は微塵も感じられない。

「マルコ、お前…本当に嬉しいだな。」

「よー…まあねい。」

船に乗ることになつたからといって、梅吉がマルコと一緒になることではないのだが、其処に気が付いていないのか…ただ単に傍に居られることが嬉しいのか…

(こつやあ、絶対に後者だ。マルコのやつ傍に居られるつていう事実だけで喜んでる。まったく…姐さんが絡むとビツじてつ、単純になるんだよ…)

この辺りは、まったく持つて昔から成長していないのかもしない。

良いのか悪いのかといえば半々といったところか、子供のままの純粋な気持ちを持ち続けているといえば聞こえはいいが、マルコのこれは刷り込みにも似た執着で。

絶対にあり得ないことではあるが、梅吉が攫われでもしたらマルコは冷静ではいられないだろう。

つまりそれは弱点そのものになるわけであつて……

（まあ、実際あの人をどうこうできるようなのなんて居ないに違えねえが……姐さんを如何こう以前に、兄ちゃんを突破するのが無理な話だもんなあ……）

梅吉に着く辿り前にセイに一蹴、もしくは一刀両断にされてお終い。といつのがオチだとティーチも理解している。

女性でありながら兄として慕っている彼（女）は、梅吉を姉と慕い従者のように守っている。実際白ひげの乗組員が梅吉に夜這いを掛けようとして、セイに蹴りだされているのを何度も目撃している。

「で、なんでそんなに機嫌が良いのか聞いても良いか？」

「よい！ティーチ、姐さんもこれから船に乗つて俺たちと一緒に来てくれるんだい！また、一緒にいられるよー！」

ティーチがご機嫌な理由を尋ねれば、マルコは全身から喜びのオーラを発しながらティーチへ答える。

その答えの内容に、ティーチはくやはりくと確信した。マルコはく一緒に居るゝといつ目先のことだけしか見えていない。

「そつか！それは嬉しいなー…………でもよ、マルコ、お前、告白成功したのか？」

「…………まだだい。」

とたんにマルコは舌虫を噛み潰したような表情で、つむこてしまふ。

そこそこ女性経験のあるマルコではあるが、何百年も生きてきた百戦錬磨の妖怪、梅吉には形無しなようだ。

いい雰囲気を持つていても、暴走しがちなマルコが無体を働くないようセイが見張っているし、梅吉にも隙がない。現に手を握ることもままならないのが現状なのだ、流石にマルコも落ち込みたくなるのだろう。

「に、しても船に乗るって事はく家族>になるってことだよな？ 姉さん、刺青を入れるのかな。」

白ひげの船に乗るとこいつとは、白ひげの家族になるということである。すなわち家族の印である白ひげのマークを背負うこと。普通の人間ならば心配をしてしまうのだが、彼女は強さも申し分ないから問題は無い。ふとティーチが疑問を口にした。

「姐さんの方がオヤジより年上だけ… オヤジのことなんて呼ぶんだろうな。」

「……確かに…そこは気になるね…」

家族になるのはともかく、白ひげよりもはるかに年上な梅吉が白ひげをなんと呼ぶのかといつのは、一人にとつて最大の疑問となつた。ついでにそれを聞きに行こうと、一人で梅吉が居るであらう離れへと向かうのだった。

「あん？ 私がなんて呼ぶのが気になる？ 普通にオヤジさんでいいんじゃないのかい？」

「だって、オヤジは姐さんより年下だろ？ 抵抗無いのかなと思つてよ

あつさりと一人の疑問に答える梅吉、「ティーチとマルコは拍子抜けした表情を浮かべた。

「一人とも、船の準備をしなくていいのかい？特にまー坊、あんた隊長だらう。上のものがこんなところで油売つてんじゃないよーさつさといきなー！」

眦を上げマルコに仕事をサボるなど怒れば、ビクリと肩を震わせて慌てて仕事に戻るマルコ。それを呆れたように煙管を吹かしながら眺める梅吉にティーチは苦笑した。

「まつたく…どうじよひにも手のかかる子だねえ。」

「そりやしじょうがねえよ。マルコだし」

「そりやそうだ」

昔から変わつてこむマルコなのだからしようがないとティーチが言えば、確かにと梅吉が同意した。

「あんなんで隊長やつて、人様の上に立つてゐつて言つんだから…世の中本当によく解りやしない…」

「いや、あんなんでも普段はちゃんと仕事をやつてるんだぜ？」

少なくとも今まで冷静沈着、切れ者としてマルコは通つてきているだけに、戦闘能力だけではなくそのほかの能力もかなり高いといえる。

その為ナースの間でも人気が高かつたのだ。最近では彼女たちの中でマルコはヘタレであるという認識のほうが強くなってしまってはいるが…

「でも本質が変わつてないなら、いつかボロができるんじゃないかな
え…先が思いやられるよ。」

そういうながら、紫煙を吐き出して梅吉は笑つた。

闇話 幼稚園の思い出（繪書き）

お久しぶりで「ざわこます。
連載ではなく、ちょっととした小話です。

閑話 幼き日の思い出

梅雨を過ぎ、日中は30度を超えるのは珍しくもなくなつたある日の事。

風も無く、湿気を多く含んだ日中、呼吸するのでさえ億劫になる気温の中、藍染の浴衣を肌蹴て、簾で日陰を作った縁側にぐつたりと座り込む人影がひとつ。日陰に居たとしても風が動かなければ、あまり意味もない。

少しでも涼を取ろうと、庭先や玄関などに打ち水をしても、撒いた傍から蒸発し、湿気が増してゆく状態では流石の梅吉と言えど、閉口せざるをえなかつた。

「時代が移り行くたびに、こう年々初夏からの気温が上昇してるようなんだがねえ…これがあれかい？ちきゅうおんданか、だかんだかの影響かい？たまらないねえ…」

それでも子供達には少しでも涼しくと思い沢遊びへ行かせ、来週には長屋の住人が子供等をつれて北へと避難をさせる予定ではあるもの、避難から帰つてきてもこの屋敷はまだ暑いままかもしれない。盥に水を張つて、そこへ足を漬込んで体温を下げようにも、狐という毛皮があるせいか、人姿をとつていても暑さが体内に籠つているような感覚に陥る。

静かな屋敷の中で、ついぞ独り言を漏らしてしまつのも、この気象のせいなのだろうか。

「よし、いい機会だ。建具を変えるとしようかね。」

梅吉たちの住んでいる屋敷は基本が障子なのだが、余りに暑いと建具を夏仕様に取り替えることがある。

元々、京都ではよくあることらしいのだが、暑さに弱い住人が居るために懃々京都まで買いに行つた物である。梅吉は元々江戸生まれなので、こういったものにはなかなか馴染みが薄いのだが、京生まれの者たちが詳しいため試しに変えてみれば、これが案外過(こ)しやすい。

風の通り道を考えてたっぷり打ち水をしてやれば、家の中を風が通り抜けいくため、室内の温度が上がりすぎるということもない。

梅吉の号令のもと、住人総出で屋敷中の障子という障子が取り払われ、畳の日焼けを避けるための冬用の席も一緒に片付けられる。代わりに襖の代りを簾戸(すど)に、障子を御簾(みす)に替えて、簾を掛けたりして少しでも涼しい風が通りやすいようにしてゆく。畳には夏仕様の席を忘れずに広げ、強い日差しに畳が傷まないよう気を使う。

畳に氣を使わないと、腐るのも早くなってしまう。現代ではそうではないかもしけないが、なるべく物を長持ちさせて使い続けていくという、先人の考え方を守り続けているのだ。

そして打ち水を、まるで土砂降りがあつたかの如くたっぷりと撒けば、その気化熱の影響か風が通り抜け始める。

「本当に、危うく干からびるところだつたねえ。」

「おや、建具替えしたのかい？ まったくだよ、ちょっと昔ならば、そこらに打ち水するだけで涼しくなつたもんさ。それなのに近頃の人間ときたら、ぜーんぶくこんくりいとゝで覆つちまいやがつて。これじゃあ、お天道さんの熱さが下がりっこないさあ。」

余りの暑さに耐え切れなかつたのであらう、キヌがずぶ濡れのまま庭先から顔を出してきた。片手には網袋があり、中には泳ぐついでに捕らえたのであろう魚等が入つていた。

それに目を細めて眺めれば、キヌが網の中身をタキの用意した大きい笊に移し替える。すると鰯だけではなく、サザエや鮑なども入つ

ていた。網とは別に持っている竹籠には鳥賊が詰め込まれてい、キヌがどれだけ泳ぎ回っていたのかが窺い知れるというものであろう。

「ちょっと遠くまで泳いでたら、鰯の群がいてねえ。丁度良いくんで、すこしあしかかり捕まえてきたよう。梅吉さん、これの味噌叩き（なめろう）好きだろう？」

「ああ、良い鰯だねえ。建具の衣替えも終わつたことだし、ちいと早いが夕餉の支度でもしようか。沢遊びに行つた坊や達も、そろそろ山から帰つてくるだろう。」

新鮮な鳥賊を刺身にするのもいいのだが、事に住人たちは醤油と摩り下ろした山椒をたつぶりあしらつた、鳥賊の和え物が好物であった。山に自生している山椒の葉を摘みすり鉢で細かくして置く、下拵えし輪切りにした鳥賊を醤油で軽く炒めて、香ばしくなつたところへ山椒をたつぶりと混ぜ込むのだ。

なんともシンプルで豪快な一品なのだが、これを肴に酒を呑むのが住人からすれば何よりのご馳走であつた。子供であるマルコやティーチには、山椒の辛さが不評ながらも、それでもご飯のお代わりをして食べるのだから美味しさはわかるうというもの。

高価な物を何よりのご馳走と考える人間とは違い、旬の物を仲間で楽しむ、この行為を含め、初めてご馳走として楽しむ妖怪達の方が、豊かな生活をしているかもしない。もちろん市場に出回つたものではなく、自分たちで獲つてくるのだから金銭がかからない。その辺りが不自由な人間たちは、恵まれていないのかもしれないのだが。

キヌの帰宅に、他の住人がその獲物だけでは夕飯の材料には少なか

るつと言つもの、丁度山の中腹にある沢で涼んでいた子供と一緒に帰ってきた「一と小峰、そして男衆達が沢で捕られたのだろう川魚を籠一杯にして帰宅してきた。子供たちはと言えば、はしゃぎ過ぎて疲れてしまつたのだろう、クロウとコスケの背中で、すやすよと気持ちよさそうに寝入つてしまつてゐる。無意識なのであるしつかりと握られた手には、黒い羽根が巻り取られてい、いつも悪戯の標的にされている子供達はどうやらちゃんと自分で報復をしていらしい。

と、こうのもうやつて背負つて帰つてくる毎に巻られる羽根の量が増えていくようで、昨日などは小さな禿を作り、住人からからかわれていたのだ。もちろんコスケ達も普段の己の行いを自覚しているだけに、子供たちを怒ることなど出来るはずもない。

さて、海の物に比べて、沢で取れるいくらか小さめのそれ等は、子供達の大好きな骨」と食べられる唐揚げの材料になる。また川エビは纏めて搔揚げにできるし、沢蟹なども甲羅」と食べられる貴重なカルシウム源だ。

『気持ちよさそうに眠つているマルコとティーチを、そのまま寝かせてやりたい』といふはあるが、この時間に眠つてしまえば夜に眠れなくなってしまう。子供はきちんとした時間に眠つてこそ身体はきちんと成長をするのだと、人間にまぎれて医者をしている魔女くマチルナへが言つ。

彼女は人間としてちゃんと籍も持つてゐるのだが、この妖怪達の住まつ屋敷が心地よいらしく、殆どをこの屋敷ですゝじしている。おかげで子供達の健康管理は安心して任せせる事ができる。

「まづら、まー坊、てち坊や。起きなあ……こんな時分に眠つちまつたら、また夜に眠れなくなつまうよ。」

キヌが子供たちを揺さぶり起こせば、眠りから覚めるのを嫌がるようむずがる子供。それはとても愛らしく、つい、絆され寝かせてやうつと言つ仏心が芽生えそうになるが、ここはひとつ我慢と心に決めて揺さぶり続ける。

「んゅ……」

「ねむい……」

なんとか起き上がる子供達だが、一人ともその頭はふらふらと揺れて覚醒にはいたつておらず、マル「などはハ割方は夢の中だ。それでも両の手で目を擦つて起き上がるひつとするティーチに、キヌは微笑ましそうに頭を撫でてやる。

「や、これから夕飯の支度をするから、畑に材料を探りに行くんだけ。働くもの食うべからずってえ、昔から言つじやないか。箸を持つてついて。」

「ん…わかった。ほら、マルコ、ねあれ。おひさまの、てつだいいくぞ！」

「うー……よーい……」

無理やりティーチに揺り起しきされ、半ば泣きかけるも梅吉に宥められれば、スンスンと鼻を鳴らしながらティーチの服の裾を掴み畠へと歩いてゆく。それを苦笑いしながら梅吉が見送っていた。

「と、まあ、昔からま一坊は寝起きが悪いと言つか、起しきされると機嫌が悪くなつてねえ。そのたんびに、宥めるのも一苦労だったさ。

「

「う…梅吉姐さん、いい加減昔の事を引き合いでだすのはやめてくれよー！」

「なんでえ、マルコのガキン時の話なんぞ貴重じゃねえか。聞きたくねえなら、さつさとあつちいってな。」

小さな茶室にて、たつての希望により梅吉がイゾウへ、マルコ達の幼い時分の話を聞かせてやるうとすれば、惚れた女を別の男と二人きりにさせてたまるものかと一緒に乗り込んできたマルコを含めて三人で、午後の茶室にて茶を楽しんでいた。

それに講義をするマルコへ、お前はいなくともいいとばかりに、イゾウが片手で追い払う仕草をすれば、それに対しマルコが今にも射殺さんとでも言つような形相で睨みつける。

傍から見れば恐ろしいのかもしれないのだが、子供の頃の話を聞いていたイゾウからすれば、そんなものが利くはずも無く。ぬかに釘のように、人を食つたような笑みを湛えながら受け流していた。

「いい年した大の大人がみつともない。およしよ。」

そう、梅吉に呆れたように窘められてしまえば、マルコもそれ以上何も言つことが出来なくなってしまう。

「姐さん…」

「なんだいその顔は…情けない面してんじやないよ。」

二人の会話は、姉さん女房に頭の上がらないという夫婦のそれなだが、本人たちは気が付いていないのだろう。イゾウが楽しげにそんな一人の様子を眺めて、他の隊長達の耳に入るのはきっかり30

分後のことだった。

三部 もの流れに添つもの

離れの部屋に漂う香は、梅や菊のように仄かなもので、夜の冷たい空気の中でその香りは強く感じられるようだつた。

藍染の夜着は、緩められその危うさが女の色香をより強いものへと変えてゆく。臥所に横たわり無造作に結い上げられていた黒髪は、床の上に波打つように散らばり、脇息に持たれかかりながら座る男に緩く微笑みかける。

それを受けて、女の手に細いながらも男の手が重ねられ、暫し視線を絡ませては、互いにうつそりと唇を緩ませた。

耳元に唇を寄せて何事かを男がしな垂れかかる様に女へ囁けば、互いに含むかのような笑みを浮かべ、くつりくつりと声を漏らした。

「楽しいねえ…」

「ああ、愉快だねえ。」

男の目尻には朱が添えられ細められたその双眸には、そこらの女など裸足で逃げ出すほどの色香がにじみ出でてい、夜着のまま女と寄り添い睦言を囁きあつ姿など、何かの絵画のよつに美しく淫靡であつた。

「ねえ、姉さん」「なんかい？イゾウ」

イゾウと呼ばれた男が、姉と呼んだ女の肩口に顔をうずめる。それは男女の闇での事ではなく、子供が母親に甘えるかのような仕草で、それを受けた女が、優しくイゾウの頭を撫で付けた。

肌蹴た夜着や臥所から、いかにも男女の仲にも思えるのだが、この二人は恋人同士ではなかつた。ただ、時折肌を寄せ合い眠るだけ。

そう表現されれば、なんとも爛れた関係が想像できそうなものだが、この男女の間にある関係はひどくシンプルで。そこにあるのは家族への愛情。すなわち「姉弟」である。

「ヒトで無くなつて久しいのに、まさか縁にまだ繋がりがあつとは、思わなかつたよ。ねえ、イゾウ。」

「それは俺もさ、姉さん。まさか生きて出合えるなんて、こんなに嬉しいことなんて、そういうだらうさ。」

姉と呼ばれた女、梅吉は肩口に甘えてかかるイゾウの頭を撫でてやる。普段は綺麗に結い上げられているイゾウの黒髪は、洗いざらしで下ろされたまま、鍛えられた肉体ではあれど、甘えるその仕草は女のように艶かしい。

しかし、互いの眼に浮かぶのは純粋な、相手を思い遣る家族への愛情で、その雰囲気とのギャップは激しいものではあるものの、二人には気にするようなものではない。

白ひげの一団がこの島へやつてきてから、初めて梅吉と対峙したイゾウはその夜梅吉の部屋へと忍んできた。

改めて一人で対峙すればわかるのだが、一人の容姿は男女の違いはあれど似ている。

そして、イゾウの過去は謎に包まれている。その年齢も、どこの出身なのかも。

だが、二人には過去はどうでも良い事で、対峙したときに「同属」であると「理解」した。それだけで十分。

正しくは、梅吉の人間としての血族ではない。しかし、妖狐としての血族であると感じたのだ。恐らく隔世遺伝か、いわゆる先祖がえりと言つものなのである「イゾウは、妖狐としての特色が色濃く出していた。」

この世界には妖怪はないのだが、過去に梅吉達のよつて世界を渡つた妖怪がいたのかかもしれない。その妖怪がどうなつたのかは今では知る術はないが、この世界の人間と結ばれその血を残していたのである。

そしてイゾウは妖狐として半人前とは言えどその血に目覚めている。すなわち、通常の人間とは違う時間を過ごしてきていたのである。ことは想像に難くない。

「今日は随分と甘えたじゃないかい？」イゾウ

「ああ……一緒に船に乗るのは、俺あ贊成だがねえ、姉さん。やはりマルコに姉さんをくれてやりたくないよ。あいつは、まだまだ子供だ。」

マルコが梅吉を女として心を寄せていることは、イゾウも解つていたが、せっかく出会えた姉を、簡単に渡したくはないらしいのか、臥所に梅吉を押し付けてその身体の上に乗り上げる。あたかも男がくその気で女を押し倒すかのようだ。

「おやおや、私がいつ、ま一坊のものになるなんて言つたかね？私のく名前の意味くに気が付かないような子供に靡く氣なんざ、ありやしないねえ。」

臥所へ押さえ付けられ、天井を背景にイゾウを眺めながら、心外だと言わんばかりに肩眉を上げて梅吉が答える。仰向けになつていてもその豊満な双丘は形を崩さずに、着物を常に着ているためか腰の括れは些かないものの、それでもその魅力は溢れんばかりで。妖狐の特色であるく色香くが辺りに漂う。通常の男ならばその色香に我を失うのであるが、半人前とはいえイゾウも妖狐であるため、この色香は効かない。代わりに思うのは、やっと出会えたこの姉を、

生半可な男に渡したくはないといつ、やや過保護な家族愛。

「なら、いい。暫くは俺の姉さんでいておくれな。すぐに他の男のものになるなんぞ、ごめんだ。」

そのまま拗ねたように、梅吉の胸に甘えるように頬を寄せてくる弟に、梅吉は苦笑を漏らしながらその腕に抱きしめる。

「まつたく、我が弟ながら、甘つたれだねえ。」

そうして、また二人は額を合わせてクツクツと喉を鳴らして笑いあつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2825t/>

お気に召しませ

2011年10月6日18時29分発行